学校法人 同志社

DOSHISHA JIHO

同志社時報

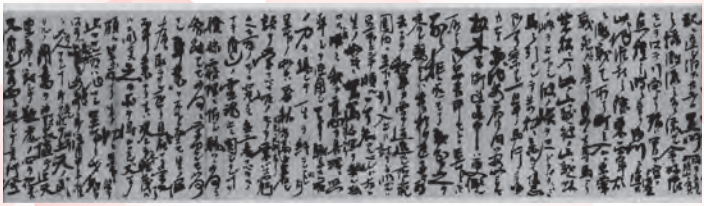
2026.10
No.162

特集

■京田辺キャンパス開校40周年記念座談会



新島　襄の言葉



生（せい）のごときは日暮れて途（みち）遠く、なお克（よ）く駑馬（どば）千里を駆（か）くる能（あた）わずといえども、ただただ我が良心を真理に照準して使用し、天より賦与（ふよ）するところの力を竭（つく）して一生を終わらんと欲するのみ。

出典：1882年7月28日付　徳富猪一郎（蘇峰）宛書簡
同志社編『新島襄の手紙』（岩波文庫）167頁／『新島襄全集』第3巻222頁所収
（『同志社アーカイブス』目録番号0065 ファイル20065002）

大学大学院ビジネス研究科教授
キリスト教文化センター所長
山下（やました）　貴子（たかこ）

１８８２年（明治15年）、新島襄が愛弟子の徳富猪一郎（蘇峰）に宛てた手紙の一節です。同志社の発展と、やがての大学設立を願って各地を奔走していた頃に書かれました。心を許した相手だからこそ、新島は自らの本心を率直に書き記しています。

新島はここで、自分を「日暮れて途遠く」、千里を走りきれない「駑馬」にすぎないと書きます。日が暮れてもなお道は遠い、足の遅い自分に大きな仕事をやり遂げる力はない――そうした限界の自覚が、まずありのままに語られます。

けれども新島は、そこで立ち止まりません。ただ自分の良心を真理に照らして用い、天から与えられた力をすべて出し切って一生を終えたい、と続けます。優れた才能や、成し遂げた事業の大きさではなく、授かった力を最後まで使い切ることに、生きる意味を見いだしているのです。

大きな成果を競い、効率や能力ばかりが問われがちな時代にあって、新島のこの言葉は静かに問いかけます。自分に与えられた力を、何のために、どこまで尽くして生きるのか。足の速さではなく、最後まで走りきろうとする心を、新島は私たちに手渡しているように思います。

学校法人 同志社
The Doshisha

2026年度安中・同志社新島講演会

学校法人同志社と群馬県安中市は2023年7月17日に文化教育等の包括連携協定を締結し、締結式と記念イベントを行いました。その翌年から毎年、安中・同志社新島講演会を開催しています。

7月11日(土)、これまでと同様に新島学園中学校・高等学校礼拝堂で開催し、約130人の参加がありました。パネルディスカッション「新島襄アニメをもっと楽しむために」では、同志社大学キリスト教文化センターの森田喜基教授のコーディネートのもと、アニメの中で語り手と新島八重役を担当された、声優の上田瞳氏(大学政策学部卒業)、岩井均安中市長、湯浅康毅新島学園理事長・学園長、大学経済学部横井和彦教授の4名が幅広い内容について話し合いを行いました。



新島学園中学校・高等学校聖歌隊による
ミニコンサート



パネルディスカッション



岩井均安中市長による挨拶



湯浅康毅新島学園理事長・学園長による挨拶

同志社大学
Doshisha University

京田辺キャンパス開校40周年記念事業 キックオフイベントを開催

京田辺キャンパスは2026年に開校40周年を迎え、2026年4月22日に記念事業のキックオフイベントがローム記念館で開催されました。本イベントは、主に新入生を対象に、京田辺キャンパスで学び、活動する魅力や楽しさなどを伝え、他学部との繋がりや地域との関わりなどについて理解を深めるとともに、2026年が40周年の記念の年であるとの意識を持ってもらうことを目的に企画されました。
当日は、阪田真己子文化情報学部長の司会により、京田辺キャンパスに拠点を置く7学部・研究科長から、各学部・研究科の紹介があり、学びの特色や京田辺キャンパスとの関わりなどが語られました。最後に、穐山洋子副学長から、「学部の枠を越えて、様々なことに挑戦してほしい」との学生に向けたメッセージが送られ、盛況のうちに幕を閉じました。









同志社女子大学
Doshisha Women's College of Liberal Arts, Founded in 1876

韓国・東亜放送芸術大学とのスペシャルイベント「世界を動かすアジアポップ」を開催

韓国・東亜放送芸術大学（以下、「DIMA」と記載）との学術連携協定締結を記念し、本学京田辺キャンパスにて、共催イベント『世界を動かすアジアポップ』を開催しました。DIMAの教授による基調講演や本学教員とのパネルディスカッションでは、日韓の音楽産業の未来について議論し、DIMA卒業生によるミニライブのほか、K-POPのボーカル指導を体験できる公開ワークショップも実施しました。約400名が来場し、音楽を通じた交流と学びを深め、今後のさらなる教育・研究連携推進に向けた第一歩となりました。









『球技大会（高校）』

高校では、6月2日（火）に球技大会を実施しました。今回は時間を3つに区切り、1学年あたり3時間程度、学年ごとに時間をずらしての開催となりました。

生徒は男子サッカー、男女混合バレーボール、女子ドッヂボール、男女混合王様ドッチビーのいずれかにエントリーし、体育館（Lアリーナ）と東グラウンドを全面使用して競技を行う予定でした。しかし、当日は生憎の降雨に見舞われ、急遽大半の競技を３つの体育館（L、M、Sアリーナ）での実施に変更し、規模を縮小しての進行を余儀なくされました。試合数は減少したものの、生徒たちは競技や応援を通じてクラスの親睦を深め、充実した時間を過ごしていました。

運営を担った生徒会にとっては、今年度初の大きな行事でした。突然の大幅なスケジュール変更にも臨機応変に対応し、最後まで見事にやりきることができました。



歓喜の1年生！　王様ドッチビー・勝利の瞬間



白熱の2年生!男女混合バレーボール



雨ニモマケズ!サッカーを楽しむ3年生



魅せるチーム力!3年生男女混合バレー

中学・高校　体育祭

5月12日（火）に高校体育祭を、5月13日（水）に中学体育祭を、本校第1グラウンドでそれぞれ開催しました。

高校体育祭は晴れ間が広がる空のもと行われ、吹き抜けるさわやかな風も心地よい、まさに体育祭日和の一日となりました。最初の種目である「宅配便リレー」から最後の「クラス対抗リレー」まで、生徒たちは一つひとつの競技に全力で挑み、会場には絶え間ない声援が響き、生き生きとした笑顔があふれていました。

中学体育祭は晴天に恵まれ、気温が高い中での開始となりました。生徒たちは仲間と声を掛け合いながら、競技や応援に一生懸命取り組み、それぞれの場面で素晴らしい姿を見せてくれましたが、昼過ぎから落雷の危険性が高まったため、午後のプログラムは中止となりました。楽しみにしてくださっていた皆様には残念な形となりましたが、生徒の安全を最優先に考えた結果の判断であり、ご理解をいただけたのではないかと考えています。

両日とも平日の開催ではありましたが、多くの保護者の方々にご覧いただき、高校生徒自治会や中学生徒会を中心に生徒たちが一丸となり、たいへん盛大で見応えのある行事となりました。


高校クラス対抗リレー


高校クラブ対抗リレー　スピード


高校女子騎馬戦



中学徒競走


中3学年綱取り


中学入場行進

芸術鑑賞

６月25日(木)に中学・高校合同で芸術鑑賞を行いました。

今年度は京都市交響楽団の皆様による演奏を鑑賞しました。指揮・ピアノ演奏に加え、楽曲の魅力や聴きどころについてわかりやすくお話しくださったのは、作曲家として幅広く活躍されている宮川彬良氏です。鑑賞会の始まりには、オーケストラの演奏に合わせて讃美歌を歌唱し、礼拝の時を持ちました。その後、「クラシック名曲セレクション」では『四季』より「春」や『子犬のワルツ』などの親しみ深い作品を、「ディズニー名曲セレクション」では『ファンタジア』メドレーをはじめとする華やかな楽曲を鑑賞しました。今回鑑賞した楽曲は、全て宮川氏によって編曲された作品でした。生徒たちは、編曲者ご本人による指揮やピアノ演奏に加え、楽曲に込められた思いや工夫についてのお話を直接伺うという貴重な機会に恵まれました。迫力ある生演奏と温かく親しみやすい語りを通して、音楽への理解を深めるとともに、その魅力をより身近に感じることができました。豊かな響きに包まれながら、芸術の素晴らしさに触れる実り多いひとときとなりました。







高校生　球技大会

6月11日(木)、好天に恵まれた中、本校球技大会を開催しました。クラス対抗によるドッジボール競技を実施し、生徒たちは人工芝グラウンドで熱戦を繰り広げました。各クラスが作成したオリジナルTシャツを着用し、仲間と心を一つにして試合に臨む姿が印象的でした。会場には大きな声援が響き渡り、白熱したプレーとともにクラスの団結力が一層深まりました。球技大会を通して、生徒たちは協力することの大切さや仲間との絆を再確認し、笑顔あふれる有意義な一日となりました。





日本文化の日

6月22日(月)の昼休み、生徒会主催による「日本文化の日」の催しが行われました。コミュニケーションプラザには大きな笹が設置され、生徒たちは思い思いの願い事を短冊に書いて飾りました。多くの生徒が浴衣で集い、友人同士で記念写真を撮影するなど、和やかな雰囲気の中で交流を深めていました。





同志社国際学院
Doshisha International Academy

初等部:『京都府私立小学校連合会 第33回合同音楽会』

6月6日(土)に京都コンサートホールにて京都府私立小学校連合会主催の第33回合同音楽会が開催されました。DIAでは毎年4年生が学校の代表で出演しています。今年はディズニー映画より『リメンバー・ミー』(作詞/作曲:Kristen Anderson-Lopez, Robert Lopez)を披露しました。学校での練習とは異なり大きなホールの広い舞台での演奏で少し緊張気味でしたが、DIAの児童らしく生き生きと表現することができました。



国際部:『Experiencing Filipino Culture Through Food』

Throughout the month of February, our Activity Program which revolves around the theme 'Taste of the Philippines' provided students with a unique opportunity to explore the rich culture of the Philippines through some of its common traditional Filipino food.

Students shared meals, exchanged conversations, and socialized in a warm and welcoming environment. These shared experiences helped strengthen friendships and foster a sense of community among participants.

Food is an important part of cultural identity, and this program aimed to provide students with an authentic and enjoyable way to experience the Philippines beyond textbooks and presentations. By tasting, preparing, and sharing Filipino dishes, students gained valuable insights into the country's culture, values, and traditions.

The February Activity Program was a meaningful celebration of cultural diversity, bringing people together through the universal language of food.





「なかよし遠足」

春の心地よい天気に恵まれた４月２８日、1年生と6年生がペアを組み、元気に京都市動物園へと出発しました。出発前は緊張気味だった６年生の子どもたちも、いざ1年生を前にすると、自然と目線を合わせて優しく語りかけ、しっかりと手を繋いで歩き出しました。

動物園では、１年生は６年生手作りのスタンプラリーカードを首にかけ、グループで動物を見て回りました。その後、岡崎公園に移動し、お弁当の時間をもちました。1年生が嬉しそうに自分のお弁当を「見て！見て！」と誇らしげに見せ、6年生がそれを笑顔で聞くという温かい光景が広がっていました。お弁当を食べた後は、6年生が事前に計画したレクリエーションを一緒に楽しみました。

最上級生としての自覚が芽生えた6年生と、お兄さんお姉さんにあこがれ、信頼を深めた1年生。“なかよし遠足”のネーミング通り、“なかよくなった”と実感した、笑顔あふれる素敵な一日となりました。



親子で動物園づくり、そして京都市動物園への遠足（5歳児）

5月18日（月）は5歳児クラスの参観日でした。今年の5歳児は、5月27日（水）に京都市動物園へ園外保育に出かけることになっていましたので、その導入として、参観日では親子で動物園作りを楽しみました。グループに分かれ、保護者の方やグループの友達とどんな動物がいるか、何を作るかなどを相談し、素敵な動物園が出来上がりました。



動物園マップを見ながら楽しみにする5歳児



5歳児参観日　親子製作



動物園マップを見ながら楽しみにする5歳児



待ちにまった動物園、いろいろな動物に出会いました。

6月24日は同志社幼稚園129周年

4歳児組は、幼稚園の誕生日に向けて、他の学年には内緒で、誕生日ケーキを作りました。段ボールに生クリーム色の絵の具を塗り、画用紙でフルーツを作ってペタペタと貼り付けています。

24日当日は、みんなで合同礼拝にてお祝いをいたします。きっと、幼稚園も喜んでくれることでしょう。





インタビューの２人

私の志

いちごポタジェ株式会社 代表取締役社長

田口（たぐち） 沙緒理（さおり）さん



現場のリアルに向き合い、食という究極のインフラを守りたい。生産者や地域と手を取り合い、持続可能な農業の仕組みづくりに挑んでいます。



1985 年、大阪府生まれ。2008 年、大学政策学部卒業後、アクセンチュア株式会社に入社。その後、再生可能エネルギーのベンチャー企業勤務を経て、12 年、いちご株式会社に入社。18 年、農業支援事業を立ち上げ、宮崎県で展開。農林水産省が推進する「ローカルフードプロジェクト」に宮崎県の事業者と共に参画。23 年「みやざきローカルフードプロジェクトアンバサダー」第１号。同年、グループ会社宮交シティが設立した農業法人「いちごポタジェ」の代表取締役社長に就任。

Interview

インタビューの２人

私の志

福井放送株式会社 アナウンサー

増谷 寧々（ますや ねね）さん



周囲の支えに対する感謝の思いを大切にしています。スタッフや取材先、そして画面の向こうにいる視聴者の存在があるからこそ仕事ができます。日々の放送や万が一の災害時に、自分の顔を見て声を聴いて安心してもらえる存在を目指しています。



1996 年、福井県生まれ。2019 年、女子大学表象文化学部を卒業し、福井放送株式会社に入社。現在は報道制作局のアナウンサーとして、夕方の情報番組「おじゃまっテレ」（出演は水～金・スタジオ MC）や「にじパレ」（土・スタジオ MC ＆中継リポーター）、ニュースなどを担当。ディレクターとしても企画から出演までを自ら手掛け、地域に密着した発信を続けている。

Interview

No. 162
2026.10

目 次

〈表　紙〉比叡の麓、同志社の志を未来へつなぐ
鎌田　伸一
（中学校・高等学校事務長）
辻　英俊
（株式会社上原フォートスタジオ）

〈表紙裏〉
新島　襄の言葉
山下　貴子
（大学大学院ビジネス研究科教授／
キリスト教文化センター所長）

〈口　絵〉
■法人
2026 年度安中・同志社新島講演会
■大学
京田辺キャンパス開校 40 周年記念事業
キックオフイベントを開催
■女子大学
韓国・東亜放送芸術大学とのスペシャルイベント
「世界を動かすアジアポップ」を開催
■中学校・高等学校
『球技大会（高校）』
■香里中学校・高等学校
中学・高校　体育祭
■女子中学校・高等学校
芸術鑑賞
■国際中学校・高等学校
高校生　球技大会／日本文化の日
■国際学院
初等部：『京都府私立小学校連合会
第 33 回合同音楽会』
国際部：『Experiencing Filipino
Culture Through Food』
■小学校
「なかよし遠足」
■幼稚園
親子で動物園づくり、そして京都市動物園への遠足
（5 歳児）／6 月 24 日は同志社幼稚園 129 周年
〈私の志〉インタビューの 2 人

私の志

「食」という究極のインフラを未来へつなぐ
生産者が報われ、持続する未来へ現場の一歩から食の基盤をつくる……田口　沙緒理さん　4

地域の魅力を自らの言葉で発信
「人」と「言葉」と真摯に向き合い安心を届ける存在になりたい……増谷　寧々さん　8

特集

京田辺キャンパス開校40周年記念座談会
京田辺市×同志社大学×同志社女子大学　キャンパスの変遷、そして地域と拓く未来像
……上村　崇／宿久　洋／天野　太郎／水船　昌彦／吉岡　康博　12

特別寄稿

同志社と京田辺のゆかりを辿る……大学同志社社史資料センター　23
同志社女子部創立150周年記念ツアー
〝同志社女子部のはじまりを訪ねて〟2026年8月17～23日……学校法人　同志社　36
同志社女子部創立150周年記念ツアー〝同志社女子部のはじまり〟を訪ねて　実現まで……女子大学名誉教授　坂本　清音　36
「同志社女子部のはじまりを訪ねて」サンディエゴ・クレアモント・ロサンゼルス訪問記…同志社同窓会　南野　紫乃　38

コラム・エッセイ

「エンジニア＝男性（?）」を変える
男女共同参画意識への視点と教育の役割……大学政策学部教授　田中　秀樹　43
AIの時代と長編小説……女子大学表象文化学部准教授　木島　菜菜子　44
香里中学校・高等学校と学校周辺の歴史から
日本画制作を通して平和を考える……香里中学校・高等学校美術科教諭　水江　亮太　45

同志社の一貫教育　hitohito-Li

……同志社一貫教育探求センター　所長　川満　直樹　46

建物案内

山本覚馬記念アリーナ（大学）……49
Library & Exhibition Room（国際学院）……50

同志社の逸品

白鷺会　記念碑……中学校・高等学校　51

私の研究・私の授業

文学部文化史学科での学び……大学文学部文化史学科　鍛治　宏介　53
クリーンエネルギー社会を拓く「燃焼研究」の最前線……大学理工学部 准教授　堀　司　56
生成AI時代におけるプログラミング教育への新たな挑戦……女子大学芸学部准教授　尾関　基行　59
デザインで自分自身を表現してみよう。……国際中学校・高等学校 芸術科（美術）教諭　北川　浩司　62
宝くじの当せん確率・期待値を再現して、リスクを体験・実感する……中学校・高等学校 数学科教諭　園田　毅　65
子どもたちの「つぶやき」から立ち上がる学び……小学校教諭　江間　記世　68

レクチャー

ビジネスと経済における良心……大学長　小原　克博　71
大学客員教授・オックスフォード大学教授　ヒュー・ウィッタカー

新刊紹介

災害と福祉をつなぐ知の挑戦―『災害と福祉の交差点―理論・方法・実装の越境と連結―』／立木茂雄先生退職記念論文集編集委員会（編）
中小企業とアントレプレナーシップ―危機や逆境を乗り越える企業家活動プロセス―／関　智宏著
中国鉄鋼業／銀　迪著
現代中国という問い／村田　雄二郎著
ブラック・ウイメンズ・カルチャー―音楽からみる人種と性の闘いの物語／臼井　雅美著
天使の哲学――中世哲学入門講義／石田　隆太著
和歌が生まれるとき／大山　和哉著
職場・学校のセクハラ・パワハラ　ハラスメントの法と判例／吉川　英一郎著
「日本式介護」の中国進出―高齢者ケアの現地化プロセス／郭　芳著
リトルトーキョーは語る：凝集・越境・包摂の日系アメリカ史／南川　文里著
近代の政治家と京都の別荘庭園　琵琶湖疏水がおずぶ水脈と人脈／佐野　静代著
拝米という病／山上　信吾著
ソーシャルマーケティング―行動変容で社会的価値を共創する／瓜生原　葉子著
自立生活センターによる重度障害者の自立生活移行／鈴木　良著
子どもはどのように音を聞いているか／嶋田　容子著
こども支える地域づくり入門―日本・アメリカの「つながり」の実践から／新谷　龍太朗著

同志社クローズ・アップ

同志社創立150周年記念事業を総括するための座談会……法人事務部　創立150周年記念事業事務室　87
公開シンポジウム「リベラリズムとポストリベラリズムの対話」開催……大学国際課　92
『食品開発プロジェクト』の取り組みについて……女子大学生活科学食物栄養科学科教授　杉浦　実　94
感性OSとしての放課後　-学びプロジェクト13年-……中学校・高等学校教頭・技術科教諭　沼田　和也　97
「弦楽オーケストラ研究会」の3年間……香里中学校・高等学校音楽科教諭　水上　陽一　100
見えざる一本の柱　女子部創立150周年記念礼拝　森一郎先生……女子中学校・高等学校教頭・『清風』編集監修　酒井　由行　102
きらり輝く生徒へのインタビュー　～トライアスロンの魅力～……国際中学校・高等学校教頭　二股　一郎　106
ようこそ！DIA Library へ！……国際学院初等部副校長　ロハス　亜紀　109
たくさんの愛を受けて　～たてわり活動を通して～……小学校教諭　北山　亜耶　112
真剣に遊ぶ経験　～小学校教育へ円滑に接続するために～……幼稚園園長　矢田　貴美代　115

●本誌では学校法人同志社の各学校名から「同志社」を省略して、左記のとおり表記しています。
大学＝同志社大学、女子大学＝同志社女子大学、中学校・高等学校＝同志社中学校・高等学校、香里中学校・高等学校＝同志社香里中学校・高等学校、女子中学校・高等学校＝同志社女子中学校・高等学校、国際中学校・高等学校＝同志社国際中学校・高等学校、小学校＝同志社小学校、国際学院初等部・国際学院国際部＝同志社国際学院初等部・同志社国際学院国際部、幼稚園＝同志社幼稚園

●記載の所属、役職、職位、学年等は取材時点のものです。

私の志



田口（たぐち）沙緒理（さおり）さん（農業法人代表）

「食」という究極のインフラを未来へつなぐ

生産者が報われ、持続する未来へ現場の一歩から食の基盤をつくる

開発経済に関心を抱いて政策学部へ。一貫して追究してきたのは「本当に必要なインフラとは何か」という問いでした。たどり着いたのは「食」と「農業」。土の香る現場で試行錯誤を重ねながら、持続可能な農業の仕組みづくりに挑む日々を伺いました。

現場での実践が紡いできた一本の道

――大学の政策学部への進学動機をお聞かせください。

田口　高校時代、フィリピンの貧困地域スモーキーマウンテンを調べる機会があり、開発経済や貧困問題に興味を持ったのが原点です。自分の周りとはまったく違う環境を知り、状況を変えたいという強い問題意識が芽生えました。ただし一つの分野を深く掘り下げるよりは幅広く勉強したいという思いがあり、ちょうど開設されると知った政策学部への進学を決めました。

――どんな学生時代でしたか。

田口　阿部茂行先生のゼミで開発経済学を学びながら、AFSという国際教育交流団体でボランティア活動に打ち込みました。ホストファミリーを探す部署の責任者を務め、一人の留学生の未来やそこから育つ国際交流の芽を摘んではいけないという一心で、一軒一軒を訪ね歩いたものです。卒業後も約2カ月間、フィリピンのNGOで活動しました。ストリートで保護された女の子たちを学校で学べるようにするための施設で、ドレミさえ知らない彼女たちに音楽の基本を教えました。自分の当たり前が相手の当たり前ではないという現場での気づきは、今でも大きな財産です。

――そこからITコンサルティング会社に就職されたのはなぜですか。

田口　NPOやNGOに関わる中で、経営や資金繰りでつまずいて活動が困難になる現実を見て気づいたんです。志ある組織の継続にはビジネスの仕組みが必要だと。では自分が何に挑むかを考えたとき、根底にあったのは「インフラ」への関心でした。当時はITこそが現代社会の共通基盤だと考えてITコンサルティング会社に入り、東日本大震災を機に電力というインフラの重要性を痛感して、再生可能エネルギーのベンチャー企業に転職。その会社が現在の親会社の傘下に入り、事業継続に欠かせない財務を学ばせていただいてから、新規事業を模索する部署に移りました。そこで「本当に重要なインフラとは何か」を突き詰めて考えたんです。無人島へ行ったとして、IT・電力・お金がなくても人間は生きていけるかもしれない。けれど食べなければ、絶対に生きていけない。万人に共通する究極のインフラは「食」であり、それを生み出す「農業」であることに行き着き、社内ベンチャーとして農業支援事業を立ち上げました。



圃場に通う中で直面した課題と「アナログ×IT」

――農業ではなく「農業支援」だったのですね。

田口　親会社が不動産会社なので、最初はビニールハウスを所有して農家さんに貸し出す「農業の大家さん」というアプローチでした。ところがいくつかの失敗を経て、自分たち自身が農業生産の中身や苦労を理解しなければ、借り手の方々の事業を本当の意味で支えることはできないと痛感したんです。そこで2023年に立ち上げたのが、農業法人「いちごポタジェ」でした。現在は宮崎市を拠点に、冬場はイチゴ、夏場はライチやマンゴーといった希少果実



の栽培を行っています。さらに、自社果実を使った直売所兼カフェの運営や、グループ会社が運営するJリーグチーム「テゲバジャーロ宮崎」の選手食堂での調理、スタジアムでのケータリング提供、親会社所有のホテルへの食材提供など、従来の農家の枠にとらわれない出口と結びついた取り組みを進めています。

――農業の現場で直面している課題と、解決へのアプローチについて教えてください。

田口　日本の農業従事者の平均年齢は67歳を超えています。高齢化や後継者不足で、生産現場は追い詰められています。私自身、食べることが大好きなので、このままでは安心して食べられるものが本当になくなってしまうという強い危機感があります。実際の現場では連日の猛暑や異常気象、台風、病虫害への対応など、予期しない問題の連続です。それが農業です。かといって、大がかりで高額なスマート農業は実情に合いません。現場で忙しく、デスクに着く時間もない若手メンバーたちが直感的に使える、現実的な仕組みが必要であると感じています。そこで作業や生育状況の写真など、日々の記録をＡＩに読み込ませ、「去年の今頃はこれをやっていたけれど、今年の準備は大丈夫？」と知らせてくれるような、現場でのアナログ作業とＩＴを組み合わせたツールを、共創コミュニティで知り合った大手メーカーの方と共に開発に着手しています。いわば「ＡＩ秘書」ですね。日々の作業データが蓄積されることで業務の効率化が図れるだけでなく、農作業の感覚や技術を可視化することは、若手の技術継承にもつながります。ちなみにそのメーカーの方は、うちの会社に転職して活躍しています。

――地域社会や地元の農家さんとは、どのような関係を築いてこられましたか。

田口　新参者の私を、宮崎の皆さんは本当に温かく受け入れてくださいました。地元の飲食店との連携も深めています。お蕎麦屋さんから鰹節のだし殻、お寿司屋さんからは昆布のだし殻をご提供いただき、果物の旨味を引き出す高品質な自家製有機肥料にして、ハウス栽培に活用しています。そのお蕎麦屋さんは、うちで育てたライチでデザートをメニュー化してくださるなど、素晴らしい循環が生まれています。今の日本の農業は、農家同士でライバル視し合うような段階ではなく、地域全体で手を取り合って生き残りを図る局面に来ています。出荷量が足りないときは近隣の農家さんが融通し合ったり、「有機農業の町」を推進している綾町の農家



さんと環境保全型農業の未来について語り合ったりと、横のつながりが大きな支えになっています。新しい就農者を増やす取り組みも大切ですが、まずは「今頑張っている方たちの離農を食い止めること」が最優先課題です。自分たちが現場で生き残り、持続可能な経営モデルを切り出して共有していくことが、地域への一番の恩返しだと思っています。

手触り感のある現場で貫く「志」

――ひと筋縄では行かない現場だからこそ感じる、やり甲斐や面白さはどこにありますか。

田口　一番のやり甲斐は、現場で目の前の課題に日々取り組むことが、目指す目標に直接つながっていると実感できる点です。ＩＴコンサルタントをしていた頃は、目の前の作業と目標との距離がありすぎて、「これをやっていて本当にゴールにたどり着くのかな」と葛藤し、辛い思いをすることもありました。けれど今は違います。土に触れ、現場の課題を一つずつ改善していく作業のすべてが、そのまま「日本の農業をサステナブルにする」という本来の目的に直結していると、ダイレクトに実感できています。

――「志」をお聞かせください。

田口　私の志は、美味しい食べ物を作る人が、ちゃんと生産を続けていける仕組みづくりです。目の前にある日々の作業や収穫量の向上と、「持続可能な農業と食づくり」という大きなテーマとが、途切れることなく地続きでつながっている。この取り組みを、答えや終わりのない芸術活動のように、生涯をかけて追求していきたいです。

――読者へメッセージをお願いします。

田口　私自身、最初から「食」や「農業」に絞って生きてきたわけではありません。一見すると点々として、脈絡のないキャリアに見えるかもしれませんが、すべてにおいて「これを選んだら自分の視野や可能性がどれぐらい広がるだろう」という基準で、進路を選択してきました。最初から一直線に目標へ向かえる人なんて、そう多くはないと思います。枝を伸ばし葉っぱを茂らせていけば、結果として木全体が豊かに育っていく。「今やっていることが何になるのだろう」と迷うような地味な作業であっても、それは確実に誰かのためや何かのためになり、自分の中の枝葉を広げている時間です。年齢に関わらず、領域を決めつけずに自分の選択肢を広げていく。周囲に感謝しながらそのプロセスを楽しむ姿勢が、人生をより面白く、豊かにしてくれるのだと思います。（２０２６年７月、宮崎市にて）



私の志

「人」と「言葉」と真摯に向き合い安心を届ける存在になりたい

地域の魅力を自らの言葉で発信



増谷寧々（ますやねね）さん（アナウンサー）

英語に関わる仕事を目指す中で見出した、アナウンサーという道。女子大学での多様な挑戦で基盤を作り、現在は地元テレビ局のアナウンサーとして活躍する増谷さん。地域に寄り添う日々の中で見出した仕事の原点と、すべての世代へ贈るしなやかな志について伺いました。

多彩な挑戦と出会いが予想外の道を拓く

――女子大学の表象文化学部への進学動機をお聞かせください。

増谷　子どもの頃、テレビで通訳の方の仕事ぶりを見て「かっこいいな」と憧れたのが始まりでした。日本語ではない言葉を自分が話すことで世界が広がっていく感覚が好きで、将来は英語を使う職業に就こうと決めていました。女子大学を選んだのは、英語に特化した実践的な学びができる環境に強く惹かれたからです。

――どんな学生時代でしたか。

増谷　若本夏美先生のゼミでは小学校で子どもたちに英語を教える機会があり、教えること、伝えることの奥深さを学びました。この経験から、教員が進路の選択肢に加わりました。もともと私は、やってみたいと思ったことには何でも挑戦する性格です。京都らしさを体感したくて北野天満宮の巫女さんなど、さまざまなアルバイトに励んだほか、創作ダンス「京炎そでふれ！」にも打ち込みました。一見バラバラに見えますが、どれも「人と話す」「伝える」という点で、現在の自分につながっています。

――そこからアナウンサーを目指したきっかけは何だったのでしょうか。

増谷　実は大学2年次生の夏までは、京都のホテルに就職して外国人観光客の接客をしたいと考えていました。そのインターンシップを受けるために大学のキャリア支援部で面接を受けた後、職員の方に引き止められて言われたんです。「本当にこれが夢ですか？　人と話すことが好きそうだし、伝えることが得意そうだから、アナウンサーという道もありますよ」と。それまでアナウンサーは選択肢になかったのですが、挑戦するのはタダだし、ダメでも自分の力になると考え、そこからアナウンススクールに通い始めました。ホテルスタッフ、教員、アナウンサーという3つの道を並行して最後まで諦めずに追い求め、ホテルからも内定をいただいた中で「今しかできないこと」と「地元・福井で働くこと」を決断し、現職を選ばせていただきました。背中を押してくださった職員の方には、心から感謝しています。

現場の熱量を自分自身の言葉で届ける

――現在のお仕事の具体的な内容と、やりがいについて教えてください。

増谷　地方局ではアナウンサーが記者を兼務することが多いのですが、福井放送の制作部ではアナウンサーがディレクター業務も兼ねます。自分で企画してお店や会社にアポを取り、打ち合わせをしてメモを取り、台本を書いてカメラマンと取材に行き、自分で編集まで行います。ニュース情報番組「おじゃまっテレ」で担当している「社長たちの100名言」というコーナーでは、県内の経営者の方々を取材しています。福井県は人口に対する社長の輩出率が高いんです。でも県民性というのでしょうか、控えめな方が多く、最初は断られることも多いのです。その中で、本音や素敵な言葉を引き出せた瞬間はすごく嬉しいですね。放送後に「お店に行列ができたよ」といった反響をいただく



ときも、やってよかったと心から実感します。２０２４年３月、北陸新幹線の延伸開業に際して４時間の生放送を行ったときは、スタジオのＭＣを担当させていただきました。番組終了後、上層部から「あなたに任せてよかった」と言われたことも強く心に残っています。一つの番組が成功するには、カメラや音声、その他多くの方々がいて、アナウンサーは最後の砦といえます。だから私が言葉一つ間違えれば、皆で作ってきたものが大きく変わってしまうこともある。そのプレッシャーから解放され、「任せてよかった」という言葉を聞いたときの達成感は大きかったです。

――生放送の現場で、特に心がけていることはありますか。

増谷　「読む」のではなく「伝える」ことです。新人時代は用意された原稿を読むことに必死で、上司から「それって伝わっていると思う？」と言われたことがありました。ディレクターが用意した原稿を理解し、そこに取材で得た自分の言葉や感情を乗せて初めて、伝わる言葉になるのだと気づきました。視聴者の方は、こちらの言葉に一つでも引っかかるものがあると、その後は受け入れてくださらないことも多いものです。逆に一つ共感していただければ、どんどんこちら側に入ってきてくださいます。だから生放送ではいつも、画面の向こうにいる視聴者を想像して話しかけるよう意識しています。それでもこの８年間、「１００点だった」と思えた日は一日もありません。放送を見返し、自分で文字起こしをして言葉選びを反省する毎日です。



能登半島地震での経験と、目指すアナウンサー像

――特に印象に残っている現場や出来事はありますか。

増谷　２０２４年元日の能登半島地震です。越前市の実家にいると激しい揺れがあり、緊急召集がかかって局へ。情報収集を経てカメラの前に立ち、呼びかけを行いました。緊急時にテレビ画面から流れる一声は、ときに人の避難を促し、命を守る重みを持っています。私が教わってきたのは、災害時こそ安心できる落ち着いた声で呼びかけること。緊張で押しつぶされそうになりながらも、画面の向こうへ必死で言葉を届け続けました。

――その経験を経て、どのようなアナウンサー像を目指されていますか。

増谷　普段の情報番組では、お茶の間が和らぐような笑顔や楽しい雰囲気を届けたいと思っています。しかし一方で、いざ災害が起こったときには「この増谷さんが言っていることなら、信じて逃げよう」と思ってもらえる存在であり

たい。災害報道の訓練はもちろん行っていますが、普段の放送でも誤解や疑念を招くような発信をせず、一つひとつの言葉に責任を持ち、日頃から信頼を積み重ねていくことが一番の「備え」になると感じます。災害時は混乱していて、テレビがついていても、皆さんはたぶん耳で聴くだけだと思うんですね。だから顔を見て、そして声を聴いて安心してもらえるアナウンサーになることが目標です。

感謝と「好き」を原動力に、次のステップへ

――お仕事をする上でのご自身の「志」を教えてください。

増谷　何事も一人では成し遂げられないと自戒すること、「一人じゃない」ということです。先ほどもお話ししましたが、一つの番組は多くのスタッフだけでなく、何より取材に応じてくださる地域の方々と、それを観てくださる視聴者の方々で成り立っています。その方たちからのアドバイスや指摘があるからこそ番組が良くなります。もちろん厳しい声もいただきますが、厳しさのない甘い世界で終わっていたら、こちらの伝えたいことが視聴者の皆様に届いているか、不安になります。だから独りよがりにならず、常に周囲に感謝して臨むことを大切にしています。福井県には「いいとこ、掘りだくさん。」というキャッチコピーがあります。知れば知るほど魅力的な人や食、自然がたくさんあるんです。控えめな県民性の皆様の魅力を、後押ししながら伝えていく存在でありたいです。

――最後に読者へメッセージをお願いします。

増谷　番組で地元のBリーグチーム「福井ブローウィンズ」を応援するコーナーを担当したことをきっかけに、バスケがどんどん好きになりました。最近は試合の応援に通うなど、「好き」を原動力にして仕事の領域を広げています。また、学校などで子どもたちに夢について話す機会では、「やりたいことは一つじゃなくていい、いくつあってもいい」と伝えています。私自身、3つの道を同時に目指し、すべてに本気で取り組んだ経験が、結果的にはリンクして、今の強みになっています。この思いは若い世代だけでなく、幅広く人生を歩まれている校友の皆様にも通じることだと感じます。取材先では夢だった喫茶店を50代で開いた女性や、70代のブレイクダンサーなど、魅力的な方々にたくさん出会いました。いくつになっても人との出会いを大切にし、自分の「好き」や「やりたいこと」に素直に挑戦していく。その姿勢が人生を豊かにしてくれるのだと、日々取材現場で教えていただいています。



（2026年7月14日、福井市にて）

京田辺市×同志社大学×同志社女子大学

キャンパスの変遷、そして地域と拓く未来像

1986年に開校された京田辺キャンパスは、本年で40周年という節目の年を迎えました。この間、キャンパスの教育・研究環境は常に進化し、京田辺市も「大学のあるまち」として目覚ましい発展を続けています。本座談会では京田辺市長をお迎えし、近年のキャンパスの歩みと地域連携の現在地を振り返るとともに、今後のキャンパスの展望、そして地域との共創の未来像について語り合いました。



司会　学校法人同志社 常務理事
吉岡（よしおか） 康博（やすひろ）

出席者
大学副学長（京田辺校地担当）／文化情報学部教授
宿久（やどひさ） 洋（ひろし）

京田辺市長
上村（かみむら） 崇（たかし） 氏

女子大学企画部長／現代社会学部教授
天野（あまの） 太郎（たろう）

大学京田辺校地総務部長／リサーチ・イノベーション推進機構事務部長
水船（みずふね） 昌彦（まさひこ）

キャンパスの変遷と近年の歩み
――進化した京田辺の現在地

吉岡●１９８６年、大学・女子大学の田辺キャンパス（現・京田辺キャンパス）が開校され、本年で40周年を迎えました。この間、本キャンパスは学部・研究科の拡充、研究機能の高度化、地域との連携深化などを通じて大きく発展し、それとともに京田辺市も目覚ましい変貌を遂げました。本日は近年の京田辺キャンパスの姿と地域との連携、開校以来の歩み、未来への展望についてお話しいただければと思います。まずは自己紹介をお願いします。



上村 崇 氏
京田辺市長

上村●京田辺市長の上村です。同志社大学の卒業生でもあり、京田辺キャンパスには１９９１年の入学時から2年間通いました。私の通学当時は「田辺町」でしたが、この40年で飛躍的に人口も増えて発展しました。そこにはこの京田辺キャンパスの存在が大きく寄与していただいたと思っています。

宿久●私は大学副学長として京田辺校地を担当しています。２００５年に大学に着任し、京田辺市民でもあります。

天野●女子大学企画部長です。２００４年、京田辺キャンパスに着任しました。専門は地理学や観光学です。

水船●２０２６年4月に京田辺校地総務部長として着任し、リサーチ・イノベーション推進機構事務部長を兼務しています。同志社大学の入学は１９８６年の京田辺キャンパス開校の年度になります。

吉岡●司会を務めます吉岡です。１９８６年、同志社に入社し、京田辺キャンパスでの勤務は32年に及びました。それではまず、近年の京田辺キャンパスの発展について伺います。２０１１年10月発行の「同志社時報」１３２号では、京田辺キャンパス開校から25年の歩みを振り返る座談会を開催しました。今回はその後のキャンパスの発展を振り返っていただきましょう。

宿久●２０１３年の教学体制再編による文系学部の今出川移転は、大学と地域の双方にとって大きな転換点となりました。それ以前は全学部の１・２年生と理系学部生が京田辺に在籍し、一時は1万5，０００人規模の賑わいを見せました。移転の際は8，０００人が動くと言われ、うち半

数程度は下宿生だろうということで、当時は地域への影響も懸念されました。一方で、実験・実習などのために広い土地を必要とする理工系や文理融合系学部の教育拠点として、非常に期待が高まりました。現在は文化情報学部、理工学部、生命医科学部、スポーツ健康科学部、心理学部、グローバル・コミュニケーション学部と脳科学研究科が集まり、理系・文理融合系を担うキャンパスへと再定義されました。大学の現在の学生数は、京田辺が9，000名強、今出川が約2万名と、ほぼ1対2の割合になっています。

吉岡●女子大学には現在約4，000名が在籍し、京田辺キャンパスでは両大学で1万3，000名の学生が学んでいます。2013年の教学体制再編以降、施設整備や学生の学びにはどのような変化があったでしょうか。

水船●京田辺キャンパスが4学年完結型の教学体制となり、2014年にはプロジェクト型研究室機能を有する施設「訪知館」が整備されました。2015年にはキリスト教主義教育の象徴となる礼拝堂を有する「言館(ことばかん)」と、自由主義を表す「光館（ひかりかん）」からなる同志社京田辺会堂が生まれました。学部や研究科の枠を越えて使える施設や設備の計画的な整備はその後も続き、2018年度には、ラーニング・コモンズがラーネッド記念図書館内に設置され、学生の学びのスタイルの変化にも応えてきました。近年は、ICT技術の進展に伴って学びがさらに多様化しており、進行中の京田辺キャンパスリニューアル事業によって、それに対応しようとしているところです。京田辺キャンパスの特徴である「スポーツ」においても、スポーツ・コンプレックス構想のもとで新アリーナ「山本覚馬記念アリーナ」を開設しました。京田辺キャンパスリニューアル事業によってキャンパスの景色や機能が大きく変わり、そこで学生たちがどのような交流を生み出していくのか、大きな期待を抱いています。

天野●女子大学は2005年に薬学部医療薬学科、2015年に看護学部看護学科を開設し、医療系人材の育成拠点となっています。また近年のAI教育の重要性を受け、全学生を対象に「データサイエンス・AI教育プログラム」も展開しています。教育環境だけでなく生活面でも整備が進み、以前は城陽市にあった「めぐみ寮」を閉鎖し、2020年、キャンパス正門のすぐ横に「いづみ寮」を開設しました。これによって京田辺で学び、暮らすというスタイルが定着してきました。さらに今年、女子大学は創立150周年という大きな節目を迎えました。ホームカミングデーでは昨年、100名以上の京田辺市民の方にご来場いただくなど、学びと交流のフィールドを広げています。

上村●本市の人口は15年前の約6万7，000人から、現

在は約7万4，000人に増加しました。文系の今出川移転で下宿生数は一時減少したものの、その後は学部の新設などもあり、安定して推移しています。学生数が伸びても下宿生数が大きく増えないのは、都市近郊の立地ゆえに、近畿圏など近場から通う学生が多いからだと感じています。「大学のあるまち」として全国に特色を打ち出せるのは大きな強みです。山手幹線の開通など交通環境も向上する中、学生には地域でのフィールドワークなどを通じて、市民と積極的に関わっていただきたいと願っています。

コロナ禍がもたらした変容と進化
――ハイブリッド型授業への昇華

吉岡●この間の大きな出来事としては、新型コロナウィルス感染症への対応がありました。教育や学生生活への影響はどうでしたか。

宿久●コロナ禍は大学に、以前の状態には戻れないほどの大きな変容を促しました。当時は授業の停止を回避するため、否応なしにオンライン化を進めざるを得ず、制限下に置かれた学生への対応など、大学全体で取り組む大きな機会となりました。生命医科学部の実習では、顕微鏡やサンプルを学生の自宅へ郵送して送り返してもらうなど、総力を挙げて対応しました。これらの経験によってオンライン学習への抵抗感がなくなり、現在はそれらを組み合わせて、第1回を含む2回分の講義をオンデマンド、残り13回を対面で行う「DO Week（Doshisha Opening Week）」という新しい授業スタイルが定着しています。これも2校地間問題を払拭する一つのチャンスと捉え、未来に向けた取り組みを今後も進めていきたいと思っています。

天野●プラスに活かしていくことが重要ですね。以前は教室規模に応じて受講学生数が規定されてしまいましたが、現在は双方向オンライン型やオンデマンド型の授業が非常に有効に活用されています。女子大学では、特に京都や観光に関する授業は京田辺キャンパス中心で開講しているため、今出川キャンパスの学生もオンデマンドを活用しながら学び、交流を図ることができています。一方で、オンラインを経験したからこそ対面交流の尊さも再確認されました。女子大学としましては、



天野 太郎
女子大学企画部長／現代社会学部教授

双方の良さを活かした支援を行っているところです。

上村●行政としては、下宿生の孤立防止や救急搬送への対応に苦心しました。その中で印象的だったのは留学生支援です。市内の農家さんと協力し、孤立しがちな留学生へ京田辺特産の野菜を直接届ける取り組みを行いました。大変な時期でしたが、心温まる関係性を築けた出来事でした。

地域連携・産官学連携の現在地
――まちづくりから自動運転・消防団まで

吉岡●ありがとうございました。京田辺キャンパスの40年を語る上で欠かせないのは、地域との密接な連携です。2005年、大学・女子大学・国際中高は京田辺市と、連携・協力に関する包括協定を締結しました。それ以来、双方の関係はどのように発展してきたのでしょうか。

上村●両大学が包括協定により地域貢献を掲げられたことで、従来、先生方が個人単位で行なっておられた活動だけでなく、組織対組織としての連携が深まりました。その中でも、公共交通の課題解決などに向けて大学、日産自動車と結んでいる産官学の3者連携協定は非常に大きいですね。市民向けの取り組みで言えば、「京田辺市立南部まちづくりセンター」内のコミュニティカフェで、学生さんに小学生の夏休みの宿題を見てもらったり、最近では大学ラグビー部が京田辺市消防団に「D-FENDERS（ディフェンダーズ）」として参加してくれたりと、さまざまな交流が生まれています。学生がまちに残り、行政に就職してくれるような良い循環も生まれています。行政としてもさらに窓口の整備を進め、京田辺市に関わってくれた学生たちが、将来何らかの形で関わり続けられる素地を作っておくことが、市と大学との連携のあり方だと考えています。

宿久●2005年から京田辺市と一緒に始めた「クローバー祭」は、大学主導から学生主体のイベントへと進化してきました。また1993年から続く「京たなべ・同志社ヒューマンカレッジ」は、地域住民の生涯学習や豊かな地域づくりに長年貢献しています。スポーツを通じた連携も盛んで、ハンドボール部と地元の小学生との交流や、2008年設立の総合型地域スポーツクラブ「KDSC（京たなべ・同志社スポーツクラブ）」などを通じ、充実したキャンパスの施設を活用しながら市民と学生がつながる場を提供しています。幼少期に京田辺市でスポーツに触れた子どもが、後に大学に入学するといった嬉しい成果も生まれています。そして、今年から始めていただいた京田辺市のふるさと納税制度には大変感謝しています。これは寄附者が大学を指定して寄附を行うと、その7割が大学に交付され

て学生の活動資金となり、寄附者も税額控除を受けられる仕組みです。この貴重な資金を地域の発展や学生の活動、地域連携を進める原資として有効活用させていただく予定です。大学と地域が共に発展していく、新しい連携の形だと考えています。

天野●薬学部の模擬実習では市民の方々に模擬患者としてご協力いただき、看護学部は防災イベントへの出展を検討中です。また「女性アクティベーションセンター」による子育て支援や、学芸学部メディア創造学科の「プロジェクトプランニング演習」での京田辺市の魅力発信、現代社会学部現代こども学科の小学生との交流プロジェクト「こどパ」、学芸学部音楽学科の小学校訪問授業など、多角的な実践を行っています。また先ほど市長が紹介された、市職員になったという学生は、社会連携事業の「同志社女子大学まちづくり委員会」に携わる中で、京田辺市への貢献を志してくれました。このように地域の方々と交流しながら、学生側も学ばせていただいています。２０１７年から進めている将来構想「Vision150」の中でも、京田辺市民や企業の方々と連携し、共に学修するコミュニティづくりに注力しています。

吉岡●近年は産官学連携も注目されていますね。

水船●京田辺市にまとめていただいております地域連携一覧には、実に１２４項目（法人全体）もの取り組みが並んでいます。この蓄積が、先ほど市長が言われた産官学の３者連携協定という新たな連携の枠組を生み出しました。そして日産自動車のルートで京都日産やMoplus株式会社とつながり、ＡＩオンデマンド交通「京田辺スマートモビリティ（愛称：たなモビ）」の実証事業へと発展し、学内では政策学部のゼミ生がその調査に関わったりと、大学の研究・教育力・企業の技術力・自治体の課題解決が一体となって、大きな価値を生み出しているところです。

上村●本市のような人口規模のまちが単独で日産(自動車)さんと協定を結ぶのは、かなりハードルが高いです。大学のあるまちだからこそ実現できた画期的な取り組みであり、本市職員にとっても最先端の知見に触れ、モチベーションを高める絶好の機会となっています。感謝の言葉しかありません。

水船●ご期待に応えられるよう努めてまいります。私自身、京田辺市や警察署関係など複数の会議体に出席させていただいています。そうした場を通じて地域のさまざまな情報や課題に接する機会をいただいています。そうした知見を通じて、本学の「京田辺地域連携推進室」のあり方を改めて整理し、次のステップに向けて取り組んでいきたいと考えています。



吉岡 康博

学校法人同志社 常務理事

吉岡●「京田辺市まち・ひと・しごと創生総合戦略」の第3期では、人口ビジョンの実現や地域活性化に向けたさまざまな施策が掲げられています。その中で大学・女子大学に対して、市長は今後どのような役割や貢献を期待しておられますか。

上村●大学の研究成果を社会実装する際、この京田辺市が一番身近な実験場でありたいと願っています。もう一つの重要な役割が人材育成です。学生さんたちに、地域貢献活動を通じて京田辺市を第二のふるさとと感じてもらい、20代後半の人口流出防止や、「将来また戻ってきたい」と思える関係性を育んでいきたいですね。

吉岡●そういう意味では大学として、住民の方々への仕掛けも重要だと思います。

宿久●京田辺市は大学にとって特別なまちであり、現在の関係性以上にまだまだ連携の可能性を広げられると感じています。私も防災会議や都市計画の委員会に参加させていただく中で、教育の枠を超えて市民の皆様に近い立場から地域課題に取り組みたいと考えています。学生たちにとっても京田辺市は第二のふるさととなるまちですから、大学としてもワンランク上の地域連携を目指していきたいものです。

天野●私の専門が地理学や観光学ということもあり、2022年には京田辺市大学連携地域貢献研究事業の助成金を活用し、学生が京田辺市の観光動画を制作させていただきました。このように教育と連携しながら、京田辺市の深い歴史や文化を学生たちに学ばせていきたいと考えています。京都府・京田辺市を含む山城地域と連携し、京都府と学生が地域課題を議論する取り組みも進めています。

1986年の開校当時を振り返って
――広大なキャンパスが育んだ無限の可能性

吉岡●ここで改めて、原点である京田辺キャンパス開校当時を振り返ってみたいと思います。

宿久●ご存じのように当時は工場等制限法があり、都心部で大学を拡張していくことは物理的に不可能でした。特に理工系の教育・研究を推し進めるためには、広大なスペー

スがどうしても必要だったのです。開校当時は激しい反対運動もあり、地域の方々にもさまざまな変化やご苦労、ご迷惑をおかけしながらのスタートでした。しかし田辺町（現：京田辺市）への進出は、同志社が飛躍する上で不可欠な決断でした。



水船 昌彦

大学京田辺校地総務部長／
リサーチ・イノベーション推進機構事務部長

水船●開校当初は交通アクセスや周辺環境も発展途上で、駅周辺も今のようなコンビニはなく、貨物列車のコンテナを利用したカラオケボックスがあったことだけは鮮明に記憶しています。当時は授業が終わると多くの学生が帰ってしまうような場所でしたが、大学の発展とともにまちも大きく変わり、学生が留まり交流するキャンパスへと変化していきました。それを後押ししたのが、今出川キャンパスにない広大な空間が醸し出す将来性であり、それこそが京田辺キャンパスの最大の魅力だと感じます。

吉岡●その後、工学部の移転や理工系教育研究の充実など、大学は大きな発展を遂げました。

宿久●広大な敷地を得たことで、新しい学部・研究科の設置にも対応でき、文化情報学部設置時の夢告館や生命医科学部設置時の医心館の建設、スポーツ健康科学部設置時の磐上館の増床、さらには同志社ローム記念館や情報メディア館などの教育・研究を充実させるための施設の建設を次々と展開できました。また、学科ごとの大型実験装置や、ＭＲＩのような高度な機器の導入も可能となりました。現在は、教学・スポーツ施設のリニューアルや、ラウンジなど学生のためのスペースの増設を進めています。この広さを存分に活かすことで、現在は学生が快適に過ごせる滞在型のキャンパスへと進化を遂げています。

吉岡●女子大学はいかがでしょうか。

天野●１９８６年のキャンパス開校当初、学芸学部音楽学科が京田辺キャンパスへ移転したことは非常に大きな意味がありました。今出川キャンパスでは実現できなかった専用の音楽ホールを京田辺キャンパスに設けたことで、より本格的な音楽教育の推進が可能になったからです。短期大学部の開設も大変大きな出来事で、入試区分によっては倍率が10倍から20倍に達するなど、日本有数の人気と優秀さ

を誇る短大となりました。少子化を見据えた戦略的改編によって２００３年に廃止されましたが、その後は現代社会学部現代こども学科、薬学部、看護学部、海外留学を主眼とした学芸学部国際教養学科などが次々と設置され、女子大学は多角的な学びの場へと発展しました。施設面でも実験・実習スペースが大幅に拡大し、今では今出川キャンパスの学生から羨ましがられるほどの、魅力的なキャンパスとなっています。

吉岡●京田辺市にとって、大学・女子大学の開校は、市にどのような変化をもたらしたでしょうか。

上村●開校当初は４講時の授業が終わると学生が一斉に車で移動し、キャンパス周辺が静まり返ることもありました。しかし現在の学生は非常に真面目にキャンパスに留まり、学業や多様な活動を行ったり、地域と向き合ってくれたりしています。本市の人口構成は40代に次いで20代が多く、全国的にも珍しい、若々しいまちとなっています。これは間違いなく、大学が存在することの恵みです。私たち行政も、そうした学生たちの期待や姿勢にしっかりと応えられるまちづくりを考え、この好循環を今後も未来へつないでいきたいと考えています。

未来への展望――大学とまちの新しい連携スタイル

吉岡●最後にこれからの10年、20年、さらにはその先を見据えた、未来への展望についてお話しください。

宿久●同志社大学では２０２６年度から、新たに５つのビジョンを掲げています。その一つが「京都との共創から生み出される新たな社会貢献」で、大学の果たすべき重要使命として地域貢献を明確に位置付けています。ビジョン達成に向けては「中期計画２０３０」を進めており、京都にあることを活かした多角的な大学活動の展開、地域社会との協働、京田辺市と連携した産官学連携プロジェクトの推進などに取り組んでいるところです。その主要な実践の場となるのが、この京田辺キャンパスです。ただ地域との共創をさらに深める上で避けて通れないのが、大学へのアクセス改善と、市街地との距離感の縮小です。ＪＲ同志社前駅や近鉄興戸駅から大学までのアプローチ、いわゆる「田辺坂」には依然として物理的・心理的な障壁があり、キャンパスに訪れる卒業生からも移動の不便さが指摘されています。また、大学がキャンパス内の快適性を追求した結果、かえって学生がキャンパスに留まり、周辺地域が「通過点」



宿久 洋

大学副学長（京田辺校地担当）／
文化情報学部教授

になってしまっている側面もあります。空き時間や昼食時に新田辺駅エリアまで気軽に足をのばせる環境づくりが必要でしょう。例えば、地域交通と調和する形でキャンパス内や最寄り駅から自動運転の巡回バスを走らせるような試みができれば、学生とまちとの関係も大きく変わるのではないでしょうか。さらに2035年には18歳人口の急減により、大学進学者数の大幅な減少が避けられず、大学運営にとって大きな転換期を迎えます。こうした時代だからこそ中期計画の視点からも、大学のあり方を再構築しなければなりません。オンデマンド授業なども活用しながら、地域住民の方々のセカンドステージに向けた生涯学習の場を提供するなど、市民を巻き込んだ新たな地域貢献の形を模索していきたいと考えています。

天野●女子大学でも「Vision150」の中で、地域社会への貢献を明確に掲げてきました。現在学内で策定を進めている次期中期計画においても、重点目標の一つとして京田辺市・地域社会との連携強化を掲げています。単に通学するだけでなく、教育・研究を通じて地域と深く結びつく「関係人口」としての学生を育み、地域に根ざした大学づくりを今後も目指していく所存です。

吉岡●京田辺市としましては、今後どのようなまちづくりを目指しておられますか。

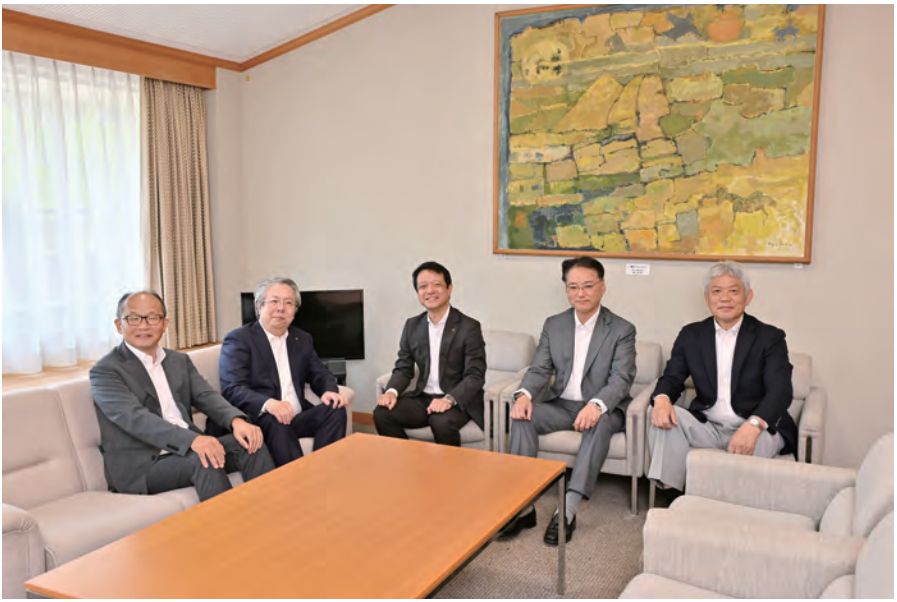
上村●近鉄とJRに挟まれた興戸駅周辺の踏切課題などの整備に、両大学・事業者と共に取り組みたいと考えています。また公共交通網の維持においても、大学の存在は不可欠です。さらに開校40年を経て、大学施設も市の施設もリニューアル期を迎えています。学生数が減少していく時代だからこそ自前主義を脱し、市と大学による施設の共同利用や効率的な活用などの発想も必要ではないでしょうか。そして女性の起業支援やライフステージの変化に応じたキャリア形成支援など、学生と市民が共に学び合い、卒業後も京田辺市をフィールドとして活躍できる循環を整備していきたいですね。

水船●現在、大学としてはアントレプレナー人材の養成とスタートアップ支援に力を入れていますので、卒業生が京田辺市に拠点を構え、ここから世界へ羽ばたいていけるような循環や仕組みを、市と連携して後押ししていきたいと

考えています。近年の国の補助金事業でも「共用化」が重視されています。通信環境やフィジカルＡＩの進化を見据え、今後はリアルとバーチャルを融合させた施設整備などを、地域との連携のもとで進められればと思います。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

吉岡●大学の大きな使命の一つは社会貢献です。今後も京田辺市との相互理解と信頼を一層深めながら、大学の知と地域の課題をしっかりと連動させ、より素晴らしい取り組みへと結びつけていくことが求められます。そのためには持続可能な発展が不可欠です。私自身、日頃より「共存共栄」という言葉を大切にしていますが、大学と地域がお互いの存在を尊重し合い、共に発展していく関係性こそが、未来に必要なのではと思います。今後とも京田辺市と両大学が固く連携し、この地から新たな価値を生み出し続けていくことを心より期待しましょう。本日は誠にありがとうございました。

（２０２６年７月28日、大学京田辺キャンパスにて）



特別寄稿

同志社と京田辺のゆかりを辿る

大学同志社社史資料センター

はじめに

同志社は、本年、１９８６年（昭和61）４月に大学及び女子大学京田辺キャンパスが開校してから40年を迎えました。さらにその前、１９８０年（昭和55）の同志社国際高等学校開校から数えれば48年、さらにさかのぼって、１９６５年（昭和40）に京田辺でのキャンパス用地購入を決意してから61年と、京田辺キャンパスに限定して歴史を遡るだけで60年以上の関係があります。その端緒を探し求めていくと、同志社の創立者新島襄と京田辺の関係にたどり着きます。

新島襄と京田辺（１９９７年市制施行から田辺町より京田辺市に名称変更）の関係は、南山義塾に始まることは既に知られていますが、本稿では、先行研究を前提として、改めて新島襄と南山義塾の関係を資料で確認し、さらに京田辺キャンパス開校直前の資料にも触れて、同志社と京田辺の関係史を考える事実を提示したいと思います。

※本稿は同志社ギャラリー第39回企画展図録所収の総論をベースとして加筆し、まとめた文章です。

※本稿では歴史的用語以外は表記を京田辺で統一しています。

※特別な記述が無い限り、掲載資料・写真は大学同志社社史資料センター所蔵です。

南山義塾と新島襄

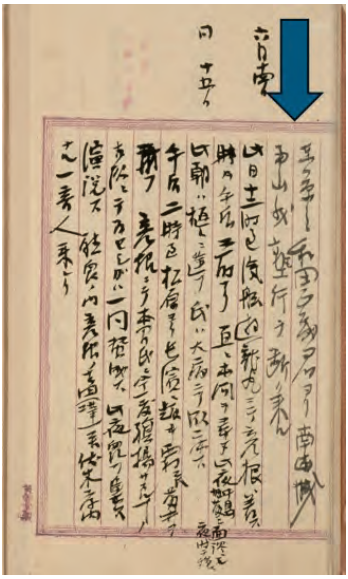
南山義塾とは、１８８２年（明治15）４月30日、綴喜郡三山木村で開業した私塾です。地元の有志らが集い設立されました。設立資金は株券の売却によってまかなわれています。この学校は小学校卒業以上の生徒を対象とした、当時の中学校に相当する学校で（『田辺町近代誌』６２６-６



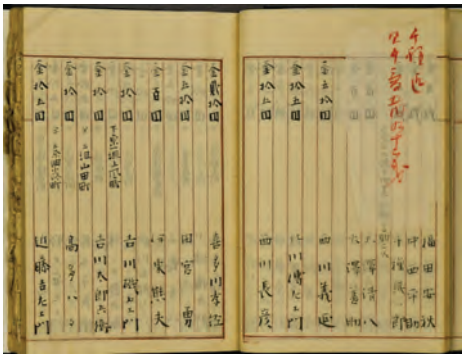
「南山義塾遺跡」碑1974年頃撮影

31頁）、7年前に開校した同志社英学校と同じ中等教育を実施する学校でした。新島襄がこの日に挙行された開業式で祝辞を述べたことが広く知られています。

また、新島の日記には、開校式から1か月半ほど経た6月14日に「東京之和田正幾君ヨリ南山城南山義塾行ヲ断リ来ル」（新島襄『日誌』、新島遺品庫番号上0669、以下、資料番号のみ記載）、『新島襄全集』（以下、『全集』）第5巻、同朋舎、1984年、181頁）と書かれています。ここに登場する和田正幾は当時耕教学舎（のちの青山学院）の教員でした。和田は、東京出身で、開成学校を経て、東京大学に入学しますが、退学して同志社で学びます。1年ほどして、自身が牧師に向いていないことを悟り、同志社を中退し、当時の職業についていたことが青山学院の歴史からわかります（『青山学院九十年史』青山学院、1965年、74–75頁）。その後も和田は長く青山学院に勤めた人物です。こうした事実から、新島にとって南山義塾が、式典に参加するだけでなく、優秀な人物を紹介したいと考える対象であったことがうかがわれます。


新島襄『日誌』（1882～1884年）のうち1882年6月14日の項目

時間を少々進めて1880年代後半に作成された『同志社大学義捐金県別姓名簿』所収の「京都府下（予約申込）大学資金寄附未納者姓名簿」を見ると、南山義塾関係者として、西川義延（1848–1908）、喜多川孝経（1859–1935）、田宮勇（1846–1895）、伊東熊夫（1849–1913）、吉川磯右衛門（1842–1924）の名前を確認することができます。『田辺町近代誌』（第11章「田辺の人物伝」参照）を参考に彼らの経歴を見ていくと、いずれの人物も南山義塾発起

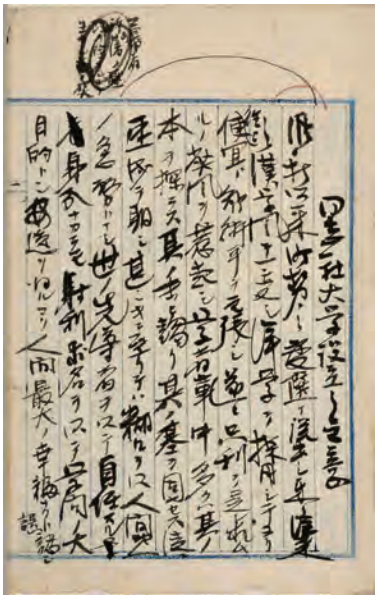

『同志社大学義捐者県別姓名簿』（1880年代後半）のうち「京都府下（予約申込）大学資金寄附未納者生名簿」

人で、京都府議会議員経験者です。さらに、伊東、田宮、西川、喜多川は後に衆議院議員を務めました。彼らは南山義塾周辺の各地を代表する人物であり、けん引役であったことがうかがわれます。そして、喜多川を除けば、彼らは新島（1843–1890）と同年代の人物でした。南山義塾関係者との出会いに関して新島が語った言葉を現時点では見つけることはできていませんが、こうした人々との出会いの意味が、新島が生涯をかけて取り組んだ同志社大学設立運動の過程から見出せます。

同志社大学設立運動

同志社大学設立運動（以下、設立運動）とは、その名の通り、同志社大学設立のための募金活動です。その始まりは、1882年1月12日、奈良在住の土倉庄三郎より、大学で法学を教えるのであれば5000円を寄附するとの約束を得た時とされます（『全集』第5巻、123頁）。この年の11月に新島がまとめた大学構想「同志社大学設立之主意之骨案」によると、設置学部は最大5学部（宗教並びに哲学、医学、法学、文学、理学）、募金目標は14万円（法学部5万円、医学部9万円）でした（『全集』第1巻、281–32頁）。この運動に南山義塾関係者が関わります。

もう1点、この時代を考える上で理解しておくべきことは、設立運動当時の社会の状況です。設立運動が実施されている間、日本に存在する大学は東京大学のみでした。また、私立学校が設置する大学の基準、あるいはその学術レベルを保証する法律は存在しませんでした。私立学校が条件を満たして大学を名乗ることを可能とした法律は、1903年（明治36）施行の勅令「専門学校令」です。つまり、大学を自称することはできたとしても、その私立大学の社会的あるいは学術的価値を担保する法律やルールが存在していませんでした。崇高な理念を掲げたとしても、その質を担保するだけの蓋然性が低いとなれば、当時の社会から支持を受けることは簡単ではないと推測されます。さらに1882年当時の同志社内諸学校の年度末在学生数は26



草稿「同志社大学設立之主意之骨案」

0人で、卒業生は32人（「同志社創業以来生徒員数表」『同志社明治廿四年度報告』７頁）という小さな学校であり、同志社の存在が社会に浸透していたとは考えられません。このような状況下で、設立運動への賛同者を募ることは易しいことではなかったと推察されます。

加えて、設立運動と同時に新島が積極的に取り組んだ事柄があります。それは、専門教育の学校の設立でした。１８８６年（明治19）の同志社病院開院及び京都看病婦学校開校は医学関係、新島の永眠後になりますが、１８９１年（明治24）の同志社ハリス理化学校開校は理化学関係、１８９２年（明治25）の同志社政法学校開校は法学・商学関係と、大学開校時にはそれぞれが学部を担う期待を以て設立されたように見受けられます。こうした学校設立の動きは、南山義塾開校式の翌年には始まっています。その動きに、南山義塾関係者の１人である伊東熊夫が関わっていました。

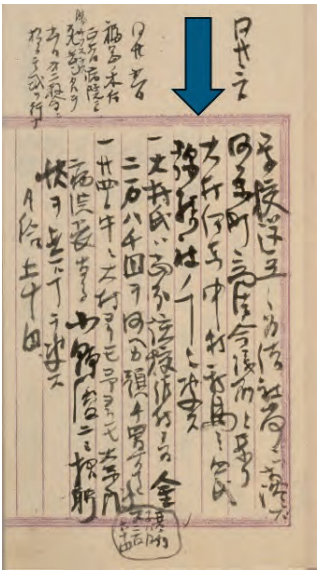


開学当初のハリス理化学校専用校舎ハリス理化学館1891年撮影

同志社大学設立運動と南山義塾関係者――

既に『同志社百年史』（２９０-２９１頁）で指摘されている内容ですが、伊東熊夫が同志社の医学校設立に協力していたと言われます。新島の日記を見ると、南山義塾開校式の翌年１８８３年（明治16）１月23日に「河原町商法会議所ニ集リ大村〔達斎、カッコ内は筆者補注〕、伊東〔熊夫〕、中村〔栄助〕、新島〔襄〕之四氏弥結社之事ニ決ス」という記述があります。伊東熊夫の関与については、『同志社百年史』（２９１頁）では中村栄助が後年語った内容を根拠に断定しています。

新島らが結成したグループには、医学校の候補として考



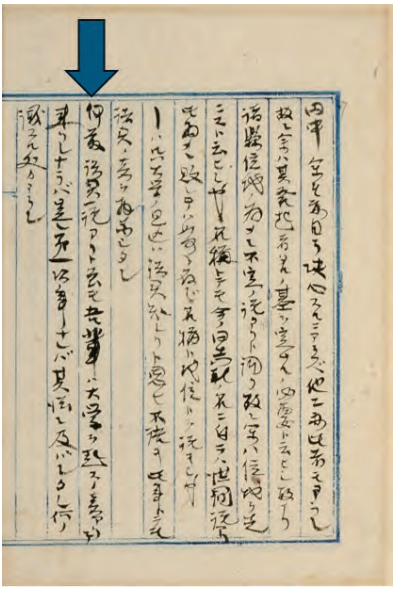
新島襄『日誌』のうち1884年1月23日の項目

えていた洞酌医学校関係者の大村達斎、同志社の関係者中村栄助、南山義塾関係者で当時京都府議会議員であった伊東熊夫が加わっていたと考えられています。ただし、伊東が加わった理由は現時点ではわかりません。結局、この時を含めて、新島は2度医学校設立にチャレンジしましたが叶いませんでした。

さらに1年後の1884年（明治17）にも伊東は同志社に協力しています。設立運動において、1884年は重要な年でした。新島は運動開始当初から大学構想を練り、同志社内に専門教育機関を設立するために各種調整に動くなどして、ソフト及びハード面での準備を進めていました。それらを実現する資本金集めが1884年4月2日に発足した大学設立発起人会発足により本格化します。

発起人会発足の約3か月前の1884年1月19日、新島は事前準備として自宅で発起人候補者を集めて会合を開いています（『同志社大学記事』上0032、『全集』第1巻、189頁）。参加者は、濱岡光哲（上京区・北区、カッコ内は『京都府議会歴代議員録』に各自の氏名が掲載された区域）、高木文平（北桑田郡）、伊東熊夫（綴喜郡）、西村七三郎（上京区・北区）、田中源太郎（南桑田郡・亀岡市）、川勝光之助（南桑田郡・亀岡市）、安本勝治（上京区・北区）、河原林義雄（北桑田郡）、竹鼻仙右衛門、正木安右衛門（乙訓郡）、多貝藤右衛門（乙訓郡）、中村栄助（下京区・南区）の12名で、元京都府官吏の竹鼻を除き、参加者は府議会議員の現職か議員経験者でした。

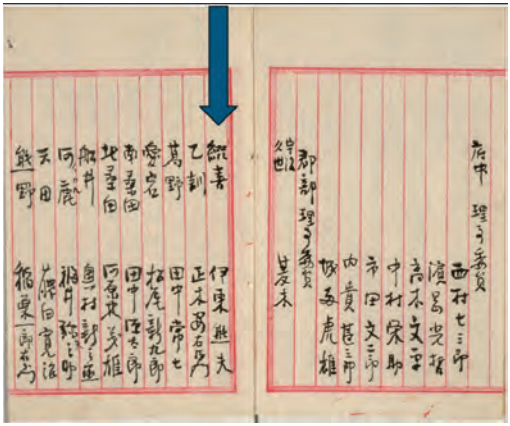
この会合では、議事録（上0033）が作成されました。その議事録を見ると、会議の内容は、設置学部（優先すべきは法学部か文学部か）、発起人の定義や覚悟が話題でした。ただし、各参加者の発言からは、12人すべてが発起人となることに積極的であったわけではないことがわかります。このような雰囲気の中で、伊東の発言は目立ちました。例えば、発起人を引き受けるか否かの話が進む中、「諸君一説アリト雖モ吾輩ハ大学ヲ起スノ意アリテ来リシナラバ是レ第一次事ナレバ其法ニ及バシタシ何ノ滅スル処カアラ



発起人候補者会の議事録1884年1月19日開催

ン」と述べたとあります。また、発起人の定義に話が及んだ時には、発起人の心構えを「何レノ日乎貫クノ精神タリ」と発言した記録もあります。大学設立に本気で取り組む伊東の姿勢が彼の発言からうかがえます。

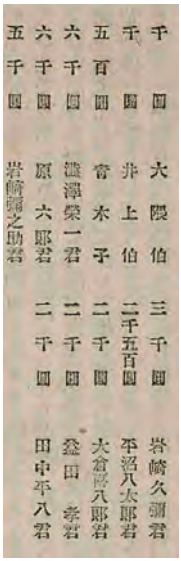
新島の手記によれば、この会合から3か月後の1884年4月1日、同志社は商工会議所に府議会議員と京都府下の名士60人ほどを招待し、発起人会を組織するべく会合を開催し、講演などを行ったとあります（新島襄手記、上0672、『全集』第5巻、317頁）。この日は夜10時まで会合が続いたため、翌日午後3時半から再開するとして一度解散しました。翌日、会合への参加者はおよそ20名と、前日と比べると3分の1に減少しましたが、参加者を加えた発起人会が発足しました。最終的には、発起人は新島襄と山本覚馬に留まり、他の人々は府中（京都市内）理事委員と郡部理事委員として名前を連ねました。郡部理事委員の中に綴喜郡を代表した伊東熊夫の名前があります。なお、この発起人会では、設立する学校の名称を同志社大学から明治専門学校に変更し、1890年開校を目指すこと、文学部の設置を優先し、募金目標を10万円とすること、資本金は全て賛成者の募金で成り立つことなどが決まっています（草稿「議決及び仮則」上0035、草稿「明治専門校創立規則」上0037）。



新島襄手記のうち、大学設立発起人会郡部理事委員の掲載ページ

同志社大学設立運動における綴喜郡田辺町の位置

明治専門学校の名称は、1888年（明治21）9月下旬以降に再び同志社大学に戻りました（『全集』第9巻上、435-436頁）。1888年は、設立運動が最も盛り上がった年として知られます。この年、新島は、4月22日に井上馨邸、7月19日に大隈重信邸で大学設立を訴える機会を得て、著名人（大隈重信、井上馨、青木周蔵、渋沢栄一、原六郎、岩崎弥之助、岩崎久弥、平沼八太郎、大倉喜八郎、

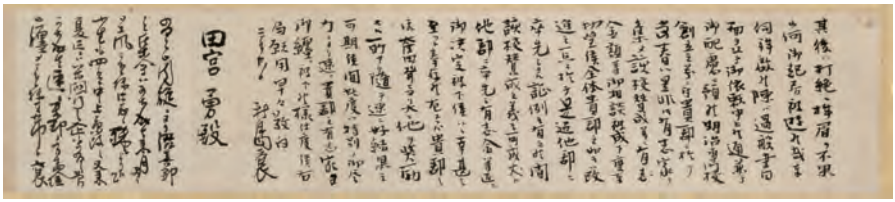

千　圓　大隈伯　三千圓　岩崎久彌君
千　圓　井上伯　二千五百圓　平沼八太郎君
五百圓　益木子　二千圓　大倉喜八郎君
六千圓　澁澤榮一君　二千圓　益田孝君
六千圓　原六郎君　二千圓　田中平八君
五千圓　岩崎彌之助君

「同志社大学設立の旨意」に掲載された寄付者名

益田孝、田中平八）を相手に3万1000円の寄付金の約束を取り付け、これらの大口募金を管理する人物として渋沢栄一の協力を得る（『同志社大学同志社社史資料センター報』第20号、2024年4月、6-7頁）など、都市部における募金運動で大きな成果を得ていました。この成果は同年11月に発表される「同志社大学設立の旨意」（上0021、上0022、『全集』第1巻、134頁）に掲載され、大学設立運動への信頼度を示す事例としてメディアで全国に示されました。

全国的な成果については、現代においてもトピックとして扱われることが多いためご存じの方も多いかと思います。他方で、新島は京都府下の成果を上げるために、綴喜郡の南山義塾関係者に働きかけました。そのうちの一人、伊東とのやり取りを紹介します。新島は前年の1887年12月頃に伊東に対して京都府議会議員や府内の有力者への会合の開催方法を相談したことがあったようです（中村栄助宛新島襄書簡、1887年12月7日付、下0117、『全集』第3巻、498頁）が、この会合の成否はわかりません。約5か月後の1888年4月2日、伊東から新島に手紙が送られてきました（新島襄宛伊東熊夫書簡1888年4月2日付、下0867、『全集』第9巻上、392頁）。この手紙は、3月31日付の新島の手紙を受け取り、会合の準備が進んでいなかったことを詫びる内容で始まります。その後、南山義塾関係者の喜多川と調整して、4月中旬には会合を実施したいという内容が記されています。この会合とは設立運動の会合であり、新島が4月17日付で中村に送った手紙には、「此二十二日ニハ綴喜郡ノ田辺ニ而伊東、喜多川、田宮君等之催ニ而専門校之集会を可被開候間、前日乃チ土曜日より何人カ出張致し呉候様、金森〔通倫〕ト御相談被下度候」（『全集』第3巻、558頁）とあります。新島が京田辺に直接出向いたわけではないようですが、少なくとも新島が持ち掛けた相談を伊東ら南山義塾関係者が実現したようです。

もう1点、新島と京田辺の関係を示す手紙を紹介します。新島は、先ほど紹介した伊東と手紙をやり取りしている時期に、当時綴喜郡選出の京都府議会議員を務めていた田宮勇にも手紙を送っています（田宮勇宛新島襄書簡1888年3月30日付、下0069、『全集』第3巻、548頁）。この手紙の内容は、綴喜郡内で設立運動への賛同者をまと



1888年3月30日付田宮勇宛新島襄（代筆含）書簡

め、できれば募金金額を確定してほしいという、踏み込んだ内容の依頼でした。新島は続けて「左スレバ貴郡之御奮発ニヨリ大ニ他ヲ奨励スル所アリ、随テ速ニ好結果モ可期候」と書き連ねました。新島は、綴喜郡内での募金活動の成果が、京都における募金運動の嚆矢であり、起爆剤になることを期待していたようです。

新島の永眠で、設立運動は頓挫します。その後、同志社が広く社会を巻き込んで何か運動を展開することは無く、管見の限り設立運動時のような京田辺との関係性はありません。しかし、昨年伊東熊夫のご子孫の方々とお話をさせていただく機会があり、ご親族に同志社出身者が多数いらっしゃることを教えていただきました。そうした縁もあってか、2006年（平成18）には伊東熊夫の曾孫にあたる大石庸爾氏が京田辺キャンパスに隣接する土地を寄付してくださっています（『同志社大学総合情報センター報』第31号、2006年12月、2頁）。このようなお話を伺うと、本論で紹介した同志社と京田辺の関係は、その関係史のごく一部であり、埋もれた大小様々な事実が今後も明らかになっていくと考えられます。例えば、当事者の回想により、1927年（昭和2）に設立された同志社労働者ミッションを介した農村伝道が行われたことが記録として残されています（『敬虔なるリベラリスト―岩井文男の思想と生涯―』新教出版、1984年、96、120-124頁）。

綴喜郡田辺町での校地用地購入

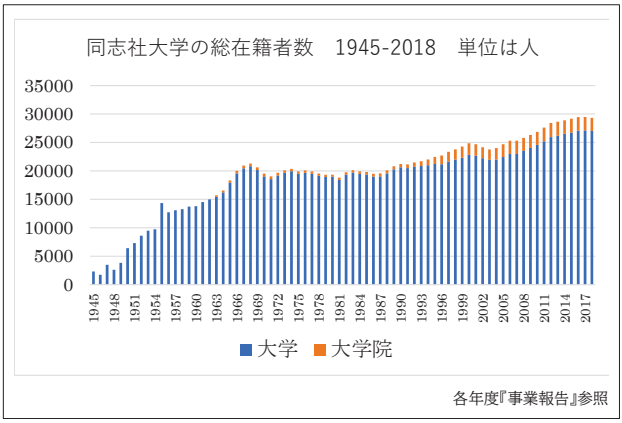
ここから京田辺校地開校前の歴史について紹介していきます。1965年9月25日の理事会にて、綴喜郡田辺町の土地購入決定により、京田辺校地開校に向けた協議が始まります。そして、1966年（昭和41）、1968年（昭和43）と2回に分けて合計99万817㎡の土地購入契約を締結しました（『同志社田辺校地30年の歩み（年表）1965（昭和40年-平成5年）1993』学校法人同志社、1995年3月、1頁、以下、京田辺キャンパスの前史に関しては同書を参照）。1968年末の今出川校地の面積は11万888.76㎡でした（付表4校地略図『事業報告

1968年度』学校法人同志社）。今出川校地のおよそ9倍の土地を取得したということになります。

広大な土地入手の背景には、社会の進学熱の上昇と法律への対応がありました。終戦後の日本では、終戦時に約7000万人まで落ち込んでいた人口が漸増し始めます。戦後の復興も伴い、進学を希望する人々も増加しました。同志社大学を事例とすると、在学生数は1948年（昭和23）1730人、1955年（昭和30）1万3971人、1965年（昭和40）1万7523人、1975年（昭和50）2万80人（展示図録『第30回企画展女子学生の現在地―同志社大学のダイバーシティ前史』同志社大学同志社社史資料センター、2023年、62-63頁）です。社会の旺盛な進学熱と反比例して、在学生数の増加率は漸減し、停滞していることがこれらの数字からわかります。



パンフレット『田辺校地について』（1980年）所収



各年度『事業報告』参照

この状況は大学設置基準に関係しています。

1956年（昭和31）10月22日に公布・施行された文部省令第28号「大学設置基準」は、学校教育法に基づき具体的な大学の設置基準を記した法律です。同法「第8章校地、校舎等の施設及び設備等」第37条には、「大学における校地の面積（附属病院以外の附属施設用地及び寄宿舎の面積を除く。）は、収容定員上の学生一人当たり十平方メートルとして算定した面積に附属病院建築面積を加えた面積とする」とあります。大学の収容定員が校地の延床面積に依存することが書かれた条文です。京田辺に校地を購入した1968年度末の今出川キャンパス延床面積は11万3

767．18㎡、新町キャンパスは2万2750．98㎡で、大学の在学生数（一部、二部、大学院の合計）は2万1296人でした（『事業報告1968年度』19頁、付表4）。

同志社は、校地を入手し、教室棟などを建設することで延床面積を増加し、適法な状態に環境を整えていくために、1959年に新町キャンパスを入手しました。しかし、十分な効果を期待できるだけの延床面積はありませんでした。新町キャンパスを入手したこの年、文部省令第17号「首都圏の既成市街地における工業等の制限に関する法律」が4月1日から施行されました。その第一条に「この法律は、工業等制限区域について、大規模な工場、大学その他人口の増大をもたらす原因となる施設の新設を制限し、もつて既成市街地への産業及び人口の過度の集中を防止することを目的とする。」とあります。本文にある既成市街地とは「東京都及びこれと連接する枢要な都市を含む区域のうち、産業及び人口の過度の集中を防止し、かつ、都市の機能の維持及び増進を図る必要がある市街地の区域で、政令で定めるもの」（昭和三十一年法律第八十三号「首都圏整備法」第二条3項）と定められています。これらの法律により、政令で指定されるような既成市街地にある大学が、近傍に新たに校地を入手することは難しくなりました。



パンフレット『田辺校地について』（1980年）所収

そして、京田辺の土地購入を決断する前年、1964年7月3日に法律144号「近畿圏の既成都市区域における工場等の制限に関する法律」が公布されました。首都圏と同種の法律です。近畿圏の既成都市区域については、大阪市、京都市及びこれらと連結する都市で、政令で指定されました（昭和三十八年法律第百二十九号「近畿圏整備法」第二条3項、昭和四十年政令第百十九号「近畿圏整備法施行令」第一条、5月15日公布・施行）。こうした法律の規制により、法律や政令が定める地域の外に校地を求めなければなりませんでした。そこで、かねてから候補地とみなされていた綴喜郡田辺町の土地購入の検討が本格化し、購入が決定しました。

キャンパス候補地購入に対する学内の反応の紹介

最後にキャンパス購入に対する学内の反応を2点紹介します。1点目は大学の教職員の反応です。1965年8月の理事会で綴喜郡田辺町の土地購入決定の翌月に、「聯合ニュース」（同志社教職員組合の機関紙）が3度発行されました。その最初の聯合ニュース「田辺土地買収問題」では、論点を4点にわけ、各論点に下の表のように小見出しを付しています。

同志社が購入した当時の土地は、造成工事の必要な丘陵部であり、開校準備と共にインフラ整備が課題になることは明らかでした。また、岩倉校地のように、同志社には今出川から離れた場所に校地を入手した経験がありましたが、京田辺は前例以上に更に離れた場所に位置します。岩倉校地は、戦前には同志社高等商業学校が、現在では同志社中学校・高等学校、そして小学校が学校単位で利用していますが、1つの学校が複数の校地に分かれて運営される前例がありませんでした。この聯合ニュースが発行された段階で、大学の一部を移転するという漠然とした情報が流れていたようです。土地購入の話が進み、それに伴い、経済的負担の増加、職場環境の悪化、生じるであろう数々の問題を危惧し、学校当局から土地購入に関する説明が無い中で不安だけが募る状況であったことが、この聯合ニュースから伝わります。後に、学校当局からの説明を受けて購入理由については理解を示すものの、想定される問題について納得するような具体策が提示されたわけではなかったようです。（聯合ニュース「理事長回答す。不安ますます増大」1965年9月29日発行）。このように、新校地開校の初歩は、未知への不安が先行していました。

大見出し	小見出し
その1（経過）	30万坪・6億円以上の無謀な買い物（整地碑別）
	われわれは教職員は同志社の一員ではないのか
	9月25日・理事会は決定強硬か
	引き裂かれる学園
	何故慌てるのか
その2（財政問題）	新たに数十億の借金が必要
	賃金に直接影響は必至
	終始教職員を無視！
その3（立地条件）	大阪・神戸の学生はどうして通学するのか
	大きな建物は立てられない
	水の無い不毛の地
	電話は手動式、ガスは予定
その4（人道問題）	あなたは行きますか弾薬庫の側へ

聯合ニュース「田辺土地買収問題―討議資料―」
1965年9月20日発行、同志社社史資料センター所蔵

1979年（昭和54）5月頃から教職員が抱いていた不安の1つであるインフラ整備、そして、キャンパス用地の造成工事などについて、同志社と田辺町の協議が始まります。1980年5月には田辺町が『田辺町土地利用転換計

画』をまとめました。実際に造成工事は同年8月から始まりますが、この計画書によると、インフラ整備のうち、通学路にあたる近鉄及び国鉄各駅からキャンパス迄の道路や河川等のインフラ整備については受益者負担の原則（地方自治法224条）に基づき同志社が相応の額を負担する案が示されています（189-198頁）。この計画書がまとまる1か月前に同志社国際高校が開校しています。国際高校は同志社創立100周年記念事業に関する議論の過程で必要とされた帰国邦人子弟に対する適応教育態勢を実現した学校です（『同志社国際中・高等学校15年史』1997年、2頁）。大学、女子大学、そして国際高校、1988年（昭和63）に開校した国際中学校が使用するインフラの整備費負担は相当な額であったと想定されます。


田辺土地買収問題

『聯合ニュース』1965年9月20日発行

造成工事が進む中、1983年（昭和58）11月17日付で「同志社大学田辺校地整備実施計画案」がまとめられ、教職員に冊子で配布されました。この計画案では、全学部第1部（昼開講）1、2年次生の授業は京田辺校地で1986年度から実施、総事業費は180億円、工学部3、4年次生、大学院工学研究科及び理工学研究科の移転が第2段階の計画対象となることが示されました。そして、この計画案は1984年（昭和59）3月15日開催の大学評議会で原案通り承認、可決されました（『同志社大学広報』臨時



アジビラ　大成寮作成　1983年か

237、1984年3月16日）。当時、この計画案は「学長試案」と呼ばれ、京田辺への校地移転反対を掲げる学生運動の標的になりました。当時、学内で撒かれた数多くのアジビラのうち、大成寮が作成した1枚を紹介します。アジビラのタイトルは「田辺町移転〈学長試案〉提出弾劾！廃寮阻止！移転の矛盾を更に拡大させる『学長試案』を葬り去れ」とあり、小見出しには「移転計画破綻の末『学長試案』提出を弾劾する！」、「矛盾を噴出させての移転強行―学長独裁―官僚主導体制を粉砕せよ！」、「『実施計画案』は実質的な廃寮決定だ！」とあります。アジビラの内容を確認する限り、本心は最後の小見出しに凝縮されています。「学長試案」は2つの校地の教学に関する提案ですが、学生生活への言及はありません。当時の学生運動の資料を見ていると、校地移転反対の姿勢の底部に見通せない学生生活への不安があったことがうかがえます。

おわりに

同志社と京田辺は、学校というキーワードを通じて歴史的に強く結びついています。その結びつきは、明治時代においては相互補完的に作用していましたが、京田辺校地開校の直前はどちらかというと見通しのきかない未来に対する不安な感情が先行していました。京田辺キャンパス開校から40年を経て、不安な感情はもはや払拭され、新しい歴史が紡がれ、新しい知や価値観が創造されています。歴史とは未来を考えるための方策を知る手がかりです。本稿が京田辺キャンパスの未来を考えるきっかけになることを祈念します。



開校直前の京田辺キャンパス　1986年

特別寄稿

同志社女子部創立150周年記念ツアー

〝同志社女子部のはじまりを訪ねて〟　2026年8月17～23日

主催　学校法人　同志社

後援　女子大学／女子中学校・高等学校／同志社同窓会

同志社女子部創立150周年記念ツアー〝同志社女子部のはじまり〟を訪ねて　実現まで

女子大学名誉教授　坂本 清音

それは2020年の女子大学創立記念礼拝の奨励者の話から始まった。奨励者はお話が終わり近くなった頃、「実は学外の研究仲間[注1]から知らされたことだが」と前置きして、スタークウェザーの没年月日と埋葬場所（1991年10月4日、サンディエゴの Mount Hope Cemetery）を紹介された。その情報は私が長年見つかることを祈念していたものだった[注2]ので、それが耳に入った時の衝撃を忘れることができない。奨励者は2ヶ月前にその情報を入手しておられたが、発表する機会を待っておられたようで、確かに創立記念礼拝は絶好の機会であったと言える。

天から降って来たと思えたその情報をきっかけに、私の現地調査熱はいやが上にも高まった。以後の成り行きは天佑としか思えない。

①まずサンディエゴで墓地を訪ねて貰えそうな知り合いに思いを巡らせているとすぐに、玉村三保子元同窓会長の属する平安教会の姉妹教会がサンディエゴにあることが判明。

②しかも、牧師が同志社神学部出身の金田義国牧師（現P

ＯＶ合同教会名誉牧師）との情報を得て、その日の内に（確か日本時間では真夜中に）メールを出した。

③全く予期しないことだったが、翌朝目覚めると、金田牧師から返信が届いており、同志社女子部卒の節子夫人と墓地を訪ねてスタークウェザーの埋葬場所を確認した。ただし墓碑はなかったとの知らせ。

④たまたま翌年が没１００年となる年だったので、それまでに墓碑の建立ができないかと三好三恵子同窓会長（当時）に相談。早速同志社同窓会の評議員会で、同窓会の事業として着手する承認を得て、田中タカ子副会長（当時）と３人でサンディエゴの会を立ち上げる。

⑤日本にいて短期間で現地に墓碑を建立するという、ある種無謀な計画は、金田牧師の献身的なご協力により可能となり、サンディエゴの市営墓地 Mount Hope Cemetery に、没後１００年を記念して学校法人同志社・同志社女子中学校・高等学校・同志社女子大学・同志社同窓会の共同事業として、墓碑建立が実現。

⑥２０２１年10月２日（土）10：30～ 栄光館ファラーチャペルにおいて「Alice Jeannette Starkweather 没後１００年 記念祈祷会 並びに 記念の集い」を、前四者主催で実施。金田牧師には、動画配信で記念祈祷と記念講演「同志社女子部の誇り」をして頂く。

⑦以来、墓前で記念礼拝の実施を願ったが、コロナ禍のため、外国旅行は困難となる。

⑧幸い女子部創立１５０年を迎える２０２６年が目前となった頃、今回の記念ツアー計画が浮上。女子部始まって以来最初のツアーとして、同志社創立１５０周年記念事業の一つに入れて頂き、実現した。

注１　著述家八木谷涼子氏のこと２０２０年より『新島研究』に論文を投稿。第一部門研究会員。主著に『なんでもわかるキリスト教大事典』朝日文庫

注２　「同志社女学校初代婦人宣教師 Alice J. Starkweather-Christian Home School の実現のために -」（同志社女子大学総合文化研究所『紀要』12巻 １９９５年３月10～31ページ）参照



「同志社女子部のはじまりを訪ねて」
サンディエゴ・クレアモント・ロサンゼルス訪問記

同志社同窓会　南野 紫乃

8月18日　スタークウェザー先生の墓碑を訪ねて

――この日　スタークウェザー先生の甥孫にあたるランドル・ファウラーさんご夫妻がサンディエゴまで駆けつけてくださり、一日ツアーに同行された――

マウント・ホープ市営墓地事務所前までバスで行くと、そこに金田義国牧師をはじめとするパイオニア・オーシャン・ビュー合同教会（P・O・V教会）の皆さんが待ち構えていてくださった。教会員の方たちの乗用車に分乗してスタークウェザー先生の墓前に到着。広大な墓地に眠るたくさんの人々の墓石の中でも一際目立つ赤みを帯びた色の墓碑。同志社四者が建立したその墓碑で献花式を行う。金田牧師の挨拶の後、川崎清史女子大学長・中村久美子女子中高校長・小山薫同窓会長がそれぞれ花束をささげた。



私たちは同志社女子部の歩みの第一歩を踏み出してくださり、女学校の基礎を固めてくださった初代「校長」のスタークウェザー先生に思いを巡らし、長く分からなかったその後半生の消息が判明したことで墓碑が建立され、ここにこうして同志社女子部と繋がったことに大きな感動を覚えた。

市営墓地では墓前礼拝の場所がないので、P・O・V教会で特別追悼記念礼拝を行うため、献花式後すぐに教会に向かった。

――P・O・V教会＝Pioneer Ocean View United Church of Christ サンディエゴのキリスト合同教会　平安教会（京都）と姉妹教会 メアリー・スー・ブルックシャー牧師&金田義国名誉牧師――

スタークウェザー特別追悼記念礼拝

教会はその名の通り、はるか海までの美しい風景が見える高台にあった。開放的で素敵な空間の礼拝堂で金田牧師から「頑張り屋さん」と題しての奨励をいただいた。





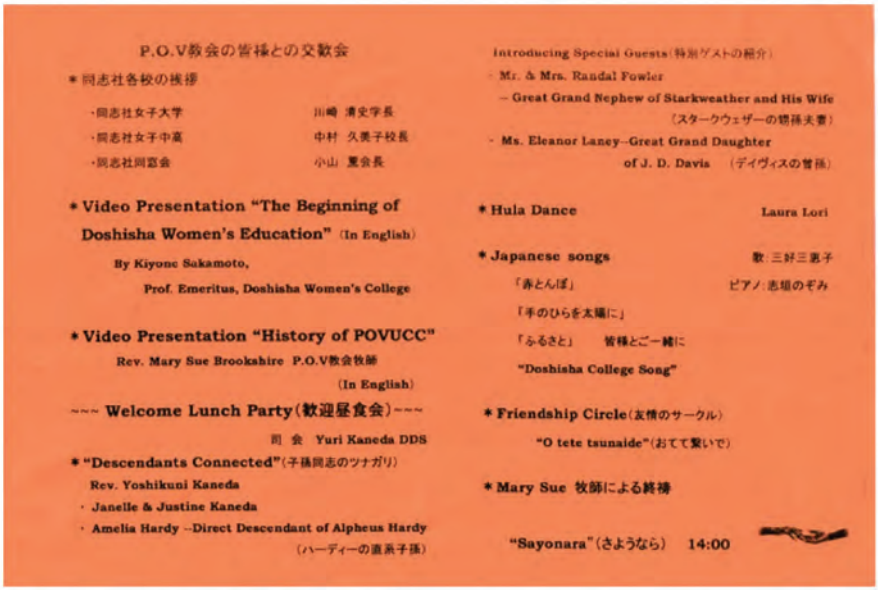
交歓会

礼拝に引き続きメアリー・スー牧師、川崎学長、中村校長、小山会長の挨拶があり、そして坂本清音先生のPower Pointによるビデオプレゼンテーション“The Beginning of Doshisha Women`s Education”が映され、今井由美子先生が代読された。英語でのプレゼンテーションだったので私たちには日本語の資料が配られ、改めて同志社女子部のはじまりについて一緒に学ぶことができた。次にP・O・V教会のプレゼンテーション“History of POVUCC”によって教会の歩み・歴史を紹介。

開放的なホールにランチの準備がされていて、三々五々テーブルを囲んで食事をいただいた後、再び礼拝堂に戻り午後の催しが始まった。

「子孫同士の繋がり」ということで、まず金田牧師の孫娘ジャネル&ジャスティン金田とアメリア・ハーディーの不思議な縁・出会いのことを3人が語ってくれた。彼女たちはともにスタンフォード大学で学ぶ友人であった。あるとき、アメリアの曽祖父が新島襄先生のアメリカの父であるA・ハーディー





P.O.V教会の皆様との交歓会

＊同志社各校の挨拶

・同志社女子大学　川崎 清史学長
・同志社女子中高　中村 久美子校長
・同志社同窓会　小山 薫会長

＊Video Presentation “The Beginning of Doshisha Women's Education” (In English)
By Kiyone Sakamoto,
Prof. Emeritus, Doshisha Women's College

＊Video Presentation “History of POVUCC”
Rev. Mary Sue Brookshire P.O.V教会牧師
(In English)

~~~ Welcome Lunch Party(歓迎昼食会)~~~
司会 Yuri Kaneda DDS

＊“Descendants Connected”(子孫同志のツナガリ)
Rev. Yoshikuni Kaneda
・Janelle & Justine Kaneda
・Amelia Hardy --Direct Descendant of Alpheus Hardy
(ハーディーの直系子孫)

Introducing Special Guests(特別ゲストの紹介)
・Mr. & Mrs. Randal Fowler
-- Great Grand Nephew of Starkweather and His Wife
(スタークウェザーの曽孫夫妻)
・Ms. Eleanor Laney--Great Grand Daughter of J. D. Davis (デイヴィスの曽孫)

＊Hula Dance　Laura Lori

＊Japanese songs　歌:三好三恵子
「赤とんぼ」　ピアノ:志垣のぞみ
「手のひらを太陽に」
「ふるさと」　皆様とご一緒に
“Doshisha College Song”

＊Friendship Circle(友情のサークル)
“O tete tsunaide”(おてて繋いで)

＊Mary Sue 牧師による終祷

“Sayonara”(さようなら) 14:00
~~~

さんであることを知った。金田姉妹の祖母の節子さんも女子部の同窓であるが、さらにその祖母は同志社女学校の初期の卒業生であるとのこと。

新島・同志社の繋がりがあることを発見したのだそうだ。

次にスタークウェザー先生の甥孫のランダル・ファウラーさんの紹介と挨拶があった。彼は先祖のことを調べているうちに「アリス」のことを知り、２０２４年には来日、同志社女子大を訪ねられた。墓碑もぜひ訪ねたいとのことでこの度来ていただけた。ランダルさんから記念にとウインドチャイムを女子部にプレゼントしてくださった。



それからＪ・Ｄ・ディビス先生のひ孫であるエレノア・レイニーさんの紹介と挨拶。新島襄ラットランドアピール１５０周年記念ツアーに参加され、今回女子部創立１５０周年記念ツアーにもすべての行程に参加されている。

フラダンスの振り付け・意味を教えてもらい素晴らしい踊りを披露してもらった後は、三好三恵子さんが志垣のぞみさんの伴奏で日本の歌「赤とんぼ」「手のひらを太陽に」を歌い、続けて「故郷」を皆で歌った。さらに同志社カレッジソングを歌い、グリークラブＯＢのリードで同志社チアーを唱和した。

教会の方々の温かいもてなしと笑顔に包まれて過ごす時間も残り少なくなり、皆で一緒にテラスに出て友情のサークルを作り、「おててつないで」の歌に動きをつけて歌い、この出会いと繋がりを確かなものにした。









8月20日　ピルグリム・プレースを訪ねて

サンディエゴを立って、クレアモントまでバスで行く。いよいよピルグリム・プレースに到着。

――ピルグリム・プレース　Pilgrim Place

もとは会衆派引退牧師のコミュニティ。今は社会貢献をなさってきた方々の高齢者コミュニティとなっている――

そこは広い敷地にたくさんのかわいい平屋の家が立ち並ぶ静かな場所であった。施設内の所々にある三浦啓子さん（1956年女子大家政科2年修了）のガラスアートを辿りながらミュージアムまで案内され、同志社女子大の初代学長であったヒバード先生の遺品その他のコレクションなどに見入った。



食事時になると多くの方々が敷地内に二つある食堂にそれぞれ集まり、賑やかにおしゃべりしながら食事をとられる様子は和気あいあいとしていて、本当に楽しんでおられる。私たちのため別室にしつらえられたランチ会では深田ローラさん（故　同大名誉教授　深田未来生先生のご夫人）やバーバラ・メーセンディークさんをはじめ、日本にゆかりのある方々が十数人いてくださり、ランチをご一緒した。

ジョンさんとおっしゃる方はヒバード先生の晩年10年間親しくし、またお世話をしていたと話され、「彼女は本当に素敵な人だった」といっておられた。ローラさんやバーバラさんとはツアー参加者の中にも知己がおられ、手を取り合って再会を喜んだりプレゼントを贈られたりする様子は、横から見ていても感動的で心に熱いものが流れるようだった。

ランチを終え、みんなで記念写真を撮り、ローラさんの96歳のお誕生日が近いとのことでハッピーバースデーの歌を歌ってお祝いした。



その後デッカーホールに移り、讃美歌会を催した。デッカーホール舞台中央にはヒバード先生ご永眠の記念として女子大から奉献された「鳩のステンドグラス」（三浦啓子作）が青く輝いていた。歌った讃美歌は古いものから新しい讃美歌までとりどりで、どれもが平和を願うものだった。鳩のステンドグラスに向かって声を合わせて歌うのはすばらしい体



験だった。

ピルグリム・プレースには多くのボランティアのスタッフがおられ、皆がにこやかに立ち働かれ高齢者の方々に寄り添う姿は素晴らしく、訪ねた私たちにも元気をくださるものだった。

思いがけなく多くの人たちとの出会いがあり、豊かな時を共にして、幸せな心持ちでピルグリム・プレースを後にした。

8月21日　パサデナを経てロサンゼルス訪問

クレアモントからロサンゼルスに向かう道すがらパサデナに立ち寄った。

パサデナはデントン先生が日本に来る前に小学校教師を務めていた所。そのデントン先生の足跡をたどるような道筋でバスは町の中を走る。



訪れたのは同志社栄光館に多額の寄付をしてくださったファウラー家。今、邸宅は残っていないがそこには音楽堂や高校が建ち、奥にはファウラーガーデンが広がっている。



そのあと夕刻の同志社校友会・同窓会アメリカ支部との懇親会までの時間をロサンゼルス観光して過ごし、18時過ぎに会場に到着。アメリカ支部の校友・同窓7人の方々をお迎えしての懇親会を催す。

日本を離れ長くアメリカで暮らしておられる方、アメリカに滞在し活躍されておられる方、お一人おひとりの元気なお声で語られるそのお話を聞きながら、同志社人の頼もしさを感じた。

歓談は大いに盛り上がり、同志社に繋がる者たちの強い絆を再認識することとなった。



女子部のはじまりを訪ねるツアーを終えて

スタークウェザー先生の墓碑を訪ね、デントン先生・ヒバード先生の足跡をたどり、同志社につながる方々に出会い、今活躍の方々と交わり、本当に出会いの多い旅となった。ツアーガイドも同窓生が担う、まさに女子部手作りのツアーとなった。そして同志社・同志社女子部の誕生とその歩みには今も昔も神の御手による備えがあるのだということを強く感じた。

大学

「エンジニア＝男性（？）」を変える男女共同参画意識への視点と教育の役割

政策学部　教授　田中（たなか）　秀樹（ひでき）

十五年ほど前の話ですが、本学での博士号取得後、学振プログラムで海外に派遣いただける機会がありました。当時よりエンジニア人材のマネジメントについて研究をしていた私は、イギリス（ケンブリッジ大学）やアメリカ（ミシガン大学）での受け入れ教員との議論の中で両国において同じ話を聞きました。その話とは、両国とも、子どもたちに「エンジニアの絵を描いて」と頼むと、「多くの子どもは男性を描く」という話です。日本より男女共同参画が進んでいるイメージのある両国（そして、屈指の文教地域）でさえ、子どもたちの頭の中には「エンジニア＝男性」というイメージが根強く残っているのです。実際、当時このような現象は世界各国で確認されたという報告もあります。

少し昔の話なので、現在の状況は変わっているかもしれませんが、この結果から、子どもたちが家庭、学校、メディアや社会環境を通じて、例えば「男の子は理系」といった無意識の固定観念（アンコンシャス・バイアス）を学習していることが垣間見れます。また、子どもは幼少期からジェンダーステレオタイプを吸収し、それが将来の進路選択や自己認識に影響を及ぼすと指摘されています。

現在、私は滋賀県の男女共同参画審議会の委員を務めており、企業組織だけではなく、地域社会そして教育を通じて男女共同参画をいかに進めるべきなのか、を考える立場にいます。そこで強く感じていることが、男女共同参画を単なる「公平性」の問題にとどめてはいけない、そこだけを伝えるのではいけないということです。

経営学の研究において、多様な背景や経験を持つ人々が協働する組織ほど創造性や問題解決能力が高まること、ジェンダー平等は社会正義の実現だけでなくイノベーションや経済成長を支える重要な戦略であると指摘されています。つまり、「公正性の〝もう一歩先〟」、すなわち、男女共同参画が果たす役割・社会に与える〝その先のインパクト〟を見据えて、それらを推進することが求められます。

我々教育機関は、教育・研究の場を通じて、多様な価値観やキャリアモデルを生徒・学生に提示することができる場でもあります。まずは、我々同志社人ひとりひとりが未来を創る生徒・学生たちの参照点となるべく意識・行動を変えることが、大切な一歩になるはずです。

女子大学

AIの時代と長編小説

表象文化学部・准教授　木島（このしま）　菜菜子（ななこ）

先日、就活中のゼミ生が「またAI面接で落ちました。2回目です」と話してくれました。隣にいた別の学生も、同じ経験があると教えてくれました。新規採用の第一次面接はAI相手という会社は増えているようです。

彼女たちは昨年、半年かけて19世紀イギリスの作家シャーロット・ブロンテの長編小説『ジェイン・エア』を読んだゼミの仲間でした。毎週読む量が多く英語も難しく、予習は大変そうでした。授業では「ジェインかわいそう」「ロチェスターのどこがいいの」などの直感的な感想の共有に始まり、自立とは・教育とは何か、対等とはどういうことかなどの問いをテクストに立ち返りながら議論したり、語りの構造など小説の技法や作品の歴史的背景も検討しつつ、最後には「あまりに色々な要素があって、何を論じたいかわからない」などと言いながらペーパーを書き上げた優秀なグループでした。

作家ジョージ・エリオットの小説『ミドルマーチ』は、翻訳で文庫四巻に及ぶ長編です。「これは時がゆっくり流れていた時代の文学だ」と述べた批評家もいるように、主人公ドロシアの人となりの描写に冒頭数ページが費やされ、物語はなかなか始まりません。そしてそのドロシアは、高い志を持ちつつもそれを実現することは叶いません。やがて物語の終盤で、彼女は一人窓の外を見ながら、「私たちは何のために生きているのでしょう、もしお互いの人生を、少しだけ困難でないものにするために生きているのでないならば。」と思い至ります。less difficultというその控えめな表現が、いかにもエリオットらしい。私たちは他人の人生を、easyやhappyなものにすることなど所詮はできない。「少しだけ困難でない」ものにすることくらいしか。

卒業する時、「文学の読み方を学び、世界の見方が変わりました」と伝えてくれた学生がいました。時間をかけて言葉やテクストに向き合い、そこに直接的・間接的に表象されているものを辛抱強く読み解く経験が、これからの彼女たちの長く困難な人生を少しでも支える力になってくれればと思いました。即座に答えを出してくれるAIの時代にこそ、複雑さに耐え、慎重に思考し続ける経験ができる授業を目指したいと思うと同時に、可能性に溢れた一人一人の人間を相手に過ごせる日々を感謝したいと思います。

香里中高

香里中学校・高等学校と学校周辺の歴史から日本画制作を通して平和を考える

美術科教諭　水江（みずえ）　亮太（りょうた）

私は日本画を専門分野とし、制作活動も行っています。学生時代は猛禽類等の花鳥をテーマとしていましたが、最近は大阪の戦跡をテーマにしています。その理由は、香里中・高の前身が日本陸軍と関連のある大阪偕行社の学校であった事と、近辺には戦時中は陸軍造兵廠の火薬工場が点在しており、その跡地の多くは現在公園等になって残っている事です。近年それらの遺跡が老朽化や開発で次々に姿を消している事を知り、日本画で残しておきたいと思い2012年に「工廠跡の石段」というF150号作品を制作しました。これは、万が一爆発が起きた際の爆風除けの土塁が現在は公園の裏山になり、そこにある当時からあったであろう古い石段を描いたものです。

23年、24年は大阪市福島区のJR東海道線のガード下にある



第44回日展入選作「工廠跡の石段」



第7回新日春展入選作「痕」



第8回新日春展入選作「痕」

機銃掃射痕を描きました。これは、大阪大空襲の際にガード下に逃げ込んだ人々に向けて米戦闘機が行った機銃掃射で数十名が亡くなった時のものです。現在もコンクリート壁には弾痕が無数に残っていて、間近で見て触れると戦慄を覚えます。

26年はいきいきランド交野に展示されている三式戦闘機『飛燕』のエンジンを描きました。このエンジンは1945年7月に交野上空での米軍機との戦闘で撃墜され、戦死された中村中尉機のもので（交野市には中村中尉の慰霊碑があります）、長らく地中に埋まっていた機体が05年に第二京阪道路の工事の際に発見、発掘されたものです。

これらの制作活動を通して、戦争は決して遠い世界の事ではなく、身近な場所（香里中・高にも大阪偕行社時代の遺物がある）にも多数潜在する事、歴史の証人ともいえる遺物を見つめ、当時の人々に思いを馳せ、生活の空気を感じる事で、実感で真に平和を希求する心を育みたいと願っています。



第60回日春展入選作「跡」

同志社の 一貫教育

hitohito-Li

同志社一貫教育探求センター
所長　川満（かわみつ）　直樹（なおき）

同志社一貫教育探求センターでは、同志社教育の更なる発展と充実のため、各学校教員が合同で授業内容や授業方法の改善・向上に努めるとともに、教員間で教学上の課題を共有し、解決策を模索することを目的として「同志社研修会」（以下、研修会）を年に一度開催しています。本年度は、6月24日（水）に研修会を開催しました。

本年度の研修会では、最初にスポーツ健康科学部教授の竹田正樹先生の「スポーツが拓く同志社の未来」と題した基調講演があり、その後6つの分科会に分かれて活発な議論が展開されました。本年度は分科会が6つ開催され、そのうち1つの分科会で、「教職員の自主的な研究会」の報告発表がありました。教職員の自主的な研究会では、法人内各学校の教職員がそれぞれ自主的に、教育に関する研究や活動に取り組んでいます。同志社一貫教育探求センターは、これまで各学校間における教育内容の相互理解、共有化（根幹部分の共通化等）が促進されるように支援してきました。



今回は、2023年度から3年間の研究会活動を終えた2つの教職員の自主的な研究会のプログラムについて、この場をお借りして紹介します。



【第1分科会】大学
テーマ：大学入学共通テストおよび学習指導要領の改訂に関する最近の話題より
発表者：多久和　英樹 教授（大学理工学部）

【第2分科会】香里中学校・高等学校
テーマ：総合的な探究の取組みについて
発表者：虫本　隆一 教諭（社会科）

【第3分科会】国際中学校・高等学校
テーマ：「代数・幾何入門」の実践　ぶぶんぐんゲームによる群論とグラフ理論への入門
発表者：山﨑　美幸 教諭（数学科）

【第4分科会）　国際学院初等部
テーマ：個人探究と情報活用能力を育てる授業づくり
発表者：荒谷　達彦 教諭（初等部）

【第5分科会】同志社一貫教育探求センター
テーマ1：Wild Rover Project ～デジタルブック・同志社カルテット～
発 表 者：中川　好幸 教諭（小学校）
　　川江　友二 教諭（中高）
テーマ2：小さな実践から生まれる人のつながり－『新島襄物語』YouTube プロジェクトを通して－
発 表 者：青田　忍 教諭（国際学院初等部）

【第6分科会】同志社一貫教育探求センター
テーマ：皆で考えよう！〝点〟の支援から〝線〟の支援へ：一貫教育だからこそできること
発表者：阪田　真己子 教授（同志社一貫教育探求センターダイバーシティ推進に関する検討部会委員長
学校法人同志社理事・大学文化情報学部長）

① Wild Rover Project

Wild Rover Projectは、同志社に関わるみなさんを対象に新島襄の志や同志社の建学の精神を身近に感じてもらうためのものを作りたいという思いから発足した会です。同会のメンバーは、小学校の中川好幸先生を代表に、振本ありさ先生、中学校・高等学校の桜井希先生、大岡創一朗先生、川江友二先生、David Foreman先生、大学の森田喜基先生、女子大学の山下智子先生です。Wild Rover Projectが行った二つの活動内容を紹介したいと思います。

一つ目は、新島襄の生涯を紹介した小冊子『新島襄の生涯』の制作です。小冊子は「デジタルブック版」と「PDF版」があります。デジタルブック版は日本語と英語のそれぞれがあり、新島襄に関する写真なども掲載されています。PDF版は、日本語と英語以外にハングル、簡体中国語、繁体中国語で制作されています。小冊子といっても日本語と英語で制作されたものは、61ページもあります。

二つ目は、「同志社カルテット」の制作です。同志社カルテットは、年齢を問わず誰もが楽しめるカードゲーム（25種類100枚のカード）です。カードゲームを通して同志社の歴史と新島襄について学ぶことが出来るようになっています。ルールは以下のとおりです。

1. 4~5人組となり、全員にカードがなくなるまで配ります。
2. 同じ番号がついている4枚組を集めます。
3. 順番を決め、「○さん、△番の××のカードを持っていますか」と尋ねます。
4. 持っている人は、正直にカードを渡します。カードをもらえたら続けて尋ねることができます。
5. もらえなかったら次の人に順番が移ります。多く4枚組を作った人が勝ちです。





研究会の分科会での発表時に、実際にフロアのみなさんでカードゲームをしました。このカードゲームのポイントは、同志社と新島襄について知ることはもちろんですが、相手の名前を呼んで「カードを持っていますか」と尋ねるので（ルールの3）、知らない人とも一瞬にして友達になることができることです。

小冊子『新島襄の生涯』

同志社カルテット
100語一覧表

Wild Rover Project の活動を紹介しましたが、小冊子と同志社カルテットの二次元コードを紹介しますので、ぜひアクセスしてください。

②七五太（Shimeta）の会

七五太（Shimeta）の会は、幼稚園児と小学生、そして留学生など、法人内の誰もが新島襄の生涯と志への理解を深められるよう、日本語と英語それぞれの初級学習者が手に取りやすい教材を開発することを目的として活動を行ってきました。同会のメンバーは、国際学院の青田忍先生を代表に、Scott Hemphill 先生、藤井元嗣先生、石川眞弓先生、そして大学の北川雅章先生と松本秀輔先生です。

これまで使っていた新島襄の生涯と志について学ぶための教材は、幼稚園児、小学生と留学生たちには難しく、そのためイラストやタブレットなどを使って視聴できるような教材の開発が必要となっていました。これらの点を改善すべく、七五太（Shimeta）の会では YouTube 版の『新島襄物語』を日本語と英語で制作しました。現在(2026.6.24)、七五太（Shimeta）の会が制作した日本語の『新島襄物語』は YouTube に12本公開されています。また英語版は11本公開されています。





七五太（Shimeta）の会が制作した YouTube 版『新島襄物語』は、今後授業や研修会等で教材としての活用も期待されます。そして多くの人に新島襄の幼少期からの生涯や同志社の歴史に関心をもってもらうことに役立つものだと思います。

百聞は一見に如かず、と言います。ぜひ以下の二次元コードからアクセスして『新島襄物語』をご覧になってください。

YouTube『新島襄物語』

同志社一貫教育探求センターでは、今回紹介させていただきましたプロジェクト以外にも同志社教育の充実と発展を図り、法人内各学校の一貫教育の進展を目指すことを目的とし、研修会およびプロジェクトを実施しています。多くの教職員の皆さまに研修会やプロジェクトにご参加いただき、同志社が目指す教育の充実と発展のために共に歩んでいきましょう。

no.54

建物案内

山本覚馬記念アリーナ

（大学）









山本覚馬記念アリーナは、同志社創立150周年記念事業（大学事業）として整備が進められたスポーツ・コンプレックスの中核施設として、京田辺キャンパスに2026年3月に竣工しました。

本施設は、同志社創立に貢献した山本覚馬の名を冠し、知と身体の調和を体現する空間として設計されています。アリーナは34m×59m（約2，000㎡）の広さを有し、天井高12mを確保することで、各種公式競技に対応可能な仕様となっています。

1階に競技空間、2階に観覧席を配置し、スポーツ・コンプレックスのエントランス広場であるウェルネスコートやメインストリートに向けて開かれた構成としています。内部の活動や競技の躍動感が外部にも伝わる設計により、スポーツをより身近に感じられる環境を創出しています。

山本覚馬記念アリーナは、競技スポーツの振興に加え、学生・教職員・地域社会をつなぐ交流の拠点として、多様な人々が集い、新たな活力と賑わいを生み出す場となることが期待されています。

建物案内
Library & Exhibition Room
（国際学院）

no.55









２０２６年度に開校15周年を迎える同志社国際学院初等部は、これまで12期の卒業生を送り出してきました。国際バカロレアのＰＹＰ認定校として、児童一人ひとりの探究心を育み、自ら学びを深める力を育てる教育環境を整えています。

本校の図書館には約２万８千冊の蔵書があり、児童は読書活動に加え、調べ学習や探究活動に活用しています。図書館は知識を得る場であるとともに、自ら問いを立て、学びを深める拠点となっています。

また、図書館の上階にはエキシビションルームを設置しています。この施設は、ＰＹＰの学びの集大成である「ＰＹＰエキシビション」に取り組むための空間の一つです。６年生は社会的な課題や身近なテーマについて探究し、その成果を発信します。室内には過去の卒業生のディスプレイも展示されており、来校者に本校の学びを伝えるとともに、これからエキシビションに取り組む児童の道しるべとなっています。

本校では、15年の歩みの中で培ってきた教育実践と施設環境を生かし、児童が自ら学びを選択し、主体的に行動できる環境づくりを進めています。また、バイリンガルかつ国際的な学習環境の中で、多様な価値観や文化を尊重しながら学ぶ機会を大切にしています。

— collection 24 —

白鷺会　記念碑



「白鷺会は、１９５６年（昭和31年）２月、高等学校の父母の会会員並びに旧会員によって学校の後援と会員相互の親睦を目的として結成された。

新制高等学校として１９４８年（昭和23年）に設立された高等学校は、翌１９４９年（昭和24年）に今出川からこの岩倉の地に移転した。戦後の混乱期の中、のどかな田園の広がるこの地で、教職員、生徒、父母が力をあわせて新たな良心教育の礎を作らんとした創業期。１９５５年（昭和30年）竣工したチャペル建設には父母の会の建設委員会が多大なる貢献を果たした。その高揚の中、父母の会会員相互の間に築かれた友情を変わらずに続けたいという思いがこの会の結成に至ったものと推察される。また、この会の名称は、当時音楽会や運動会で唄っていた「岩倉愛唱歌」の冒頭、♪白鷺飛び交う岩倉の野に、聖らに立てりわれらが母校（駒井義明先生作詞）に見られるように、当時岩倉の至る所で目にする身近な鳥、白鷺から名づけられたものである。

結成以来60有余年、白鷺会は長きにわたって千名以上の会員を有し、高等学校の備品設備充実のため尽力されてきた。また毎年の近畿各地の名所旧跡を訪ねながらの総会は会員相互の親睦を一層深めてきた。２０１０年（平成22年）ここに中学校・高等学校が誕生しても、そのまま会は存続し、活動を継続してきた。

２０２５年、この会を閉じるにあたり長年会を支えてこられた多くの会員の方々に感謝するとともに、結成から閉会までを碑としてここに記すものである。」



これは、私が依頼されて書いた記念碑由来の文章であるが、実際には3分の1ほどにまとめたものが碑に記されている。

白鷺会の活動自体は、高等学校（後に中学校・高等学校）の支援と親睦が中心であった。初年度は新島会が中心となった「しらさぎ会館」建設を支援し、その後は学校標識や校旗、タイプライターやビデオ、コンピュータなどの学校備品購入で学校を支えてこられた。

初代会長足利進悟氏、2代会長三浦竹泉氏の後も、歴代の父母の会の会長が翌年に白鷺会の会長を引き受けていただき、２０２０年代まで活動は続いてきた。しかし、コロナ禍等で会員加入がすすまずに活動を継続することが困難となり、２０２５年、活動に幕を閉じる決断に至った。最後の会長は横江泰彦氏であった。

白鷺会の長きにわたる活動を称える記念碑は中澤圭校長が揮毫し、２０２５年４月11日に除幕式が行われた。その碑は、岩倉校地しらさぎ会館入り口東側にある。

文責：中学校・高等学校　前校長　山崎敏昭

私の研究・私の授業



大学

文学部文化史学科での学び

文学部文化史学科
鍛治（かじ）　宏介（こうすけ）

２０２４年４月より同志社大学文学部文化史学科日本文化史コースに着任しております鍛治宏介と申します。富山県高岡市の海辺の小さな町で生まれ育ち、大学で京都に上京してから、これまで30年以上、京都でうろうろしながら、歴史学、特に、日本の江戸時代について、研究をしたり、教育をしたりしてきました。大学でやっていることを書きなさいとのご依頼いただきましたので、今、自分がやっていることの備忘録として、主に教育に関わることをここに書き残したいと思います。

文化史学科日本文化史コースでは、私は、1年次生向けの基礎的なゼミ、3、4年次生の卒論作成のための専門のゼミ、「日本思想史」という講義科目、「日本地域史研究」というくずし字の講読科目、さらに大学院の講義・演習などを受け持っています。本コースのカリキュラムは、日本の歴史に関する卒業論文を書けるようになるため、講義科目で知識や考え方を獲得して、さまざまな演習科目で、史料や論文を読み発表したりして、自分で論文を書くための技術をみにつけ、4年次生で卒業論文を執筆する、というたてつけになっています。私は、日本の江戸時代の歴史の専門家として採用されているので、当方のゼミには、江戸時代の歴史に関心を持っている学生たちが集まっています。ゼミ生たちは、各自、自分のテーマで、オリジナルな研究に取り組んでいます。その研究テーマは、篠山藩の地域行政についてとか、江戸時代のおまじない本についてとか、鯰絵についてとか、それぞれの興味関心に応じて、さまざまです。自分の問題関心にそって、史料を解読して、先行研究を徹底的に集めて、世界中でまだ誰もしらない歴史を発掘するべく、皆さん奮闘しています。

江戸時代の歴史を研究するためには、昔の人が書いた手紙とか、契約書とか、日記とかいった史料を読まないといけません。昔の人たちは、毛筆で書く、「くずし字」とよばれる字を書いているので、くずし字を読めるようになるための講義も担当しています。今年から講義以外にも学びの場を増やすべく、江戸時代の史料を読むための自主的な研究会も始めてみました。大学院生から1年次生まで希望者が参加してくれています。日本文化史コースには、院生や学生たちが独自にやっている研究会が、時代やテーマごとに複数あります。

講義科目としては、「日本思想史」という講義を担当しており、文化史学科の日本文化史コースの学生を中心に、西洋・東洋文化史コースの学生、国文学科などの学生100名強が受講しています。日本の思想史というと一般的には本居宣長の著作を読み解いたり、神道や仏教、儒教について検討したりする内容を想起されるかもしれませんが、当方の講義では、思想家たちが残した著作の分析ではなく、市井の人々が日々どんなことを考えていたか、といった社会思想史的な内容を主眼にしています。私自身の研究成果や、これまでの研究者の成果を紹介しながら、単なる研究成果の羅列ではなく、史料をどうやって探して、どのように読み解いていくことで、一つ一つの歴史を読み解いていけるか、私が研究者として、どのような工夫をしているかといった、研究の過程も紹介しています。

前任校在籍時、コロナ禍に直撃して、zoomを勉強したり、youtubeに動画をアップする方法を勉強したりして、どうやってこれまでの対面講義と同じ学びを継続させるか四苦八苦しました。その時、これまで講義終了後、紙で集めていたコメントを、電子の形で集めるようになりました。電子だと、必ずしも講義時間内に書かせる必要がないので、締め切りを後ろに伸ばすことができます。そうなると熱心な学生は、講義内容にかかわる論文などを読み込んだり、関連する史料を読み込んだりして、コメントを書いてくるようになって、コロナ以前より確実に深いコメントが増えてきましたので、現在もその形式を採用しています。当然、受講生の熱は様々ですが、熱心な受講生のなかには1コマの講義のコメントに4，000字以上の分量のコメントを書いてくる人もいます。こうした学生の熱を受けているうちに、折角、面白いことを書いてきてくれているので、こちらからもコメントを返そうと思ってしまいまして、数年前から、講義に提出されたコメント、さらには最終レポートにも、必ず当方からコメントをするということをやりだ

しました。よく学生のレポートの質の低さを嘆いている同僚の話を聞くなかで、改善点は指摘しないと、いつまでもなおらないな、と考えるようになったのもきっかけです。

さまざまなコメントが届くなか、もともと当方の脳内にある知識で返信できる内容でしたら、さっと質問に答えたり、その点はこの論文に詳しいよ、というアドバイスも簡単にできるのですが、なかには当方が余り詳しくないことにコメントが来ることもあります。それにちゃんとしたコメントを返そうと思うと、論文などを新たに読まないと返信できないような鋭い質問もありまして、おかげで、1週間の間に3、4本は、コメント返しのために新しく論文を読むことになります。土日などに他大学の図書館に行って、同志社がもっていない論文をコピーしてくることもよくあります（※京都の大学は、大学コンソーシアムという制度で、教員証や学生証があれば自由に他大学の図書館にも入れるので便利なので活用しまくっています）。そうやって自分では読もうとしなかった論文を読んで知識を深めていくことが、当方自身の新しい研究のきっかけに繋がることもあります。まだ論文にしていない構想段階のネタも、講義では喋っているので、いろんな角度からコメントを貰えることで、どんどん議論のなかで弱かった所への補強もできていきます。

当然、単位だけくれたらよいし、教員からの返信なんて読んでない、という学生も多くいると思いますし、実際にいい加減なコメントしか書いてこない学生もいるのですが、なかには、先生からのコメント返しがつくのを、好きな人からのラインの返信を待つような気分で待っていました、というような感想を最終講義の感想として（男子学生から）いただいたこともありまして、ある程度、教育効果はあるのかなと思っています。

当方が尊敬する同志社大学の卒業生、田中希実さんが陸上競技中長距離に全身全霊を傾けているように、歴史を学ぶ学生も4年間の間、歴史の学びに全力投球してもらいたく思っています（というようなことをゼミ生に喋っていたら、あきれられたりもするのですが）。大学の学びは、大学院に進む人のためだけのものではない、と当方はよく学生にいっています。4年間で卒業する人も、本気で一つのことを学術的に極める体験をすることは、一生の財産になると信じていますし、同志社大学文学部文化史学科で卒業論文を書いて何かの歴史を明らかにした、ということをアイデンティティにして、これからも生きていってほしいなあ、と夢想しております。



大学

クリーンエネルギー社会を拓く「燃焼研究」の最前線

理工学部 准教授
堀（ほり） 司（つかさ）

なぜ今、燃焼研究なのか？

地球温暖化をはじめとする環境問題への対応は人類にとって急務です。２０５０年までのカーボンニュートラル達成に向けて電動化が進んでいますが、すべてを電気でまかなうことは難しく、今後もさまざまな分野で燃焼技術が重要な役割を担うと考えられています。

そこで今、強く求められているのが、燃やしても二酸化炭素（CO_2）を直接排出しない「カーボンニュートラル燃料」への転換です。その筆頭候補として期待されているのが水素（H_2）とアンモニア（NH_3）です。水素は燃えても水しか出ない究極のクリーン燃料です。しかし、大気圧では約マイナス２５３℃まで冷却しないと液化できず、液化・輸送・貯蔵に大きなエネルギーやコストを要します。また、燃焼速度が速く可燃範囲も広いため、安全に利用するための燃焼制御が重要になります。

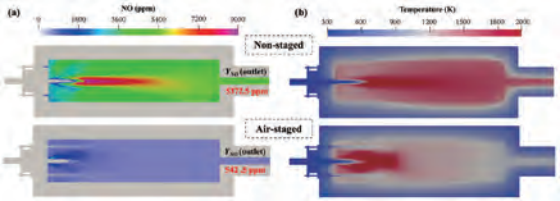
一方のアンモニアも炭素を含まないため、燃焼時にCO_2を排出しません。着目すべきは、大気圧では約マイナス33度で液化でき、すでに肥料などの原料として広く流通し、既存の輸送・貯蔵インフラを活用できる点です。水素と比較して輸送しやすいアンモニアは、資源の少ない日本における現実的な次世代燃料の一つとして期待されています。私はスーパーコンピュータを駆使した「数値シミュレーション」というアプローチを中心に、ガソリンや軽油を用いた自動車の燃焼や、アンモニアをはじめとする次世代燃料の複雑な燃え方を解き明かす研究に取り組んできました。



アンモニア燃焼の課題と解決策

しかし、アンモニアは従来の都市ガスなどに比べて燃えにくく（燃焼速度が遅い）、火炎を安定して維持しにくいという弱点があります。安定した燃焼を維持するには、バーナーの設計や燃焼条件の最適化が必要です。一方、燃料供給の状況に柔軟に対応するため、アンモニア100％の「専焼」に加えて、都市ガスなどの従来燃料にアンモニアを混ぜて燃やす「混焼」についても研究が進められています。

その双方における最大の共通課題が、有害物質である窒素酸化物（NOx）の大量発生です。アンモニアの分子には窒素（N）が含まれているため、従来のバーナーでそのまま燃焼させると、環境基準値を遥かに超える大量のNOxが排出されてしまいます。またアンモニアは特定悪臭物質として大気中への放出が厳しく規制されているため、未燃のアンモニアを残さず、かつNOxを出さずに燃やし切るという点が、アンモニア燃焼における最大のハードルでした。



この課題を解決に導いたのが「二段燃焼」という技術です。まず一次燃焼では酸素をあえて不足させて燃焼温度や反応をコントロールし、次に二次燃焼で追加の空気を送り込み、残った未燃成分を完全に燃やし切ります。私が所属する複数の大学や企業からなる共同研究グループでは、この二段燃焼法の条件を最適化することで、アンモニア混焼およびアンモニア専焼のいずれにおいても、NOx排出量を抑制できることを工業炉での実験により実証しました。これは、アンモニア燃焼の社会実装に向けた大きな成果です。

高精度シミュレーションで炉内燃焼を予測

この二段燃焼技術を発展させ、実際の産業現場で使えるようにするためには、私の専門である「数値シミュレーション」が不可欠な役割を果たします。実際の燃焼の現場では、目に見えないミクロの世界で非常に複雑な反応が起こっています。アンモニア燃焼の場合、分子から水素が1個取れた中間物質などを含めて数十種類の化学種が存在し、それらが絡み合う数百の反応が同時に起こっています。通常は計算負荷を軽減するため、これらの化学反応を数個程度の式に簡略化して計算するのですが、それでは火が消える原因や、NOxが発生する詳細なメカニズムまでは予測できません。バーナーも3次元的に非常に複雑な形をしているため、どんな形状ならうまく燃えるのかを知るためには、炉の内

部での火炎のふるまいを正しく予測する必要があるのです。

私はこの複雑な化学反応を簡略化せず、すべての反応過程を一つずつ計算に取り込む高精度な燃焼シミュレーション手法を一貫して用い、研究を続けてきました。こうした厳密な計算は、普通に実行すると最先端のスパコンを使っても何年もかかりますが、私たちは計算アルゴリズムを改良し、劇的にスピードアップさせることに成功しました。従来なら3年を要するような計算を、わずか1日程度で完了させるブレイクスルーを達成したのです。現在はこの知見を活かし、経済産業省が所管するNEDO（国立研究開発法人 新エネルギー・産業技術総合開発機構）の国家プロジェクトを通じて、企業の現場で使われる巨大な工業炉の設計・開発を工業炉メーカーと共に進めるなど、広く実用化へ向けた貢献を続けています。

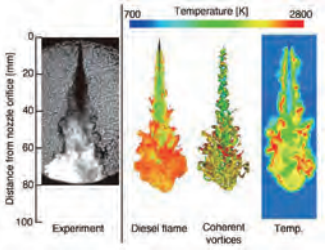
産学連携と計算科学で挑む脱炭素

今春、同志社大学理工学部に着任し、これまでに培った計算基盤をベースにしながら、現在もシミュレーションと実験の両輪をより深く融合させた研究を展開しています。水素やアンモニアの燃焼については社会実装を見据え、実際の加熱炉や火力発電所で大規模な実証試験を行い、CO_2の削減効果や安全性、設備への影響などを調べています。

また、私の所属する研究室では、自動車用エンジンに関する研究を行っています。自動車産業は日本を支える基幹産業の一つです。現在、自動車の電動化が進んでいますが、製造から使用、廃棄までを含めたライフサイクル全体で環境への影響を考えることが重要です。そうした中で、エンジンのさらなる高効率化や環境負荷の低減も重要な研究課題の一つです。

そこで、燃費をさらに向上させるとともに、燃焼によって生じる有害物質や未燃燃料を減らすため、ガソリンエンジンでは火花による着火を予測する手法を、ディーゼルエンジンでは燃焼をより正確に予測する手法を研究しています。

実は、私自身もこの研究室でディーゼルエンジンの燃焼研究に取り組み、博士号を取得しました。現在はディーゼルエンジン車で通勤し、日々の運転を通じて、新たな研究につながる着想を探しています。今後も学術の枠を越えて企業や他大学と強力に連携しながら、日本の脱炭素イノベーションを支えていきたいと考えています。





女子大学

生成AI時代におけるプログラミング教育への新たな挑戦

学芸学部准教授 尾関（おぜき） 基行（もとゆき）

情報工学の研究からプログラミング教育の実践へ

私の研究のスタートは、学生時代から9年間取り組んだ（知識源としての）映像メディアの自動撮影・編集やその応用システムの開発など、情報工学の領域でした。その後もロボットやCGなどの擬人化エージェントと人間のインタラクションに関する研究の指導に6年間携わり、前職の女子大学への着任を機に研究分野を教育工学へと移しました。プログラミングを道具として自らシステムを開発する研究から、プログラミングそのものを教えるための研究へと立ち位置が反転し、授業現場をフィールドとした実践的な取り組みが中心となりました。

前職からは所属学科も情報工学系から文理融合型（メディア×情報）に変わりました。それまでもプログラミング系の科目は担当してきましたが、情報工学を学ぶ学生に好評だった授業を文理融合型の学科にそのまま持ち込めないことは予想していました。前職の大学にいた11年間は、数学的な思考が苦手な学生でも躓かずにプログラミングの本題に取りかかれる教材とはどのようなものか、スタッフ（TA）が足りない状況で演習授業を成立させるためにAIをどう活用するかなど、眼の前に現実として立ち塞がる問題の解決に取り組みました。

実践研究としての教材作成

前職での最初の仕事は“反転授業”を取り入れることでした。「授業中に講義→課外時間に演習（宿題）」という流れを反転させ、「課外時間に講義（予習）→授業中に演習」とする授業のスタイルです。当初は定石どおり予習教材を

動画で用意したものの修正や更新に大きな労力がかかったため、主教材を文章ベースに置き換え、動画は副教材にしていきました。主教材は常に最新の情報を維持し、副教材（動画）はあくまで参考としておいて余力のあるときに更新します。その他、演習課題やその解説動画、予習チェックのための小テストなどを全てオンラインで学生に提供していたため、コロナ禍にもほぼそのまま対応できました。演習時間は全学生の共有画面を一覧表示して対応しましたが、対面時でもこの形式のほうが効率がよいかもしれません。

文章ベースの主教材は技術系ブログサービスで一般にも公開していたので、企業の方から「研修教材として使わせてほしい」と問い合わせをいただいたり、中学校からワークショップ講師として呼んでいただいたり、出版社から書籍化のお声がけもいただきました。文理融合型の学科でプログラミングを教えるという制約から始まった工夫と実践でしたが、公開しつづけたオンライン教材を通して社会と繋がり、わずかながらでも貢献している実感が得られたことは幸いでした。

「楽しい」を原動力とするプログラミング教育

今年の4月に本学（女子大学）に移り、こちらでも「プログラミングA～B」という4科目（6コマ）構成の一連のプログラミング科目を担当することになりました。前職で文理融合型の学科に移った際、プログラムの動作や結果の視覚的なわかりやすさを狙って、プログラミングで図形を描画して動かす〝ジェネラティブ・アニメーション〟を題材としました。しかし、ここ数年間のあいだに計算の苦手な学生がますます増え、例えば「大小の円を重ねて模様を描く」という演習課題を通してプログラミングの繰り返し構文を学ばせたくても、その前段階の計算のところで時間がかかりすぎるようになってきました。

一方で子ども向けのプログラミングに目を向けると、ブロックコードを組んでネコのキャラクターを動かす「Scratch」がよく使われますが、そこで躓く子どもはあまりいません。そこで私は授業で学ぶJavaScriptのテキストコードでScratchと同じようにネコを動かせる教材（ライブラリ）を作成し、Scratchのブロックコードと比較しながら学べる書籍を執筆しました。本学に移って最初の仕事はこの新しい題材の授業への導入でしたが、プログラミングの前段階での躓きは大きく減りました。

ただ、授業で扱わなくなったジェネラティブ・アニメーションは女性にも抵抗感の少ないプログラミングのジャン

ルであり、女子大学としては授業科目に残しておいて、中高生向けのワークショップなどに適宜展開したい題材です。そこで、入門よりやや本格的な内容の教材を作成し、応用科目で扱うことにしました。あとでも述べるようにプログラミングはＡＩが担う時代に入りますが、役に立つプログラムはＡＩに作らせておいて、手打ちのコーディングでは表現を楽しむことに熱意を傾けるのもよいと思います。

ＡＩ時代に求められるプログラミングの力

生成ＡＩの登場によって、プログラミング教育の現場も大きな転換期を迎えています。ほんの2～3年前まで、文理融合型の学科では、指導教員のサポートがなければ卒業研究のためのアプリの試作品も完成できませんでした。しかし今日では、プレゼンツールなどでアプリの画面構成図を作ってＡＩに実装を指示するだけで、卒業研究の評価実験に使える程度のモックアップであれば1日で作れてしまいます。単純なデータ処理など、入出力が明確なプログラムであれば実用レベルのものもＡＩにお任せできるでしょう。こうなってくると、「大学でプログラミングを教える必要はあるのか」という疑問が生じます。

この問いに対して私は、生成ＡＩの登場でプログラミングの敷居が下がったからこそ、誰もがプログラミング的思考とシステムエンジニアの技能（要件定義や設計など）を身につけるべきだと考えます。ＡＩは優秀なプログラマーですが、その前段にはクライアントの要望を具体的な設計書に落とし込むシステムエンジニアが必要です。ＡＩはシステムエンジニアの役割も担いますが、プログラミングに比べると誤りや齟齬が入りやすく、人間の介入（ＡＩとの対話）はまだ欠かせません。ＡＩ活用の鍵は〝言語化能力〟だといわれます。プログラミングの分野に関しては、その掴みどころのない能力を養う道筋が実践を通して開拓されており、具体的に学ぶことができます。

以上が私の考えるＡＩ時代のプログラミング教育の狙いですが、それを文理融合型学科の学生たちに、さらに広くプログラミングに興味のない人たちにも修得してもらうにはどうすればいいのか。これが私の研究テーマであり、そのアプローチのひとつが『楽しい』を原動力とするプログラミング教育です。自動車が登場しても自分の脚で走る人が絶えないように、ＡＩの登場で不要になってしまった（ようにみえる）プログラミングにも『楽しさ』を見出せる題材開拓や楽しむ過程でＡＩ活用に要される思考や能力を養える教材開発に取り組みたいと考えています。



国際中学校・高等学校

デザインで自分自身を表現してみよう。

芸術科（美術）教諭
北川（きたがわ）　浩司（こうじ）

正解がないから面白い！

一般的に大学受験を主眼に置いている進学校では、大学の入試科目ではない美術の授業に生徒の興味や関心を向けるのは容易なことではありません。しかし、同志社国際中学校・高等学校は、大学への推薦進学制度を活かし、受験勉強を必要以上に意識することなく美術本来が持っている「表現することの面白さ、楽しさ」を生徒たちに伝えることができる環境にあると考えています。



数学や国語などとは違い、美術は明確な正解がない科目です。では、どんな答えでもいいのでしょうか？ 決してそうではありません。授業の導入で、先輩たちが残してくれた作品を生徒たちに見せると、一様に「おー、すごい！」という声が上がります。そこで改めて「何が凄いと思ったのか？」「どこに感動したのか？」と問うと、生徒たちは一旦立ち止まり、作品を観察し、自分なりに解釈し、他者と対話しながら思考を深めるきっかけとなります。中学校の3年間、また、高等学校での選択授業を通して、何が良くて、あるいは優れていて、どこに共感できるのか…「鑑賞力」を身につけることを学びの目標としています。

気づきが生徒の学びを後押しする



授業におけるテーマの一つは、自分自身を表現することです。高校1年生の最初の授業では、生徒たちに自己紹介としての作品を作ってもらいます。手法はデッサン形式でも水彩でも漫画でも構いません。当たり前のように自画像や趣味、好きなものを描く生徒が多いのですが、なかには破った楽譜を画用紙に貼りつけて、「私は吹奏楽部ですが、いまだに楽譜が読めない。でも音楽が大好きなんです」と自分のコンプレックスを個性として伝えたり、コロコロと気が変わりやすい自分の性格をいろんな向きの矢印で表現したりと、その表現方法の多様さには毎回感心させられます。言葉では言いにくいことでも、デザインという手段を使えば「自分らしさ」を自由に表現できることを知ってほしい、経験してほしいと思っています。

自分のイニシャル（アルファベットの二文字）を使って、自分を象徴するマークを作る授業では、そのデザインが一般社会でマークやロゴとしてどのように見えるのか、どんな意味を持っているのかを考え、きちんと説明できることが求められます。黄色が好きだからと言って、白い画用紙の上に淡い色のアルファベットを置いても目立たないし、マークとしても適切とは言えません。変化を求めて文字を縦長に配置しても間延びして見えるだけかもしれません。単にきれい、面白いからということだけでなく、「背景を濃くして明暗をつけてみれば」「バランスを考えて配置してみれば」とアドバスすることで、「はっ」と気づくことも多く、生徒たちの表現力は大きく広がります。



問いを立て自らの答えを導き出す

絵具を使って絵を描くことばかりが美術の授業ではありません。基本的に題材は問いません。トレースした線の上

に雑誌の写真を切り貼りして色やテクスチャーをつけていく課題では、「どうすれば魅力的な作品ができる?」という問いかけを大切にしています。イチゴのショートケーキを題材に選んだ生徒に、「なぜこの写真を選んだの?」と聞くと、「真っ赤なイチゴがカッコ良かったから」と答えます。では、「どうカッコ良かった?」「そのカッコよさはどうすれば表現できる?」と突き詰めて考えていくと、「真っ赤なイチゴに対比する色は?」「こっちの赤のほうが…」、「この写真の質感の方がおいしそう…」という答えを生徒自らが導き出します。

目に見えているものを単純化して理解することも重要です。例えば色彩構成の課題では、人の顔を4段階の明暗で塗り分けて再構成することで、立体感を成り立たせているのは明暗、あるいは濃淡であることが理解できます。たった4色を選択することで、作品の雰囲気が大きく変わる、表現することの学びを深めることができる面白い課題です。

わくわく感を伝えたい

私自身、高校生時代の進路を考えるとき、自分が作ったもの（作品）を評価してくれる世界があることを知って、わくわくしながら受験勉強に取り組んだことを覚えています。美術系の大学に進学し、自分が専攻する分野だけでなく、彫刻や染織、陶芸などいろんなことに関心を持ち、夢中になって作品を作っている友人たちから大きな刺激を受けました。同志社国際中学校・高等学校の芸術科（美術）の教諭としてかなりの年月が経ちますが、今でもあの頃と同じように驚きを感じることも少なくありません。私が学生時代に感じた気持ちを生徒たちに伝えられたらと考えています。



以前と違って、最近は美術の表現方法も広くなっています。高校3年生では、「生命観」をテーマに粘土で立体造形作品を作る課題に取り組んでいますが、いずれはストップモーション・アニメーションなど新たな表現につながるような作品づくりもできればと思います。

私たちの身の回りには様々なデザインがあふれています。中高生の間で伝えられることは限られていますが、美術の学びがいろんなものの見方を養い、考え方を豊かにし、未来の自分を輝かせる力になれば嬉しいと思っています。



中学校・高等学校

宝くじの当せん確率・期待値を再現して、リスクを体験・実感する

中学校・高等学校　数学科教諭
園田（そのだ）　毅（つよし）

教科横断、探究的授業の実践　―宝くじ―

本校では、授業改善、探究的授業の研究・実践を目的として、他教科の教員4人でグループを作り、グループごとに決めたテーマに関連した授業を行っています。（1年間で1―2時間実施）メンバーは毎年変わり、テーマはその4人で毎年新しく決めます。各教科の切り口や授業内容・進行・振り返りを共有して、各自の授業改善につなぐことを目指しています。（授業対象は中学1年生です。）

２０２５年度、私たちのグループはテーマを「万博」としました。私は、２０２５年に開催された大阪万博会場「夢洲」の跡地にＩＲ施設（統合型リゾート）が開業されることが予定され、その中にカジノができることを紹介した上で、公営ギャンブルの一つとされる宝くじを取り上げました。

授業の目的・準備物

宝くじの擬似体験を行い、次の目標を設定しました。

・ギャンブルにのめり込んでギャンブル依存症になり、人間関係や生活破綻を作り出すなどの危険性を知る。

・ＣＭを見ると、宝くじは当たりやすいかのように思わされるが、宝くじは都道府県及び政令指定都市が主催者で、競馬やパチンコなど他のギャンブルより当たる確率が低い。この授業では本当の宝くじとほぼ同じ当せん確率（10％強）、期待値（今回は1枚５００円としたので、２５０円弱）と同じにした。当たりにくいこと、還元率が低いことを数学的、体験的に理解する。

００１―１０００の番号を振った宝くじを4色（ピンク、緑、青、黄）、計４０００枚作り、紙のお金1人１０００

円（５００円札２枚）を37―38人分作成しました。

進行

（1）カジノができようとしている話

万博に行った生徒は各クラス3分の1以上いて、万博の写真、会場俯瞰マップを見せて、「この後に何ができるか知っていますか。」と尋ねると、その後にカジノができることもよく知っていました。１９７０年に大阪万博が開催されたのは大阪府吹田市の「万博記念公園」で、最初は今回も55年前と同じ会場で開催される予定でした。それが急に変更になり、大阪市の「夢州」になりました。もともとゴミ廃棄場だったところに「夢州」駅が開通して、税金でインフラ整備が行われた、というような話も紹介しました。



（2）宝くじのしくみと「購入」

宝くじは47都道府県と20政令指定都市が主催しています。今日は私（教員）がくじの運営者です。ジャンボ宝くじとほぼ同じ当せん本数（全体の10％＋α）と金額（全体の50％弱）にしました。

※当たりくじは４４６本、当せん賞金合計99万円

1等	色＋下3ケタの数字　1本
1等前後賞	色＋下3ケタの数字　2本
1等色違い賞	下3ケタの数字　3本
2等	下2ケタの数字　40本
3等	下1ケタの数字　４００本

子どもたちは紙のお金1人１０００円を持って、宝くじ（好きな番号）を「購入」してもらいます。教室の中に8ヶ所の「販売店」を設置、買いたい番号のところに行って購入しました。何名かに「ボランティア販売員」になってもらいました。（写真下）

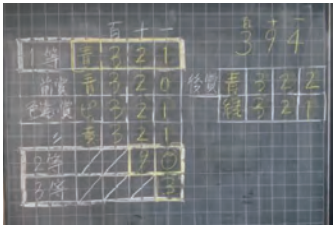
（3）当せん番号発表

3等、2等、1等（前後賞、色違い賞）の順で抽せん、発表しました。当せん番号を記入して、等級が上がると当たる本数が減っていく様子（3等の当たり番号が下1ケタで10本に1本、2等は下2ケタで１００本に1本になる。）を確認しました。



当たった人に「○等賞」と書いたラミネートと「賞金」（お菓子）を渡しました。（写真左は、当せん番号を記録した板書です。）

どのクラスもほぼ確率通りに、3等がクラスで5人前後、2等が0―2人しか当たらない結果になりました。子どもたちからは「もう1回やろう」という声が上がり、抽せんボタン（Excel）を押した生徒に対して、冗談とはいえ「抽せん者が悪い」などの声も出ました。私からは、「今、皆さんから出ている声のように『ギャンブルは辞められない』、『人間関係にヒビが入る』というようなことが起きていくのです。」と話しました。



（4）宝くじのしくみを考える

「1番儲かった人は誰でしょう?」と問うと、「宝くじを運営している人」という声が出てきました。4000枚のうちの何枚が当たりくじで、どれくらいが賞金に使われているか計算しました。当たりくじは446本、当せん賞金合計99万円が算出されます。（写真下）

収入：1枚500円×4000枚＝200万円

支出：99万円

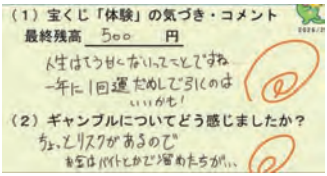
10枚に1枚強しか当たらないこと、1000円分宝くじを購入したとすると戻ってくる金額の平均は「約500円」、「半分くらい」となることを確認しました。

（5）振り返り

子どもたちからの授業後のコメント（写真左下）ですが、ギャンブルの危険性を感じた、ギャンブルをしないようにする、のめりこまないようにする、などの声が多く出ました。

・授業の中で、宝くじの「購入」から抽せん、自分の損得を確認することを通じて、数学と社会とのつながり、数学と今後の生活とのつながりを意識する一つの経験を作れたかなと思います。

・本物の宝くじと同様の当せん確率、期待値を設定して、実際に体験することで、ギャンブルを数学の目で捉えることができるようになればうれしく思います。







小学校

子どもたちの「つぶやき」から立ち上がる学び

教諭　江間（えま）　記世（きよ）

挙手制を手放し、生きた言葉を編み込む授業

私が授業で最も大切にしているモットーは「子どもたちが楽しく学ぶこと」です。教員になりたての頃の私は、挙手をして指名された児童が発表するという、標準的なシステムで授業を進めていました。しかし、いざ指名すると、児童が遠慮して口を閉ざしてしまう場面にしばしば直面しました。この子は指名される前の瞬間、何を思い、感じていたのだろう――そんな思いから、私は十数年前に思い切って、挙手制というルールを手放しました。

子どもの心が動いたその瞬間にこそ、生きた言葉が生まれます。それを挙手や指名といった手続きで堰き止めるのはもったいない。私の授業では、子どもたちが思った事をその場でありのままにつぶやきます。一見すると少々賑やかすぎるかもしれませんが、彼らは授業の文脈に深く入り込み、こちらの想像を遥かに超える鋭く豊かな感性で反応します。私は飛び交う無数のつぶやきの中から、学びの展開に繋がる言葉を瞬時に拾い上げ、それを編み込むようにしてリアルタイムで授業を構成していきます。

「素敵な間違い」を認め合い全員で学ぶ

特に研究を重ねている算数の授業では、子どもたちが生活の中で自然に培ってきた「算数的感覚」を重視しています。現代の小学校では塾などで知識の先取りをしている子も少なくありませんが、学校という場においては、全員が同じ土俵に立って学びの豊かさを味わってほしいのです。その鍵となるのが、誰もが生活経験の中で持っている直感的な「感覚」です。例えば「概数」の概念を本格的に習っ

ていなくても、子どもたちは日常生活の中で「５００円玉を持っていれば（だいたい）足りるな」と感覚的に判断します。こうした生きた感覚を授業の導入段階で引き出すための仕掛けを、常に意識しています。

数字の単位を習った後、「長さ」を扱う授業では、あえて単位を隠して「4、29、8」という数字だけを提示しました。どれが長いのかと教室はざわつき始めますが、ある児童が「数字は29が一番大きいけれど、これだけ単位がミリやったら一番小さくなるかも…」とつぶやいた瞬間、教室全体に納得のどよめきが広がりました。子どもが教師に向かってではなく、教室の仲間を意識して「みんなに呼びかけ合う姿」こそが、本当の学び合いなのだと実感します。

こうした自由なつぶやきや議論を成立させるには、大前提として「絶対にクラスの仲間からバカにされない」という強固な安心の空気感が必要です。そのため、４月の新学期開始後の１カ月間は、その空気づくりを徹底します。もし誰かの発言を笑うようなつぶやきが出れば即座に授業を止め、互いを尊重し合う関係性を築くよう促します。教室にあるのは「相手を自分と同じように大事にしよう」というルールだけです。何事も自分事として捉えられるようになることを大事にしています。

安心感が醸成された教室では、「間違い」の価値も反転します。私のクラスでは誰かが間違えると、それを「素敵な間違い」と呼び、黒板に花丸をつけます。子どもたち自身も「間違えてくれたおかげで、どこが違うかよく分かった」と言葉をかけ合います。ダメ出しをされてもへこまない関係性があるからこそ、シャイだった子が自分の考えをアウトプットし始め、肯定されるたびに才能や感性を開花させていくのです。現在、教室には「たとえる」「つなげる」「予想する」など、思考のつぶやきを価値づける約20種類のカードを用意し、子どものつぶやきを褒めてカードを掲示し、言葉の価値をクラス全体で共有しています。

「道草教育」で未来を生き抜く自立心を涵養

本校の教育理念の大きな柱に、自ら探究し、あえて遠回りや試行錯誤のプロセスそのものを楽しむ「道草教育」があります。私はこの理念を日々の実践に落とし込んでいます。小学校の授業づくりでは「めあて・まとめ・振り返り」が基本だと言われていますが、本校では「今日のめあて」を、授業の最初に教師側から提示することはありません。めあてとは本来、子どもたち自身の内側から「困り感」や「もっと知りたいという欲求」として自然に生まれてくるもの

だからです。

たとえば4年生の「割合」の授業で、私は教科書のデータをそのまま出すのではなく、「先生な、最近2キロ痩せてん」と切り出します。子どもたちは普通の反応をします。しかし続けて「実は、生まれたばかりの赤ちゃんも2キロ痩せてん」と言うと、教室は一気に騒然となり、集中し始めます。同じ2キロであっても、元の体重によって意味の重みがまったく異なるという「割合の感覚」を、子どもたちは自らの感性で掴み取ったのです。

その直後に、クジラとイルカの赤ちゃんの成長の数値を提示します。このとき、あえて「元の長さ」を伏せて、成長した分の3メートルという数値だけを見せます。すると子どもたちから「赤ちゃんのときの『元の大きさ』を教えてくれないと、どっちがすごいか比べられへん！」と、要望が突きつけられます。ここで初めて、子どもたちの側から「元の大きさを知る」という明確な「問い（めあて）」が生まれました。彼らが自ら問いを求め、学びたいと渇望したその瞬間に、初めて教科書を開いてデータを出す。彼らが学びたいと思っている瞬間に、とことん道草をさせ、探究を深めさせることが、同志社小学校らしさだと思います。

こうした学びの軌跡は、子どもたちのノートにも深く刻まれています。例えば昆虫好きの子は虫の絵を描き込みながら計算プロセスをまとめるなど、一律ではない自由なノート作りを通して個性を伸ばしていきます。それは彼らにとって「世界に一つだけの教科書」になり得ます。誰かの1冊が満杯になるたびに、私は本人と保護者の了解を得て、そのノートをお借りしています。子どものリアルな思考の動きが詰まったノートは、私自身にとっても授業を客観的に振り返り、次の実践へと繋げる最高の記録であり、大切な研究財産となっています。

同志社の創立者である新島襄は「倜儻不羈（てきとうふき）なる書生を圧束せず」という言葉を遺しました。子どもたちを一定の型にはめ込まず、個々の自由な発想と信念を重んじるこの精神は、私の教育実践の根底に深く流れています。小学校時代に、正解を急がず、自らの感性に従って徹底的に道草をし、主体的に問いを立てて対話した経験は、子どもたちの生涯の確かな土台となるはずです。「自分の思いを恐れずにアウトプットする力」を携えて、子どもたちが上の学校へと進み、これからの不確実な社会を自由かつ自律的に生き抜いてくれることを願っています。

ビジネスと経済における良心

大学長
小原 克博（こはら かつひろ）
大学客員教授・オックスフォード大学教授
ヒュー・ウィッタカー

オックスフォードと同志社

――世界と日本の学生が描く社会のあり方

小原●本日はウィッタカー先生とお話しできる機会をいただき、大変嬉しく思います。ウィッタカー先生はオックスフォード大学で長年教鞭を執られ、現在は客員教授として本学社会学部で教えておられます。まず、簡単な自己紹介をお願いできますでしょうか。

ウィッタカー●私は国際基督教大学を卒業後、イギリスで日英比較研究の専門家ロナルド・ドーア（Ronald Dore）先生に師事した後、ケンブリッジ大学で12年間教鞭を執ったのち、同志社大学のビジネススクール立ち上げに参加しました。その際、21世紀COEプログラム（※文部科学省による卓越した研究拠点の形成支援事業）で小原先生の「一神教の学際的研究」と私たちの「技術・企業・国際競争力の総合研究」が採択され、先生と初めてお会いしたんですよね。その後オークランド大学を経てオックスフォード大学に移り、日本社会や経済・経営を教えてきました。

小原●日本、ニュージーランド、イギリスと、多角的に比較できる視点をお持ちですね。オックスフォード大学では、主にどのようなテーマを教えておられましたか。

ウィッタカー●高度経済成長や90年代以降のバブル崩壊・低成長といった従来の論点だけでなく、2015年頃からのDXやGX、「持続可能な資本主義」といった日本の新しい動きを学生たちと分析してきました。

小原●今お示しいただいたのはグローバルな課題でもありますが、オックスフォードの学生と日本の学生とでは、見方やアプローチに違いはありましたか。

ウィッタカー●私が主に教えていた大学院には世界中から学生が集まっていました。彼らは客観的・中立的に分析する傾向が強いです。一方、私が同志社大学で社会学部や理工学部などの学生による発表や論文に触れて非常に新鮮だ



ったのは、彼らが単なる分析にとどまらず、「利益をどう公正に分配すべきか」といった独自の道徳観や社会的公平性の視点を持っていたことです。これが良心教育の成果なのかは分かりませんが、感銘を受けました。

小原●同志社の学生が道徳観や社会のあり方を意識できているのは心強いことです。いま触れていただいたのは、学部・研究科を横断して実施した研究交流ワークショップのことですよね。学生たちに良い経験になったことと思います。オックスフォード大学では、日常的に学際的な交流はありますか。

ウィッタカー●カリキュラムは専門分野で分かれているため、学部や修士課程の学生たちが他学部の授業を受けることは、あまりありません。ただオックスフォードにはカレッジというシステムがあります。私はセント・アントニーズ・カレッジのフェローですが、そこでは専門や学部を超えた多様な研究者や学生が日常的に交流し、セミナーや研究発表を通じて活発に議論を交わしています。

小原●分野を超えた、多種多様な交流がありそうですね。

経済学の原点

――アダム・スミスと「愛・共感・良心」の再発見

ウィッタカー●例えばリージェンツ・パーク・カレッジの元カレッジ長であるポール・フィデス（Paul Fiddes）教授と、共同研究を行いました。彼はプロテスタント系の神学者で、「宗教における愛（Love in Religion）」という国際的なプロジェクトを主導しておられました。あるとき、彼から「ビジネスと経済における愛（Love in Business and Economy）」というテーマでセミナーシリーズを一緒に立ち上げないかと誘われたのです。イスラム、ユダヤ、ヒンドゥー教、ビジネス、社会科学などの専門家を集めて15回にわたるセミナーを開催し、現在はその成果をまとめた書籍を共同編集中です。

小原●非常に挑戦的で興味深いテーマですね。経済学やビジネスの文脈で「愛」という言葉が使われることは、通常ほとんどありませんから。

ウィッタカー●フィデス教授は、「愛」という概念を単なる感情としてではなく、知恵（wisdom）、美徳（virtue）、慈愛（benevolence）、あるいは自己肯定感としての愛（self-love）といった多角的な側面から捉えています。そう捉え直すと、日本のビジネス文化における「仁」や知恵

とも深く重なります。そしてセミナーを進めるうち、私たちのテーマは、実は「経済学の父」と呼ばれるアダム・スミスの原点に通じるものであることに気づきました。スミスは『道徳感情論』で「共感（sympathy）」の重要性を説いています。しかし後世の人々は『国富論』の利益追求の側面ばかりを評価し、『道徳感情論』の倫理的側面を無視して、スミスの主張を手放しの自由主義であるかのように誤解しました。私たちはスミスが本来持っていた共感や美徳という愛の側面を、今改めて経済の議論に取り戻そうとしているのです。

小原●おっしゃる通りです。アダム・スミスを真に理解するためには、『国富論』と『道徳感情論』をセットで読まなければなりません。『道徳感情論』で示された内容こそ、現代に強く求められています。同著でスミスは愛という言葉こそ使っていないものの、共感・公平性・正義、そして自分自身を第三者の視点から客観的に見つめる「公平な観察者（Impartial Spectator）」あるいは「内なる裁判官（The Judge Within）」が必要不可欠だと論じました。この「公平な観察者」という概念は、まさに「良心」そのものです。人間の利己的な欲求こそが資本主義の原動力になるため、それは肯定するけれども、人間の欲求が無制限であってはならないと、スミスは考えていたわけですね。

ウィッタカー●「愛」の側面で言えば、「エロス」と「アガペー」のバランスとして捉えることもできます。起業家精神のように自分を表現・実現したいという感情つまりエロスもまた、神様から与えられた自然なものです。しかし、それが社会的貢献や他者への配慮、つまりアガペーとどのようにバランスを取るかが重要です。その意味で、「愛」はビジネスから切り離されたものではなく、ビジネスの内部に組み込まれているべきものなのです。

小原●それはアダム・スミスの時代のはるか以前へと遡る、大きな課題です。人間の欲望や自由は大切なエネルギーですが、コントロールを失うと暴走してしまう。だからこそさまざまな宗教は、人間の欲望をいかにコントロールするかを教えてきました。経済活動と愛・共感・良心は、本来深く結びついているべきものですね。

ウィッタカー●それに関連して、発展経済学者のアルバート・ハーシュマン（Albert Hirschman）が著した『情念の政治経済学（The Passions and the Interests）』という本を思い出します。かつて宗教などが抑え込もうとしていた人間の破壊的な「情念（passions）」は、近代市場経済の成立とともに「利益追求・関心（interests）」へとしだいに置き換えられたという主張です。利益の追求は社会を平和にした、つまりプラスの方向へ導いたと書かれてい



る、刺激的な本です。

小原●ただ企業も利益最大化だけを追求しすぎると、自己コントロールが効かなくなり、社会貢献という視点が失われてしまいます。本来は自己の利益つまり利己と、社会貢献すなわち利他の、双方のバランスが必要です。近年、若者の就職観を聞いていると、単に利益追求のみに突き進む会社よりも、社会貢献を重視する会社を選びたいという人が増えていると感じます。

現代資本主義の歪み

――株主至上主義の限界とDX・GXの課題

ウィッタカー●私も日本に来て、特に同志社でそれを強く感じます。若い世代は社会の動向をよく見ています。

小原●特にヨーロッパで顕著だと思いますが、消費者側にも「倫理的な消費者（ethical consumer）」という視点が増えてきました。製品が安価で高品質であることだけでなく、その企業が倫理的に活動し、社会貢献しているかが問われる時代です。そうでないと競争に勝てなくなっています。

ウィッタカー●フィデス教授とのプロジェクトに参加しているオックスフォード大学のビジネススクールの研究者コリン・マイヤー（Colin Mayer）も、企業は株主至上主義から脱却し、ビジネスの社会的目的を明確に表明した上で評価されるべきだと言っています。「目的のあるビジネス（Business with Purpose）」が重要であると。そのためには法律をかなり変える必要があると提案していました。

小原●現在の資本主義経済を放置すれば、巨大な経済格差を生み出すことにより、社会の不安定化や、最悪は民主主義社会をおかしくさせる危険性があります。経済活動を活性化しつつ、特定の人たちだけが儲けて完結することにならないような、新しい仕組みの構築が必要ではないでしょうか。地球環境への負荷も深刻ですから、人間はその責任を取らなければいけません。

ウィッタカー●２０２０年頃、ＤＸとＧＸは経済変化における車の両輪であると言われるようになりました。しかしその後、その両輪はどんどん離れていき、ＤＸについては

AI市場に莫大な金が注ぎ込まれています。

小原●そして急増するデータセンターが、莫大な電力と水を消費していますね。

ウィッタカー●そうです。AI市場が環境に負荷をかけている現状は、市場支配と独り勝ちを狙う（Silicon Valley流）DXビジネスの負の側面と言えます。一方でGXは、地域コミュニティや多様なステークホルダーとの協調を必要とする、ステークホルダー型イノベーションです。AIがDXやGXを支配するのではなく、逆にサポートするという視点が必要で、それをいかに実現するかが大事な課題です。

小原●まったく同感です。つまり「グリーンAI」のようなものが生まれてきてほしいのですが、現状は全然そうなっていませんね。

ウィッタカー●莫大な資金が投入されるDXの世界では、投資家へのリターンが最優先されがちですから。非常に懸念される事態です。

日本の伝統と企業論

――渋沢栄一の「道徳経済合一」と「コミットメントの論理」

小原●日本の経済について、先生が他に気になっている点はありますか。

ウィッタカー●日本における2000年代から2025年頃までの流れを見ると、大企業を中心に株価や株主配当を最優先する新自由主義的な動きが急速に強まりました。その一方で、日本人の根底にはそうした株主至上主義に対する抵抗感も、少なからず存在していたように感じます。宗教や倫理、良心を深く探究されてきた小原先生からごらんになって、実際の現場にいる日本のビジネスパーソンは、そうした「良心的な考え方」を抑えているのでしょうか。

小原●ビジネスの現場で良心を意識する企業は、まだまだ少ないのが実情でしょう。しかし同時にESG（環境・社会・企業統治）投資などが広がっているため、環境や倫理に完全に無配慮な企業は激減しています。今はまさに過渡期です。現在は大企業であっても、幹部の多くが「従来のビジネスモデルのまま10年後、20年後に生き残れるだろうか」という深い不安を抱えています。そこで自社の専門領域だけに閉じこもるのではなく、世の中を幅広く俯瞰できる教養、すなわちリベラルアーツを求める動きが強まってきました。私もさまざまな企業に呼ばれて、人間の欲望のあり方や歴史、宗教を資本主義社会の課題などと組み合わせて、共に考える機会を持ってきました。

ウィッタカー●自らの専門性を追求するあまり、全体像や

倫理観を見失ってしまうことへの危機感が、企業にもあるということですね。それはまさに、社会学者マックス・ウェーバーが『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』で「魂なき専門家」と呼び、過度な専門主義の行き着く先として警告した危機に通じるものがあります。



小原●まさにそういうことです。日本の老舗企業には「誠」や「誠実」など、儒教思想に由来する社是・社訓が多く存在します。しかし企業がグローバル化した際、言葉だけをそのまま引き継いでも海外の拠点には響きにくい。外国人が社長になる企業も増えました。そこには自分たちの理念やコアバリューを、現代そしてグローバルな文脈に合わせて自分たちの言葉で再解釈し、発言し直すという、対話のプロセスが必要です。企業も悩みながら、時代に適応しようとしています。

ウィッタカー●同志社の創立者新島襄と親しかった渋沢栄一への関心が今、再び高まっていることも興味深いですね。日本の「三方よし」に代表されるような昔ながらの不変の価値観と、時代に合わせて新しく表現し直すべきものの両方が、日本には存在しています。

小原●そこは重要な課題です。渋沢は日本の「資本主義の父」と言われますが、自著『論語と算盤』に代表されるように、「道徳経済合一説」を唱えた人物です。経済活動だけでは暴走してしまうため、必ず道徳を含めた車の両輪が必要であると。新島もまた、教育では知識の修得だけでなく、それを正しくコントロールする徳育や良心が必要であるとする「智徳並行」を主張しました。西洋から最先端の知識・技術を吸収するのに懸命だった時代に、知識と徳という両輪が必要だと説いたのです。そのような新島の思想に渋沢は深く共感したのだと思います。渋沢は同志社大学設立の募金活動において関東地方での中心人物でしたし、新島が臨終の際に手紙を書き遺した、数少ない人物の一人でした。新島の没後も、渋沢は同志社を訪れて講演を行っています。

ウィッタカー●新島はキリスト者であり、渋沢は儒教を重んじましたが、市民社会の重要性を追求したという共通点があったのですね。

小原●そうですね。私は渋沢を長らく研究してきましたが、理由の一つは、渋沢が「帰一協会」の設立に関わっていたからです。これは諸宗教が宗教や価値観の違いを乗り越え、協力して社会貢献を目指す組織でした。

ウィッタカー●すると、私とフィデス教授のプロジェクト

にも関係しますね。

小原●おっしゃる通りです。そういう関心を持っていた渋沢だったからこそ、新島の取り組みに非常に強い共感を示したのだと思います。

ウィッタカー●小原先生にもう一つ、質問があります。資本主義が拡大すると、自らを支えている根底にある「非資本主義的な価値観」を食い潰してしまうという見方があります。先ほど先生がお話しされたように、特に京都には何百年も続く老舗企業が多く存在します。これらは私から見ると、「コミットメントの論理」で動いています。自分のエネルギーのすべてをこの事業に注ぎ込むという、損得を超えた情熱や継承の倫理です。一方で、経済学や市場が前提としているのは「選択の論理」です。事情が変わったら別の選択肢に移ればいいという合理的な計算ですね。昨今、企業間のM&Aや吸収合併が非常に活発になり、この「選択の論理」が強まっています。企業を長持ちさせてきた日本特有のコミットメントの論理やその変化について、先生はどうごらんになりますか。

小原●どの企業も、自らがサステナブルな存在である限りはコミットメントを続けたいと思っているはずです。ところが社会状況が変化してくると、M&Aに組み込まれていく現象が生じる。その点で言えば、やはり企業の持続性をしっかり考えていく必要があります。

ウィッタカー●イギリスでは19世紀に多くの企業が設立されましたが、3代目あたりになると「管理が面倒だ」「都会で暮らしたい」と、あっさり会社を売却してしまうという価値観の変化がありました。

小原●その点では京都や日本には違うものがあるかもしれません。日本の、特に伝統産業の老舗企業には、何代にもわたって事業を継続し、先祖や職人の事業を守り抜くという強いコミットメントの論理が生きています。

ウィッタカー●それはマックス・ウェーバーの言う「天職(calling)」ですね。

小原●そうですね。簡単に他人には任せられない、自分に与えられた特別な使命感に通じるものです。この感覚は今も強く引き継がれていると感じます。

ウィッタカー●いわば自己実現でありながら、周囲を意識してバランスを取っているということでしょうか。

小原●そう思います。長く引き継がれてきた事業は周囲の人ともいろいろな関係を持っていますから、自ずと利他的な部分も生じます。それも含めて継承の努力をしなければという責任感があるのでしょう。

ウィッタカー●特に日本人にはその責任感が強く、今回同志社に来て改めて実感したところでもあります。

未来への展望

――「良心」と「起業家精神」が拓く新しい社会

小原●伝統を守りつつも過酷な環境にある事業に対しては、単なる新自由主義的な切り捨てではなく、社会や行政全体で支えていく仕組みも大切ですね。特に京都はそういう場所だと思います。最後にまとめとして、同志社大学が果たすべき役割について改めて考えてみたいと思います。現実の資本主義社会がどれほど効率や利益に傾斜しようとも、本学は「良心」を持った人物を育成し、社会や企業へ送り出し続ける責任があります。

ウィッタカー●私が同志社で接している学生たちを見ても、講義をよく聴き、自分自身の判断でエッセンスを汲み取りながら、「より良い社会をどう作るか」という意識をしっかりと持っています。これは同志社大学の非常に大きな強みであり、希望だと感じます。

小原●オックスフォードや世界の多様な大学を見てきたウィッタカー先生にそう言っていただけると、大変勇気づけられます。

ウィッタカー●同志社では学生たちに起業家精神を持つよう教育していますね。そのマインドを持った学生が起業すれば、必ず社会貢献をしてくれるものと思います。

小原●新島の時代に「起業家精神（entrepreneurship）」という言葉はもちろんありませんでしたが、新島自身がまさにentrepreneurshipの体現者でした。良心に裏打ちされた起業家精神を持つ若者を育て、彼らが新しい社会を切り拓いていくことこそ、私たちの変わらぬ願いです。本日は素晴らしい対話の時間をいただき、ありがとうございました。

ウィッタカー●こちらこそありがとうございました。

（2026年8月3日、大学今出川キャンパスにて）



※著者の所属・職名は執筆時のものです。



萌書房
3,300円（税込）
刊行日 2026年2月21日

災害と福祉をつなぐ知の挑戦
―『災害と福祉の交差点―理論・方法・実装の越境と連結―』

立木茂雄先生退職記念論文集編集委員会（編）

『災害と福祉の交差点―理論・方法・実装の越境と連結―』は、立木茂雄先生の退職を記念し、先生のもとで学び、研究や実践をともにしてきた研究者らによる論文集である。しかし、本書は単なる記念論文集ではない。立木先生が一貫して追い求めてきた「現場と研究を往還する学問」の軌跡であり、その学問を受け継ぐ者たちから未来へのメッセージでもある。

立木先生の研究は、一つの学問分野に収まるものではなかった。災害、福祉、家族、地域コミュニティなど多様なテーマを往還しながら、人々の暮らしを社会との関係性の中で捉え、現場とともに新たな知を生み出してきた。何より特徴的なのは、現場を研究対象として観察するのではなく、現場の人々とともに考え、ともに実践し、その成果を再び社会へ返していく姿勢である。本書の副題である「理論・方法・実装の越境と連結」は、まさに立木先生の研究人生そのものを表している。

本書に収められた論考は、地域コミュニティ、防災、ソーシャルワーク、生活再建、参加型アクションリサーチなど多岐にわたる。しかし、それらは個別の研究を集めただけのものではない。いずれも「誰一人取り残さない社会を実現するために、研究は何ができるのか」という立木先生が問い続けてきた課題への応答となっている。

本書は、立木先生が築いてきた「越境し、人をつなぎ、社会を変える学問」を、次の世代へと受け継いでいくための一冊である。

論文集編集委員　松川杏寧



白桃書房
3,300円（税込）
刊行日 2025年10月26日

中小企業とアントレプレナーシップ
―危機や逆境を乗り越える企業家活動プロセス―

関（せき）智宏（ともひろ）（大学商学部教授）著

本書は、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の蔓延という未曾有の危機に直面した日本の中小企業（家）が、いかにその逆境を乗り越えてきたかを、経営学のなかでも近年とくにホットな領域となっているアントレプレナーシップ（entrepreneurship）の視点から解き明かそうとする一冊です。アントレプレナーシップは日本語では企（起）業家精神と紹介されることがありますが、本書ではアントレプレナーシップの研究展開を踏まえ、危機を乗り越えた企業家の「精神」だけでなく、危機を実際に乗り越えていく「行為」とそのプロセス（企業家活動プロセス）にこそ着目すべきだという立場をとっており、これが本書最大の特長となっています。さらに、本書は、オイル・ショックや阪神・淡路大震災、リーマン・ショックなど幾多の危機を乗り越えてきた日本の中小企業が、COVID-19という危機を乗り越えていくそのたくましさに光を当てつつ、これまで学術的な検討が手薄だったCOVID-19下の中小企業（家）の企業家活動プロセスを丁寧に描き出そうとしています。この書籍を執筆するに至ったのは、筆者が英国で、まさにCOVID-19下で在外研究をしているなかで、逆境下でも前向きに経営に向き合う日本の中小企業家の姿に感化されたことにあります。また日本独自の中小企業研究を、アントレプレナーシップの議論を介して、世界の議論へとつなげたいという願いも本書に込めています。読者には、危機や逆境にも屈しない中小企業経営の本質と、それを支える中小企業およびアントレプレナーシップ研究の意義を感じ取っていただければ幸いです。

著者より



文眞堂
4,400円(税込)
刊行日 2025年8月30日

中国鉄鋼業

銀迪(大学商学部助教)著

本書を執筆した最大の動機は，中国鉄鋼業をめぐる「国家主導」「過剰生産」「環境問題」といったステレオタイプへの違和感でした。世界最大の鉄鋼生産国となった中国では，粗鋼生産で世界トップ30に入る巨大企業が林立する一方，小型設備を営む零細企業も数千社が併存しています。この一見矛盾した姿こそが中国鉄鋼業の実像であり，一面的な見方では捉えきれません。その複雑さそのものを描き出したいという思いが，本書の出発点になりました。

本書は，岡本博公先生が提唱された事業所（生産システム），企業，産業の三層構造分析を継承し，これを中国鉄鋼業に即して展開するとともに，二軸三局面の視角から産業政策を分析しました。政府が一貫して集中化を求めてきたにもかかわらず，中国鉄鋼業ではなぜ集中化が実現しなかったのか。そこにどのような経済的な合理性が働いていたのか。統計や各種の資料をたどりながら，２０００年以降の実態に少しでも近づこうとした試みです。

日本と中国の鉄鋼業は，一世紀以上にわたり，進出・断絶・支援・競合という関係を重ねてきました。今日では，競争と協力の両面を持つ相手であると同時に，脱炭素という共通課題を抱える隣人でもあります。ステレオタイプにとらわれず，複雑で多様な実態の一端をお伝えできればと願っています。

著者より



晃洋書房
7,040円(税込)
刊行日 2025年11月20日

現代中国という問い

村田雄二郎(大学グローバル・スタディーズ研究科教授)著

授業や論文指導の場で、つねづね問いの設定が大事だと言ってきた。結論を得ることが目的なのではなく、資料やデータを前にしてあれこれ考えたり、既存の問題設定を変型したりすることが重要なのだ、と。そもそも世の中、クイズのような問題 - 正答の組み合わせで成り立ってはいない。

本書は中国研究者であるわたしが、そうした問いの実践を試みたささやかな成果である。具体的には、中国はなぜ民主化しないのか、皇帝専制のごとき政治はなぜ反復するのか、コロナは中国社会をどう変えたのか、祖国統一への強いこだわりは何に由来するのか、民族をめぐる認識ギャップの背景は何か、等々の問いが輻輳する。

とりわけ切実な問いとなったのが、中国政府の喧伝する「中国の夢」である。個人が夢を語ったり、未来を設計したりするのはいい。だが、権力者が上から夢を語るとき、そこに排除や抑圧の暴力はないか。ユートピアは美しい夢だが、人類の経験上、血なまぐさい戦争や闘争と裏腹の関係にあった。ユートピアの夢は容易にディストピアに反転し、気づかぬうちに、皆が喜んで屈従し管理される一元支配の社会となる。「きれいは汚い、汚いはきれい」（シェークスピア）の実例か。

本書の入口は「現代中国」である。内容もほぼ「中国」のことばかり。その意味で、地域研究の書ではあろう。とは言え、「中国」の窓は普遍的でもある。窓の外に広がる、かなり気の滅入る現代政治の風景は、民族や文化の違いを超えて、この惑星の住民が共通して直面する危機であり、同時にまた可能性でもある。そう思いつつ本書を書いた。

著者より



明石書店
4,180円(税込)
刊行日 2025年10月30日

ブラック・ウイメンズ・カルチャー
――音楽からみる人種と性の闘いの物語

臼井雅美（大学文学部教授）著

ブラックの女性たちは、自分たちの物語の表現者であり続けた。彼女たちの物語を探ることは、彼女たちが人種と性の闘いに挑む姿を追い続け、アフリカ、イギリス、アメリカ、西インド諸島を繋げて、女性たちのアフリカ系ディアスポラを巡ることである。本書では、ブラックミュージックの歴史的変遷を軸に、ブラックの女性たちが音楽、演劇、詩、小説、映画において残してきた軌跡を辿る。

ブラックの女性たちの歌や踊りは、アフリカ大陸をルーツとして、性の監獄である奴隷船と奴隷生産の連鎖のなかで育まれた。その後、黒人霊歌、黒人教会ゴスペルとオペラの融合、労働歌ブルースの世界で、マリアン・アンダーソン、マヘリア・ジャクソン、マ・レイニー、ベッシー・スミスたちは葛藤を繰り返した。彼女たちは、ウィンサム・ピノック、ハリエット・ジェイコブズ、ゾラ・ニールハーストン、アリス・ウォーカー、ジャッキー・ケイたちの詩や物語のなかで蘇った。ジャズの時代には、ビリー・ホリデイやニーナ・シモンたちが暴力への抵抗歌を歌い、ロレイン・ハンズベリーやトニ・モリスンが話を紡いだ。

西インド諸島から発信されたカーニヴァルとダンス音楽、メント、スカ、カリプソ、レゲエでは、ミス・ルーや女性ダブ詩人、ウーナ・マーソン、マヤ・アンジェロウたちが魂の解放を詠った。そして、ハイチクレオールのフォークロアと残虐な歴史から、エドウィージ・ダンティカが抹殺された人々の声を再現した。

R&B、ソウル、ロックンロール、ポップスのグローバル化が進むと、ルース・ブラウン、アレサ・フランクリン、ティナ・ターナー、ディオンヌ・ワーウィック、ホイットニー・ヒューストン、ビヨンセ、マライア・キャリーたちが巨大音楽産業界との闘いに挑んだ。彼女たちが奏でる世界観を、ブチ・エメチュタ、バーナーダイン・エヴァリスト、チママンダ・ンゴズィ・アディーシェ、そしてゼイディー・スミスたちが継承した。ヒップホップカルチャーに挑んだブラックの女性たちは、男性ラッパーの女性嫌に対峙して性の政治学を歌い、作家サフィニアはヒップホップフェミニズムとインターセクショナリティを構築した。

ボーダーを超えて活動をしてきたブラックの女性たちの物語をぜひ知っていただきたい。

著者より



慶應義塾大学出版会
2,640円(税込)
刊行日 2025年11月5日

天使の哲学
――中世哲学入門講義

石田隆太（大学文学部助教）著

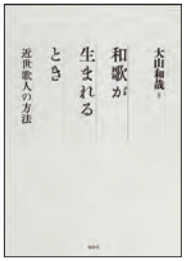
私が専門にしているのは、中世ヨーロッパの哲学です。現代日本から見れば、「中世」「ヨーロッパ」というのは二重の意味で縁がなさそうに聞こえるかもしれません。しかしながら、中世ヨーロッパに活躍した哲学者たち（その多くは大学の教師でした）の議論を覗いてみると、意外なことに現代的な感性を垣間見ることができます。本書で特に注目したのが、天使と呼ばれる不思議な存在者をめぐる哲学者たちの思索です。

中世ヨーロッパというだけでも異質であるのに、さらに「天使」が登場し、しかもそれが「哲学」として論じられるというのは、もしかしたら多くの人を遠ざけてしまうかもしれません。特に大学で私の授業を受けてくれる学生さんたちからは、真っ先に質問の声が上がるはずです（実際、例年よく上がっています）。

この疑問に対してただちに応答するなら、現代においてますますその存在感を示しつつある人工知能（AI）と同様の知能モデルが、実は西洋中世哲学では天使に関する議論のなかで登場しており、それが人間とは何かという哲学の究極的な問いとの関連で非常に重要なのです。たとえば『神学大全』を書いたことで知られる中世の哲学者・神学者トマス・アクィナスは、天使を人間よりも高度な情報処理能力を駆使できる知的な存在者として記述しています。

最終的に天使の哲学は、なぜ人間よりも賢いはずの天使が悪魔に堕落してしまうことがあるのかという問題を通じて、善であるはずの存在者が悪に染まってしまうのはなぜかという倫理学の重要な問題にもアプローチします。本書とともに、西洋中世哲学が日本でより知られることを願っています。

著者より



勉誠社
12,100円(税込)
刊行日 2025年10月25日

和歌が生まれるとき

大山(おおやま)和哉(かずや)(大学文学部准教授) 著

江戸時代（近世）の和歌、と聞いて具体的なイメージを持つことのできる人は少ないだろう。しかし、奈良時代から連綿と続く和歌は、江戸時代においては様々な地域や身分の人々に開かれて親しまれ、むしろ全盛であったと言って良い。

そんな江戸時代の和歌が古典文学の世界で等閑視されてしまっているのは、奈良・平安・鎌倉時代の和歌に比べ、江戸時代の和歌は概括して「つまらない」と、主に近現代の研究者たちに揶揄されてきたからである。しかし、たとえば現代の私たちが短歌や俳句を詠んだ時に、それを「松尾芭蕉の俳句と比べると、つまらないね」などと他人から言われて納得できるだろうか。

私たちは、私たちの個々の動機や楽しみによって文芸作品を作る。だから、「人文科学」として文芸作品を分析し、人間一般と文芸行為との間の実相を明らかにするならば、各作者の、文芸に向かう固有の衝動について語らなければならないだろう。

本書では主に江戸時代前期に活動した歌人を取り上げた。対象は天皇、中宮、皇女、武士、国学者、儒学者など多岐に及ぶ。彼らがどのような目的から和歌という文芸ジャンルを選び、またそこにいかなる文学的趣向を織り込んで一首一首を作り上げていったのかを、具体的な和歌の分析を通して明らかにした。人間と和歌、さらには人間と文芸とのかかわりについて考える上で、本書が多少なりとも役に立つことを願う。

著者より



文眞堂
1,430円(税込)
刊行日 2026年1月7日

職場・学校のセクハラ・パワハラ
ハラスメントの法と判例

吉川(よしかわ)英一郎(えいいちろう)(大学商学部教授) 著

3時間の講習で、「職場・学校のセクハラ・パワハラ」問題をざっと理解できるか、本書はそういうリクエストに応えようとするものです。現実の判決からピックアップした具体例をいくつも紹介しています。それによってハラスメント問題の法的性質（刑事事件として起訴はされにくいが民事裁判は十分可能）を捉えながら、わかりやすく、かつ緊迫感も感じられるような内容にしたつもりです。きっかけとなったのは令和6年に担当した本学教職課程の「人権教育論」という科目でした。オムニバス形式の授業の中でわずか2回の90分授業を通じ、「職場・学校のセクハラ・パワハラ問題」の全体像を、具体的に受講生へ伝えようと試みました。本書はその講義録を元にしています。

企業出身である筆者の主要研究テーマは、「国際取引法」、特に「国際契約法務」ですけれども、研究者としてのスタートは、予防法務としての「職場におけるセクシュアル・ハラスメント問題」への対応からでした。中央労働委員会地方調整委員を兼職したこともあって、契約法務とともにハラスメント判例の研究も並行して行なってきました。本書は言わば副業の産物です。

本書は、コンパクトであるという点（長湯の人なら湯船で読了できそうな位の薄さ）に意味があります。しかし、ハラスメント問題が民事訴訟に発展することを想定しつつ、実務的に重要な点を押さえたつもりです。ハラスメント問題理解のお役に立てば幸いです。

著者より



明石書店
3,520円(税込)
刊行日 2025年9月10日

「日本式介護」の中国進出
――高齢者ケアの現地化プロセス

郭芳（大学社会学部准教授）著

日本は世界に先駆けて超高齢社会を迎え、そのなかで培われてきた介護の理念や実践は、今後高齢化が進むアジア諸国にとって重要な示唆を与える可能性を秘めています。本書は、日本の介護サービスが中国へ進出する過程で、どのように受け入れられ、現地の制度や文化、生活習慣に適応しながら展開されてきたのかを明らかにしたものです。

分析にあたっては、中国に進出した日本の介護事業者への事例調査に加え、日本人責任者や中国人職員へのインタビューを通して、「自立支援」「相手本位」「尊厳の尊重」といった日本式介護の理念が、異なる文化や制度のなかでどのように理解され、実践されているのかを分析しました。その結果、日本式介護は単なるサービスの輸出ではなく、現地社会との相互作用を通じて新たな形へと発展する「現地化」のプロセスであることを示しています。

執筆を通して特に伝えたかったのは、「介護は文化を超えて共有できるのか」という問いです。介護の国際化が進み、外国人介護人材の受け入れが拡大する今日、日本の介護理念をいかに異文化の中で伝え、共に育んでいくかは、日本社会にとっても重要な課題となっています。

福祉・介護分野の研究者や実践者だけでなく、高齢社会、国際協力、多文化共生に関心を持つ方々にも手に取っていただき、日本の介護が世界で果たし得る役割について考える契機となれば幸いです。

著者より



名古屋大学出版会
5,940円(税込)
刊行日 2025年11月15日

リトルトーキョーは語る
凝集・越境・包摂の日系アメリカ史

南川文里（大学グローバル・スタディーズ研究科教授）著

ロスアンジェルスのリトルトーキョーは、アメリカ最大の日系エスニック・コミュニティとして知られている。20世紀初頭に姿を現したリトルトーキョーは、1940年ごろに最盛期を迎えたが、第二次世界大戦中の戦時強制収容によって解体されてしまう。しかし、戦後に日系人らによって再建され、その後も都市再開発などの危機を乗り越えてきた。その長い歴史のなか、日系というエスニシティのもとに人々が結びつく一方で、各時代の日本と国境を越えたつながりを更新し続け、地域に住む多くの非日系の人々とも関係を深めてきた。本書は、リトルトーキョーという場所の変貌を、凝集・越境・包摂という3つの過程の重なりとして描いたものである。

とくに、本書では、コミュニティの周縁へと位置づけられた人びと――初期の「トラブルメーカー」たち、移民女性、二重国籍者、戦争花嫁と「混血孤児」、戦後の農業労働者、黒人、中国系、コリア系、ラティーノなど――の関わりに着目することで、リトルトーキョーを舞台とした日系アメリカ人の「成功物語」を問いなおしている。エスニック・コミュニティの可能性は、民族の均質性や同質性ではなく、つねに域外の人々と関わりながら、他者へと場を開いていこうとする越境性や包摂性にこそ見出されるべきなのである。

著者より



吉川弘文館
5,500円（税込）
刊行日 2026年2月1日

近代の政治家と京都の別荘庭園
琵琶湖疏水がむすぶ水脈と人脈

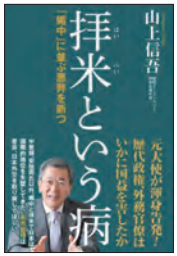
佐野静代（大学文学部文化史学科教授）著

京都の南禅寺周辺には、明治・大正期に大富豪たちの作った別荘群が今日も数多く残されています。これら非公開の巨大別荘群のうち、山県有朋の別邸であった無隣庵だけは以前から一般公開され、琵琶湖疏水から引水する七代目小川治兵衛作の名庭をご覧になった方も多いと思います。

これらの別荘と庭園群については多くの本が出ていますが、本書が異なるのは住友家や岩崎家のような大富豪の別荘ではなく、山県以外にもかつては多く存在していた政治家たちの別荘に焦点を当てたことです。財閥・実業家たちの別荘がその財力によって長年保たれてきたのとは異なり、政治家たちの別邸には早期に消滅してしまったものも多く、その実態はほとんど知られていません。例えば無隣庵の近隣には、その名とは裏腹に、山県の友人たちの別荘が建ち並んでいた様相を復原することができます。彼らはまた「山県閥」として、その政策を支えた政治家たちでもありました。

本書ではこのように、現在では失われてしまった政治家の京都別邸の景観から、近代のポリティクスを読み解く試みでもあります。またこれらの別邸群は日中関係史の舞台ともなっており、そこには清朝のラストエンペラーであった溥儀も登場します。満洲国皇帝となった溥儀が散策した疏水の庭園とはどこか、本書で確かめてぜひご来訪下さい。

著者より



ワック
1,980円（税込）
刊行日 2025年12月15日

拝米という病

山上信吾（大学法学部特別客員教授）著

「拝米という病」は、老若男女に向けた日米関係の解説・指南本である。

同盟国アメリカには色々な顔がある。

慈父のような顔がその一つだ。かつて一念発起し太平洋をわたった新島襄こそ、ニューイングランドの地でそんな米国に接した最初の日本人だった。

戦後の日本に見せた表の顔も同じ。寛大な経済・食糧支援、そしてフルブライト留学など、日本を庇護の下に置き、純真な日本人は感謝した。

同時に、米国戦史上最も手強かった敵国日本の復活を抑え込む計算高い覇権国家の顔も忘れてはなるまい。憲法を押し付け、「戦犯意識教育プログラム」（ウォーギルト・インフォメーション・プログラム）を苛烈な検閲を動員しつつ主導し、安保条約で日本の軍事大国化を阻止してきた面だ。背景に、人種差別意識が厳然と存在してきたことは言うまでもない。

こうした二面性を集約した言が、「アメリカはずるいよ」という外務省大先輩の吐露だった。そんな米国がトランプ政権になって、日本の防衛力、情報力の伸長を願ってやまない。敗戦の軛から解放される格好の機会だ。しかしながら、占領軍が敷いた「反戦平和護憲」の掌の上で長らく踊らされてきた戦後インテリは、この変化を掴み切ることなく、トランプの予測不可能性を嘆きクダを巻き続けている。

今や覚醒の時だ。

10年前であれば出版さえ憚られたであろうこの本は、政財官界での大谷翔平を生み出すべく発想の転換を迫る問題提起の本でもある。

著者より



文眞堂
3,850円（税込）
刊行日 2025年12月26日

ソーシャルマーケティング
―行動変容で社会的価値を共創する―

瓜生原（うりゅうはら） 葉子（ようこ）
（大学商学部教授 ソーシャルマーケティング研究センターセンター長）著

なぜ、正しい情報を伝えても人は動かないのでしょうか。どうすれば、一人ひとりの行動を、社会課題の解決へと結びつけることができるのか。本書『ソーシャルマーケティング』は、この根源的な問いに、理論と実践の両面から応える一冊です。日本初の、国際機関の推奨基準に準拠した体系書として、基礎から応用までを包括的に整理しました。

ソーシャルマーケティングは、単なる啓発活動ではありません。人々がなぜ行動に至らないのか、どのような価値があれば自発的に一歩を踏み出せるのかを丁寧に捉え、個人にとっても社会にとっても意味のある行動を設計する学問であり実践です。本書では、基本概念、倫理、戦略設計、施策策定プロセス、評価までを体系的に解説し、行動変容を確かなものにする23の行動科学理論を、実践に活かせる形で紹介しています。

読みどころの一つは、私が学生たち、さらには行政や企業と長年取り組んできた多様な実践事例を豊富に収めている点です。臓器提供意思表示、医療のエコ活動、防災、生物多様性など、教室での学びが社会の現場へとつながり、若い世代の感性と創造力が新たな社会的価値を生み出す過程を描いています。これらの活動は、ソーシャルマーケティングが机上の理論にとどまらず、社会を動かす力をもつことを示しています。

社会は「誰か」が変えるものではなく、私たち一人ひとりの納得ある行動の積み重ねによって変わります。すべての人にとって、本書が、より良い社会を共に創るための信頼できる道標となれば幸いです。

著者より



明石書店
7,480円（税込）
刊行日 2026年2月28日

自立生活センターによる重度障害者の自立生活移行

鈴木（すずき） 良（りょう）（大学社会学部教授）著

コロナ禍では、病院や入所施設で暮らす障害者が深刻な影響を受け、その生活や権利のあり方が改めて問われました。この経験を踏まえ、国連は、緊急時においても地域で生活する権利を保障し、脱施設化を推進することの重要性をガイドラインにおいて示しました。

本書は、国立病院機構・筋ジストロフィー病棟（以下、筋ジス病棟）で長期入院してきた当事者のコロナ禍における生活経験と、自立生活センターによる自立生活への移行支援の実践を、インタビュー調査を通して明らかにしています。

本書では、京都府と大分県の自立生活センターにおける先駆的な実践を対象とした質的調査を通して、次の4つのテーマについて分析しています。すなわち、1）筋ジス病棟への入院に至る経緯と、それを家族・当事者がどのように受け止めてきたのか、2）筋ジス病棟での生活経験、3）コロナ禍を含めた自立生活センターによる自立生活移行支援の実践と、それに対する当事者の評価、4）病院生活と退院後の自立生活を当事者はいかに捉えているのかということです。これらの分析を通して、筋ジス病棟の生活研究および障害者の地域移行研究に新たな知見を提示しています。

本書はこのように、様々な社会的障壁の中で、地域での自立生活を目指す当事者と、それを支援する自立生活センターの当事者スタッフによる、自由で人間らしい生活の実現を目指した歩みを実証的に明らかにしたものです。コロナ禍のような緊急時を含め、日本において、施設や病院ではなく地域で自立生活する権利をいかに保障していくべきかを考える上で、多くの示唆を与える一冊です。

著者より



新曜社
2,530円（税込）
刊行日 2026年3月17日

子どもはどのように音を聞いているか

嶋田容子（大学リサーチ・イノベーション推進機構）著

本書は、子どもの聴覚特性と、音環境が発達に及ぼす影響を踏まえ、保育・教育の場における「音環境」の扱いを問い直すものである。

本書の前半では、これまでの関連研究の知見を整理し紹介する。子どもは、雑音のある環境下で音声を聴き取ることを成人より苦手とする。雑音の多い環境が、言語、認知、記憶、学習、対人コミュニケーションなど、発達の多様な側面に負の影響を及ぼしうることは、国内外の多くの研究によって示されてきた。しかし、これらの知見は実践現場に十分には共有されていない。また、子どもの生活環境に関する公的指針や評価尺度においても、音環境が明確な検討項目として位置づけられた例は少ない。音が過度に響く環境で多くの子どもが長時間を過ごしている現状は、子どもの育ちに見えない影響を及ぼしているかもしれない。

そこで筆者は、保育園・認定こども園と協働して介入研究をおこない、音環境と子どもの自己制御、会話のスキルとの関連を検証すると同時に、各園の実状に合わせた環境改善の試みを併せておこなってきた。本書の後半では、それら実践活動の事例を示し、具体的な対策についても提示した。研究者の立場から実践現場へ知見を周知しつつ、子どもの環境への実装を推進することが、本書の目的である。子どもに関わる研究者として、子どもの発達や環境について得られた知見を正しく社会へ伝え、必要に応じて知見の社会的実装に関与することも責任の一つであると著者は考えている。本書は、研究と実践の融合を通して、その責任の一端を果たそうとする試みである。

著者より



ミネルヴァ書房
2,640円（税込）
刊行日 2026年3月

こどもを支える地域づくり入門
―日本・アメリカの「つながり」の実践から

新谷龍太朗（女子大学現代社会学部現代こども学科准教授）著

「制度はあっても、支援が必要な人に届くとは限らない」――本書はこの問いから出発しています。2023年にこども家庭庁が発足し、「こどもまんなか社会」が掲げられる一方、現場には子育て家庭の孤立や貧困、格差といった課題が残されています。私自身、米国での調査や地域のこども食堂ネットワークづくりに関わるなかで実感してきたのは、制度と家庭のあいだをつなぐ「人のつながり」が持つ力でした。本書では、この「つながり」を鍵として、日本とアメリカの子育て支援の実践を比較しながら考えました。

本書では、私が出会った様々な人に登場いただいております。日本については、地域から自発的に広がった「こども食堂」を取り上げ、運営者への調査から、食事の提供にとどまらない居場所づくりの様子を紹介しています。アメリカについては、人種間格差の解消を目指して半世紀にわたり展開されてきた「ヘッドスタート」や、看護師が家庭を訪問するアウトリーチの仕組みを紹介し、「来られない人」にどう支援を届けるかという、日本にも通じる課題を検討しています。

執筆にあたっては、初めて学ぶ方にも読みやすいよう、各章に問いかけを設け、現場の声を多く盛り込みました。子育て支援は専門家だけのものではなく、地域に生きる一人ひとりが担い手になり得ます。本書を手に取った方が、身近な地域の実践に目を向け、「自分にできるつながりづくり」を考えるきっかけとなれば、これほど嬉しいことはありません。

著者より

同志社クローズ・アップ

同志社創立150周年記念事業を総括するための座談会

法人部

法人事務部　創立150周年記念事業事務室

同志社創立150周年記念事業（以下、記念事業）は2021年から始まり、来年3月末で終了します。今回の記念事業の特徴の一つが、教職員の自主的な取り組みにより運営される「同志社未来創造プロジェクト（以下、プロジェクト）」であり、従来のトップダウンで事業内容を決め、遂行していく形態とは異なり、在校生、卒業生、教職員等、ステークホルダーから寄せられた様々な意見やアイディアを具体化させることで取り組んできました。



このたびプロジェクトメンバーと本事業に協力をいただいた学生による振り返りの座談会を行いました。

コーディネーター：横井和彦氏（大学経済学部教授、プロジェクトリーダー）

パネリスト（6名）：

・木谷佳楠氏（大学神学部准教授、プロジェクトメンバー）
・吉田悦章氏（大学大学院ビジネス研究科教授、プロジェクトメンバー）
・池上　作氏（香里中学校・高等学校事務長、プロジェクトメンバー）
・長瀬拓也氏（小学校教諭、プロジェクトメンバー）
・福本雄大氏（広告研究会add's第25代会長、大学経済学部2025年卒業）
・田谷駿治氏（テレビCMコンテスト最優秀賞受賞、アニメ検討部会委員、大学商学部4年次生）

横井　記念事業の目的である建学の精神の浸透について、卒業生や在校生、教職員にどれだけ影響を及ぼしたと思いますか。

吉田　プロジェクトの過程では、メンバー自身もワークショップなどを通じて同志社について多くを学びました。新島研究者の本井先生による革新的なご高話やメンバー間での多面的な議論により、各メンバーの建学の精神等に関する知識や意識は、相当高まりました。そこで、メンバー間でも同志社をもっとよくしようというベクトルが一致したものと思います。その内容の一部は、同志社創立150周年記念式（以下、記念式）で配布されたビジョンブック「The Next Doshisha――より良い未来を、共に創る」にも反映されています。


ワークショップ

池上　プロジェクトは、これまで同志社にはなかった文化であり、それ自体が一つ進展だったと思います。複数年にわたって行ってきたことによって、いろんな取り組みの効果があり、一定程度広まったように思っています。中高や小学校は授業の中に礼拝が入っていたり頻繁に新島襄や建学の精神を学ぶ機会がある一方、大学では礼拝に参加する学生は一部ですが、卒業生も含めてDoshisha New Day（毎年11月29日に開催）の講演や新島アニメ『二百年の夢を見た。』（以下、アニメ）や同志社オリジナル賛美歌等を通して建学の精神について考えるきっかけを作ることができたと思っています。

長瀬　私の学年では、新島先生のアニメを終業式の日に見せました。児童は既に3，4回見ていると思いますが、初めて見たような顔で見ているんですよね。アニメは大人が思っている以上に子どもたちの心に訴えかけるものがあるようです。例えば明治時代といっても、6年生以外の小学生はまだわからない。今から150年前っていうのが子どもたちには十分に認識するのが難しい。それを言葉で説明するのにどれだけ大変かと考えると、子どもたちは映像を見ることでイメージができます。

横井　学校を超えた繋がりや教職員、学生、生徒、卒業生との連携についてはいかがでしょうか。

木谷　記念式の第2部で、八田総長・理事長がキリスト教主義を軸にした一貫教育が今後ますます重要であると述べ

られました。総長がおっしゃったことを形にしたいと思い、今年の夏にはキリスト教主義学校で学ぶ大学生と高校生を対象とした高大接続キャンプを実施しました。同志社の幼稚園から小中高までは、毎日の礼拝等でキリスト教に触れる機会があります。大学ではそのような機会は限られていますので、キリスト教に慣れ親しんでいる高校生と共に学ぶことは、大学生にとっても良い刺激になりました。今後もこの取り組みを続けていき、同志社内で学校間の繋がりを深めたいと思っています。加えて、全国のキリスト教主義学校との連携も進めていきたいです。

横井　他の機関との連携強化に繋がっている点も、質的な効果を見出すことができるように思います。安中市や会津若松市等ゆかりの地の自治体や地元の同志社校友会の皆様、同志社同窓会、同志社関連合唱団体や大学茶道部、同志社紫謡会等との連携事業もありました。

また、アニメ制作費や、「新島襄の足跡を辿るアメリカツアー」では同志社内4中高の生徒8名の招待費用の約半分を寄付金や協賛金としていただきました。記念事業が呼び水となり、キリスト教の美徳である寄付によって本事業を実現することができたと思います。

横井　学生の立場で記念事業に協力をいただきましたが、感想や気づいた点があればおっしゃってください。

福本　当時、広告研究会の学生として記念事業に関わり、ペットボトル水『最襄級』のパッケージを刷新しました。学生のうちに何か新しいことに挑戦したいと思い、発売元や同志社エンタープライズに自ら企画を持ち込みました。実現までには大変なこともありましたが、記念事業という機会があったからこそ、多くの方を巻き込みながら形にすることができました。振り返ってみると、学生の挑戦を受け止め、それを実現へとつなげていく土壌そのものが、同志社らしさの一つなのではないかと感じています。そして、こうした取り組みを通じて、「同志社らしさとは何か」「良心とは何か」を改めて問い直す機会にもなりました。150周年を一つの節目として、これからも学生一人ひとりの「やってみたい」が受け止められ、新しい挑戦が生まれ続ける同志社であってほしいと思います。



小原克博大学長への『最襄級』の報告

田谷　1年生の時に、テレビCMの制作を私たちのチームに任せていただき、実際にそのCMがKBS京都で放映された他、プロジェクトの皆さんと一緒にワークショップに参加させていただく等、大変貴重な機会をたくさんいただきました。また、この経験から、150周年を一つの区切りで終わらせるのではなく、その先を考える必要があるとも感じました。これからの同志社を形作っていくのは、今ここにいる私たちだけではありません。これから入学される学生や今はまだ幼い子どもたちも、未来の同志社を形作っていく担い手です。だからこそ、今後社会や世界に誇れる同志社を形作っていけるよう、次の世代に何を残し、何を伝えるのかを、私たち自身が考えていく必要があると思います。私もまだ学生の身なので、これからその役割を果たしていけるような社会人になっていければと思っています。



テレビCMコンテスト最優秀賞作品

横井　これまで良かった点や成果についてお話をいただきましたが、もちろん課題もあるかと思いますが、その点はいかがでしょうか。

木谷　反省点としては、同志社の未来を担う若い世代の人たちをもっと巻き込んで記念事業を実施できればよかったかなと思います。同志社の園児から中高生、大学生まで参加できるようなイベントを行おうとすると、各学校がそれぞれの年間スケジュールを立てて動いているため、なかなか実現が難しいということがわかりました。

吉田　情報通信技術をもう少し効果的に活用したかったです。例えば記念事業の一環として新島による同志社設立の経緯を描いたアニメも制作しましたが、これはYouTubeというプラットフォームに載せたことで多くの目に触れました。それ以外にもソーシャルメディアも大いに活用することで、学生やその他ステークホルダーへ各種イベントをより効果的に広報することができればよかったと思います。また、記念事業では同志社と早稲田、慶應の総長・塾長のパネルディスカッションがありましたが、今後AI等が一層高度化する175周年、200周年などの節目では、新島襄、大隈重信、福沢諭吉のAIアバターに鼎談をしてもらうことも可能でしょう。それぞれが残した多くの言葉などをインプットすれば、3人の議論を現代に再現することができます。このように、その時点での情報通信技術を十



分に活用して、周年事業をより意義深いものとすることを後世に期待したいです。

木谷　吉田先生がコメントされたように、昨年5月に朝日教育会議「同志社・慶應・早稲田が考える教育の未来」を記念事業の一環で実施しました。早稲田と慶應はトップの私立大学で、同志社は両校から学ぶところも多いです。しかし、この朝日教育会議で開会祈祷を捧げた際に、同志社にはキリスト教主義という他とは異なる特色があり、それが強みでもあると改めて感じました。新島襄が宣教師であったことも忘れてはならないと思います。キリスト教主義をどのように継承するのかは、今後の課題の一つだと認識しています。

長瀬　記念事業の一環として、新島先生の眠る同志社墓地に上る山道を整備しました。大変すばらしい階段を作ってもらい、そのおかげで小さな子どもでも安全に歩けるようになりました。いろいろなことを想定しながら、安全かつ丁寧にイベントをやっていくことが大切です。また、今後は、学校間交流がすごく大事ではないかと思っています。その意味で、幼稚園から大学まである同志社の教職員が、こうやってお会いして話し合えたということは、すごく良い機会だったと思っています。これで終わらずに、幼稚園、小学校、中学校、高校、大学の縦の繋がりを大事にしていきたい。同時に本校の場合、これまで私学間の交流があまりありませんでしたが、横の繋がりとして、キリスト教学校教育同盟も含めて、学校間の交流を継続的に丁寧に続けていくことが、次への展望に繋がっていくと感じています。

横井　このプロジェクトメンバーは自主的に集まってくださった教職員ばかりで、おそらくこれまでになかったことかなと思います。6年にわたって活動を進めてきたわけですが、このプロジェクトメンバーを一つの端緒として、各学校が繋がっていけるのではないかなと思っています。同志社の絆を一段と強め、創立200周年という大きな節目に向かって、ともに歩みを進めていければと願っています。

＊同志社創立150周年記念の事業内容については、以下の二次元コードからご覧いただけます。
https://150th.doshisha.ed.jp/

同志社クローズ・アップ

公開シンポジウム「リベラリズムとポストリベラリズムの対話」開催

大学

国際課



2026年6月5日、今出川校地寒梅館ハーディーホールにおいて公開シンポジウム「リベラリズムとポストリベラリズムの対話」を開催した。本シンポジウムは、国際交流基金との共催により、政治思想家パトリック・J・デニーン氏（ノートルダム大学教授）を迎え、現代の自由主義秩序の課題と今後の政治共同体のあり方を多角的に検討することを目的として実施された。来場者は200名を超え、本テーマへの高い関心が示された。

冒頭、13時よりデニーン氏による基調講演が行われ、約30分にわたり、リベラリズムが抱える構造的問題と、それに対するポストリベラルの思想的可能性について論じられた。とりわけ、個人の自由の過度な強調が共同体の衰退を招いたという視点から、現代社会における価値の再編の必要性が提示された。

続くパネルディスカッションでは、三牧聖子教授（グローバル・スタディーズ研究科）、吉田徹教授（政策学部）が登壇し、飯田健教授（法学部）のコーディネートのもと、欧米における政治的分断、日本社会における制度的課題、さらにはポストリベラル的潮流の異議や今後の展望について議論が展開された。議論では、自由と共同体のバランスをいかに再構築するかという論点が共有され、多角的な視

点から活発な意見交換が行われた。

質疑応答では来場者から寄せられた多くの質問から、「制約ある自由を育む教育」、「日本社会における共通善」、「JDバンス氏によるトランプ路線の継承」といった論点について取り上げ、デニーン氏が専門的見地から応答した。

本シンポジウムは、リベラリズムをめぐる批判的検討とともに、その先にある政治的・社会的秩序のあり方を展望する契機を提示するものであり、今後の学術的議論および政策的検討に資する重要な機会となった。



同志社クローズ・アップ

『食品開発プロジェクト』の取り組みについて

女子大学

生活科学食物栄養科学科教授 杉浦（すぎうら） 実（みのる）

大学での学びを社会へつなぐ。企業とともに挑む実践型教育プログラム『食品開発プロジェクト』

本学食物栄養科学科食物科学専攻では、大学で学ぶ専門知識を社会の現場で活かす力を育む実践型教育として、「食品開発プロジェクト」を開講しています。本プロジェクトは、2019年度のカリキュラム改正により新たに設置された課題解決型学習（PBL：Project Based Learning）科目であり、新カリキュラムの学生が3年次となった2021年度から本格的にスタートしました。京都府および京都市との包括連携協定のもと、京都を中心とした食品関連企業と協働しながら、学生たちが実社会の課題解決に挑戦しています。

■「食品を商品として考える」実践の学び

食物科学専攻では、食品化学、調理科学、食品流通学、栄養学など、「食」に関する専門知識を体系的に学びます。しかし、実際の食品業界では、おいしさや栄養価だけで商品が売れるわけではありません。消費者は何を求めているのか。どのような価格設定が適切なのか。どのように魅力を伝えれば手に取ってもらえるのか。食品開発プロジェクトでは、こうした実社会の視点を学びながら、食品を「商品」として捉え、生産・加工・流通・販売促進までを総合的に考えます。



株式会社京菓食品とのテーマ
「ホテルの朝食ビュッフェ用完調品の開発」

学生たちは企業から提示されたテーマに対し、市場調査やターゲット分析を行い、課題を明らかにします。その後、商品コンセプトの立案、試作品開発、原価計算、販促企画、実証実験などを経て、成果発表会で提案を行います。

授業は「食品開発プロジェクトⅠ」「食品開発プロジェクトⅡ」の2科目で構成されており、1年間にわたり同じチームで活動します。学生たちは企業担当者との打ち合わせを重ねながら、自ら考え、議論し、行動し、課題解決に向けて取り組みます。これは従来の講義型授業では得ることのできない学びです。

■学生主体だからこそ生まれる成長

本プロジェクトでは、教員が答えを与えることはありません。何が課題なのか。なぜその商品が売れないのか。どのような価値を提案すれば消費者に響くのか。学生たちは企業担当者との対話を通じて課題を発見し、チームで議論を重ねながら解決策を模索します。時には意見がぶつかることもあります。しかし、その試行錯誤こそが社会で求められる力を育てます。

市場調査の結果が予想と異なることもあります。試作品が期待した評価を得られないこともあります。それでも改善策を考え、何度も挑戦を繰り返すことで、学生たちは課題解決力や実践的なマーケティング思考を身につけていきます。

■実社会とつながる商品開発

これまでのプロジェクトでは、さまざまな商品開発や販売促進活動に取り組んできました。京都産農産物とナッツを活用したドレッシングの開発、米麹ピューレを活用した和菓子の提案、冷凍野菜を使用したホテル朝食向け完全調理品の開発など、テーマは多岐にわたります。なかには実際に商品化され、ホテルや店舗で販売・提供された事例もあります。学生は商品開発だけでなく、POP制作や販売促進イベント、アンケート調査などにも携わり、自分たちのアイデアが消費者に届く過程を体験しています。

また、既存商品の新たな活用方法を提案して販売促進に繋げる取り組みや、地域資源を活用した商品開発による町興しの活動など、地域社会とのつながりを意識した取り組みも行われています。



亀屋良長株式会社との取り組み
「米麹ピューレを使用した健康志向の和菓子の開発」

学生たちは食を通して地域の魅力を発信し、新たな価値創造に挑戦しています。

■学生の声

履修した学生からは、「商品開発とはレシピを考えることだと思っていましたが、市場調査や価格設定、販売方法まで含めて考える必要があることを知り、食品ビジネスの奥深さを実感しました」、「何度も試行錯誤を繰り返しましたが、チームで課題を乗り越えた経験が大きな成長につながりました」といった声が寄せられています。

企業との打ち合わせや商品開発を通して、食品業界で働く自分自身の姿を具体的にイメージできるようになったという学生も多く、キャリア形成にもつながる貴重な学びの機会となっています。

■企業とともに生み出す新たな価値

食品開発プロジェクトは、学生だけでなく、ご協力いただいている企業にとっても多くの価値を生み出しています。学生ならではの柔軟な発想や若年女性のリアルな感覚を商品開発やマーケティングに取り入れることができ、「自社だけでは思いつかない新しい視点が得られる」といった評価も寄せられています。また、将来の主要な消費者層となる若年世代のニーズや価値観を直接知る機会にもなります。市場調査や試作品評価を通して、企業の商品開発やブランド戦略に新たなヒントをもたらしています。さらに、地域社会への貢献や次世代人材育成への参画という側面もあります。学生との協働を通して、企業の社会的価値向上やSDGsへの取り組みにもつながっています。

■未来の食を担う人材を育てる

食品開発プロジェクトは、単なる商品開発の授業ではありません。専門知識を社会で活かし、課題を発見し、人と協働しながら解決へ導く力を育む教育プログラムです。大学、企業、地域社会、そして学生。それぞれが持つ知識や経験、発想が交わることで、新しい商品やサービスが生まれ、新たな価値が創造されています。食の未来を切り拓くのは、専門知識と実践力を兼ね備えた人材です。本専攻ではこれからも、産学連携による実践教育を通して、食の未来を担う人材の育成と地域社会への貢献に取り組んでまいります。



同志社クローズ・アップ

感性OSとしての放課後 ・学びプロジェクト13年・

中学校・高等学校

教頭・技術科教諭
沼田（ぬまた） 和也（かずや）

一昔前とは違って、放課後はカラフルで多様になっています。その中の一つである「学びプロジェクト」（以下、「学プロ」）について紹介させていただきます。本校では十数年前から、教員の「教えたい」と生徒の「学びたい」が交差する学びの空間をデザインしました。初年度はわずか18の企画から始まりました。それが今では年間300を超え（一時期400を超える時もありました）、多くの学校に模倣されるまでになり、私たちよりももっと発展した多様な放課後をつくっておられるところもあります。

正課外であること

一番目の特徴は正課外であることだと思います。成績も評価も一切つかず、参加は自由ですので、まさに「興味あるから」とか純粋に「学びたいから」という有志が集まります。教員や親から褒められるからという動機はなく、他の教育活動との根本的な違いではないか思っています。

教員の「教えたい」が出発点

企画はすべて手作りで、既製のプログラムやサービスを買ってくるのではなく、教員一人ひとりが自分の教科をベースに企画したり、人脈を生かして第一線で活躍している大人と生徒をつなげるのです。授業開発と言う視点からすれば、授業では扱いにくいテーマ、教科書からはみ出した内容を試せる場でもあります。トランジスタの増幅回路製作から豚の腸の解剖まで、企画はとがっていて興味を引くものが多いです。体験



や経験をへて思わずつぶやく生徒の「すごい！」という言葉には、ものすごく大事な何かが詰まっていると思います。

内容の多様性（6つの分類）

今までの企画を大まかに六つに分類できると思っています。A：教員が教えたいことを提供するもの。B：第一線の研究者や建築家と出会わせるもの。C：国境を越えて討論するもの。D：「中国語講座はないのですか」という生徒のリクエストに応えるもの。E：生徒が講師になって生徒に教えるもの。そして、F：小さな最寄り駅の再生やすぐき漬けの復活といった地域課題に踏み込むものなどです。教員発の一色から始まった放課後が、気づけば6種類になっています。





第一線の大人と直接つながる

学校で中学生が出会える大人は、普通は教職員に限られます。学プロでは、研究者、建築家、エンジニア、企業の開発者が、生徒を対等な相手として扱っていただきます。楽天とのアプリ開発では、中学生が開発パートナーとして扱われました。このフラットな関係が、生徒の自己肯定感を静かに引き上げていると感じます。

気づきｎｏｔｅ

「気づきｎｏｔｅ」という独自のシステムがあり、参加した企画の気づきを、書いても書かなくてもよいのですが、Ａ４一枚を超える文章を寄せてくる生徒がときどきいます。成績とは関係ないのにです。積み重なった気づきｎｏｔｅの蓄積は、その生徒が何者で、どこへ向かおうとしているのかを映す履歴に



なっていると思います。学期末、生徒達に書き溜めた気づきｎｏｔｅを印刷して返却していますが、その時には「おー、こんなこと書いてたんや！」など当時の自分の気づきから、今の自分とのつながりを感じている場面は多いです。

教員自身の小さな実現実感

企画の立案から実行までは、小さなプロジェクトマネージメントの経験に他なりません。参加者が2、3名のマニアックな企画もありますが、自分でハンドルできる企画は楽しいです。この小さな実現実感は、大きな教育プロジェクトを運営するための大切な土台になると思っています。

学ぶと教えるの連鎖

当初は教えられる側だった生徒が、企画をリクエストし、やがて自ら主催するようになります。卒業後も「講師をやらせてください」と戻ってきます。量的な拡大が、いつの間にか生徒を被教育者から学び空間創造の主体へと変えているのではないかと思うのです。

私たちはこの枠組みを「感性ＯＳ」と呼んでいます。教科学習や国際交流や行事がスマホでいうアプリだとすれば、その土台で動く基本ＯＳソフトだと思うのです。「知りたい」「面白い」と感じて自分から動き出す学びの基盤にあたる経験や、主観的経験を土台にした感性のような良質なＯＳを築いてこそ、上等なアプリも動くのだと思っています。



「教育とは・・」と言い切る自信はありませんが、「学びたいから」「教えたいから」という理由で人が集まることのできる空間を学校の中に確保しておくことは、欠かすことのできない要素だと思います。この取り組みは本年、京都私学振興会賞をいただきました。教職員一人ひとりの積み重ねが評価されたものと受け止めています。

同志社クローズ・アップ

「弦楽オーケストラ研究会」の3年間

香里中学校・高等学校

音楽科教諭 水上（みずかみ） 陽一（よういち）

弦楽器の導入

２０１９年、新型コロナにより授業でのリコーダー等の管楽器使用が不可能となりました。そこでヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバスの弦楽器を少しずつ購入し始めました。しかし楽器が高価なため数を揃え授業で使用出来るのはまだ先の話です。また、弦楽器は弾かないと楽器が傷みます。そこで生徒たちに週１回弾いて貰おうと考え、その募集をかけると10名ほどの中高生が集まりました。生徒たちは弦楽器に非常に興味を持ち、熱心に弾きに来るようになりました。未経験者ばかりですが、さすが中高生、半年も経つと楽器の腕も上げ、中には経験者で自分の楽器を持って来る生徒もいました。２０２３年秋「生徒有志による弦楽合奏」が誕生しました。

演奏も上達していくと弾いているだけでは物足りなくなります。そこで宗教部と聖歌隊に協力をいただき、演奏も



2024年2月アヴェ・ヴェルム・コルプス


2024年11月クリスマスツリー点灯式



2024年10月ソプラノリコーダー協奏曲ハ長調



2025年10月バッハG線上のアリア

しやすいモーツァルト作曲「アヴェ・ヴェルム・コルプス」に取り組み、２０２４年2月の中学礼拝で披露をさせてもらいました。

弦楽オーケストラ研究会結成へ

一度人前で演奏すると当然生徒からは「次は?」ということになります。そこで文化祭や校内で演奏していくために研究会の申請を行いました。２０２４年4月「弦楽オーケストラ研究会」として生徒部及び学校より承認が下り、週2回活動していくことになりました。

２０２４年度は10月に高校礼拝でヴィヴァルディの「ソプラニーノリコーダー協奏曲ハ長調」、リコーダー独奏は私が吹きました。11月には文化祭演奏、アニメソングや易しいクラシック曲等、初めて3曲演奏しました。11月末のクリスマスツリー点灯式でも初の試み、聖歌隊と共に讃美歌を3曲演奏しました。２０２５年度は10月の高校礼拝でバッハ作曲「G線上のアリア」、11月の文化祭ではなんと高校3年生生徒の独奏ヴァイオリンによるヴィヴァルディの「ヴァイオリン協奏曲イ短調」他、充実したプログラムを演奏しました。そしてこの年もクリスマスツリー点灯式で聖歌隊との讃美歌演奏を行いました。

２０２４年度末にはこれまで以上に演奏の場を増やすために「弦楽オーケストラ同好会」への昇格願いを行いました。同好会を経てクラブともなれば大阪府芸術文化連盟オーケストラ部門等にも加盟して他校と演奏が行えたり、学外で定期演奏会を開催出来たりするのですが、研究会では校内のみの活動となります。

今後に向けて

本校では約20年前にクラブ新設の凍結が決まっていたようでした。そのために同好会昇格が生徒部及び学校より却下され、生徒たちもこれにはガッカリでした。しかし生徒たちは常に前向きで、楽器の腕も上達させながら、研究会として出来ることに現在熱心に取り組んでいます。

学内においてもまだ知られてはいませんが、同志社香里中学校・高等学校にもオーケストラのクラブが存在します。是非今後共、本校の「弦楽オーケストラ研究会」をよろしくお願いいたします。



2025年11月文化祭ヴァイオリン協奏曲



2025年11月クリスマスツリー点灯式

同志社クローズ・アップ

見えざる一本の柱　女子部創立150周年記念礼拝　森一郎先生

女子中学校・高等学校

教頭・『清風』編集監修　酒井（さかい）　由行（よしゆき）

4月21日、栄光館ファウラーチャペルにて、女子部創立150周年記念礼拝を守りました。奨励題は「見えざる一本の柱」、聖書はコリントの信徒への手紙一　四章十八節、本校元校長・森一郎先生による奨励です。

――・――

わたくしはこの同志社女子中学校・高等学校で40年間理科の化学の教師でお世話になり、今から17年前に定年退職しました。現在は昔から女子部とよばれているこの学校の昔のことに関心があり、週に一度学校に寄せていただき調べさせていただいております。水曜日、栄光館の2階の父母の会室あるいは静和館地下の図書室にいさせてもらっています。

女子中高では従来から今日の4月21日を女子部創立記念日として記念礼拝として守っております。この記念日の礼拝の起源は130年ほど前の1897（明治30）年に同志社女学校（私たちの学校の前身）が創立の20周年記念式を持ったのが最初で、それ以来、続けられています。その根拠・理由は新島先生が記録された文書である『同志社記事（社務第18号）』という同志社に残っている古い書類に「4月21日柳原（やなぎわら）邸に於いて女学校開設ス」と書かれていることに基づいています。この開設したというのは1877（明治10）年の4月のことです。これから考えると今年ではなく来年が150周年になります。

が、なぜ今年が150周年になるといわれているのかというと、次のような事実があります。

同志社の始まりは、1875（明治8）年の11月29日に新島襄、山本覚馬とキリスト教の宣教師であるJ．D．デイヴィスの3人による男子校の同志社英学校の開校です。このJ．D．デイヴィスはアメリカン・ボード（海外にキリスト教を広めるための活動をしている団体の本社）に対し早くから、同志社には女子のためにも教育が必要であることを訴え、女性の若い宣教師を派遣してほしいと要望していました。それに応えて1876（明治9）年4月に、A．J．スタークウェザーが同志社に派遣されました。そして

スタークウェザーはそのころデイヴィスが借用していた旧柳原邸に住むことになりました。

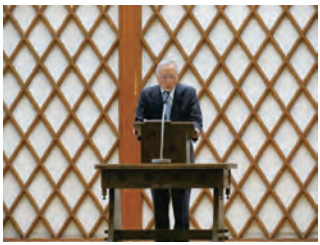
そこで、男子校の同志社英学校が開校された翌年の1876（明治9）年の10月24日に、同じ柳原邸でこの女性宣教師スタークウェザー先生によって私塾Kioto Home（当時はアメリカに報告するときこのように呼んでいた）として12名の生徒で始まりました。このことはスタークウェザー先生がアメリカの友人に送った手紙の内容からわかりました。同志社女子中学校・高等学校という大きな流れの最初の一滴がここにあります。その場所は、今の京都御苑の中の迎賓館の位置あたりになります。そのころは京都御苑といっても今のように石垣が周りを取り囲んだものでなく、紫宸殿のある御所（小御所とよく呼んでいますが）を土塀に囲まれたたくさんのお公家さんの屋敷が取り囲んだようになっていました。ほとんど空き家状態で、その中の一つの空き家になっていたお公家さんの柳原邸跡をデイヴィス先生が借りていました。このお公家さんのお屋敷から始まった私塾から考えると学校が始まって今年が150周年に当たります。お兄ちゃんの男子校である同志社英学校から、1年遅れの妹の女学校になります。

当時の生徒さんの思い出に、「お公家さんの屋敷の跡で荒れ果てた板敷ばかりの家を借りて、授業と云うほどでは無い稽古で始まった。」とあるように、ささやかな芽生えですが仮住まいで学校が始まりました。

当時京都に於いて外国人は住むことにも京都府から許可を得なければなりませんでしたし、ましてや学校を正式に開設する権限は与えられていませんでした。このため、翌年の4月に新島襄先生が代表として正式に京都府に申請して同志社分校女紅場を開設されたのです。

それ以来2026年の今日までスタークウェザー先生の私塾から考えて150年間、多くの先生方や更には生徒さん方の働きがあって現在の規模の学校にまで成長してきました。しかし、これまでの道のりは決して平坦ではなく何度も苦境に立たされてきました。

新島先生は京都に、徳育の基本をキリスト教主義に置いた同志社（正式には官許同志社英学校）を創立されました。徳育とは学校で学んで得た知識をどのように使うかを考える心を育てる大切な教育です。



日本におけるキリスト教に対しては徳川幕府の時代の1613（慶長8）年に禁止され、その禁止が撤廃されたのが1873（明治6）年で、260年もの間、続いていたわけです。その禁止が解かれて2年後に京都で同志社が生まれたのです。「キリスト教はだめです」ということが260年間、何代にもわたって言い継がれてきた、キリスト教禁止とい

うことが十分に浸透していた世の中の風潮があり、そう簡単にその意識が変わるものではありません。同志社の根幹であるキリスト教に対しては常に疑いの目がむけられ、協力が得にくい周りの状況が存在していたのです。

そんな時代に、Kioto Home である女学校は仮住まいで始まりました。当然、専用校舎が欲しいのですが校舎を建てるための土地探しは非常に困難でした。キリスト教を標榜する同志社に対しては絶えず役人や地主の反対があり周りの疑惑の目に阻まれ、思うようにはいきませんでした。現在この学校がある場所はお公家さんの二條家の屋敷跡でこれを購入するのは大変難しいことでした。同志社の新島襄の名義では売ってもらえませんでした。そこで新島先生を尊敬し理解していた大沢善助さんという人に相談し、その結果、近くに住んでいた材木商の堀本利慶さんという人に頼んでその人の名義で購入してもらいました。そして専用校舎を建てることになったのです。校舎の建築から完成するまでその材木商の人の名義で所有されなければなりませんでした。１８７８（明治11）年のことです。学校が始まって二年後のことです。現在の静和館のところにあたります。今の場所に移って１４８年目になります。

この後続いて、１８９０（明治23）年、明治政府は天皇を中心としての忠君愛国を主旨とする教育の理念を表している「教育勅語」という教育の方針（儒教主義的徳育の強化で教育理念の指針となるもの）を発布、続いて１８９９（明治32）年、文部省は「訓令一二号」という法律を発布し、学校に於いては宗教を教えたり宗教行事をしないこと、と通達しました。（公教育では宗教の分離を通達した。）この法律に従うと同志社女学校というのは、法律に規定されている「同志社高等女学校」となり、毎日の礼拝を守ることも聖書を教えることもできなくなるわけです。同志社は創立の時から礼拝を守り、また聖書を教えることはその根幹です。それで同志社は宗教教育を継続するため法令による「高等女学校」ではなく、学校の格を下げて各種学校の道を選んだのです。そして「高等女学部」の名称で礼拝と聖書の授業を続けました。これは大変な決断です。なぜなら学校を卒業してから上級学校に進学を希望してもその資格が得られないことを意味するわけです。

幸い同志社には女子専門学校ができ、試験で高等女学校と同等と認められたため、ほとんどの上級学校には進む資格が得られました。それでもほとんどです。皆さんの古い先輩の方から東京の大学を希望したが断られ、別の学校に進学しましたという話を直接聞いたことがあります。そこまでしてキリスト教主義を貫く決断をしたわけです。（男子校では徴兵免除に資格がなくなることも含まれる。）

それでも太平洋戦争の開戦以後、軍部の力が政治に対して強くなり、キリスト教主義教育に対しても厳しく、敵国の宗教であるという理由で、キリスト教ということに圧力をかけるようになってきました。

当時教頭（実質は校長と同じ）であった末光信三先生の思い出の記録には「戦時中キリスト教がどんなに嫌われたことか、あれは敵国の宗教だとして軍人政府からも、国粋論者からも、極力排斥されたものである。…同志社からキリスト教を放棄させようとして、あらゆる手段が講ぜられ、当時同志社から文部省に申請していた授業料値上げの問題と交換条件に、高等女学部を高等女学校とせよと、京都府庁を通して伝達してきたのである。…」とあります。それでも末光先生は京都府から通達してくる（戦争を続けることに繋がる種々の）行事には従っておられましたが、「キリスト教主義教育があってこそ同志社である。」との考えは守っておられました。その姿勢を見た当時学生であった卒業生は「末光先生は心は最後まで売られる事は無かった。」と証言しておられます。

それでも、周りからの圧力はさらに強くなり、ついに1945（昭和20）年「同志社高等女学部」は終わり4月1日から「同志社高等女学校」に学校名が変更せざるをえなくなりました。それは学校内での宗教教育はできないことを意味します。最も大事とする根幹が学校内で続けることができなくなったわけです。

そこでキリスト教主義を守るために、学校での朝礼の前に学校外に当たる同志社同窓会の建物をお借りし、有志の生徒を集めて礼拝を守り、土曜日には聖書の授業も続けられました。

1945年8月15日、日本の敗戦で戦争は終結、11月1日からはそれまで礼拝と朝礼の二本立てであったものが学校内で礼拝としてここ栄光館ファウラーチャペルでパイプオルガンの奏楽で正式に再開され、更に生徒たちには授業で聖書も教えられ同志社として高等女学校には活気が戻りました。

開校以来、種々問題があっても状況をみてキリスト教を徳育の基本とするキリスト教主義を「一本の柱」として守ってきたことは我が同志社の誇りであり、今後もその精神を受け継ぎ、守り続けることが現在の私たちの未来へ受け継ぐべき義務と考えます。

毎日の礼拝は（通知簿に）評価をされることはありません。しかし同志社にとっては根幹であり、学校で得た種々の知識を、色々な場面でどのように運用するかの自分の考えを育てる、すなわち良心を育成する大切な時間です。同志社女子中学校・高等学校ならではの特色ある最も重要な行事なのです。

皆さんもこの思いを大切にしてほしいと願います。

同志社クローズ・アップ

きらり輝く生徒へのインタビュー ～トライアスロンの魅力～

国際中学校・高等学校

教頭 二股（ふたまた） 一郎（いちろう）

帰国生徒が多く集う同志社国際中学校・高等学校では、中高大一貫教育の強みを生かし、一人ひとりが持つ多様な個性・バックグラウンドを輝かせる教育に取り組んでいます。勉強はもちろん、生徒たちが実現したいこと、夢中になって挑戦していることを全力で応援したいと考えています。

今回は、トライアスロンの選手として小学生のときから活躍し、現在も数々の大会で輝かしい成績を収めている横井侑希さん（高校2年生）を紹介します。

―トライアスロンを始めたきっかけを教えてください。

小学3年生のとき、京都市内でトライアスロンスクールを運営している監督から声をかけられたのがきっかけです。トライアスロンという競技を知らなかったのですが、私自身3歳の頃からずっとスイミングを続けていて、ランニングも同志社小学校では京都市小学校大文字駅伝大会予選会に出場するなど、もともとからだを動かすのが好きだったので、スイム（水泳）、バイク（自転車）、ラン（ランニング）の総合タイムで順位を競うトライアスロンは、面白そうだな、やってみたいなと興味を惹かれました。



―チャレンジ精神にあふれていますね。実際に練習を始めて、今までのスポーツと違ったことなどはありますか。

トランジションと言って、例えばスイムからバイクに移行するときに、ウェットスーツやスイムキャップを外して、バイクシューズやヘルメットを身につけるなど次の種目に移る準備をしなくてはなりません。足が水で濡れていたりすると、うまくシューズに履き替えられなかったり、初め

ての経験でタイムロスをすることも多かったのですが、「コツコツは勝つコツ」と言われるように、何度も繰り返し練習することで、今では競技で少し遅れを取ってもトランジションで挽回できるくらい得意になりました。

―トライアスロンは鉄人レースと呼ばれていますが、今までつらかったことや苦しかったことなどはありますか？

中学生になったとき、監督から「選手チームで頑張ってみないか」と誘われて、自分も将来オリンピックなど国際大会への参加を目標にするようになりました。現在は、週3回、早朝6時から7時前までプールで泳いで、その後、学校で授業を受け、選手育成チームの練習に参加して夕方から夜までバイクやランの練習、そして体幹を鍛えるエクササイズなどをずっと続けています。土曜や日曜も練習を休んだことはありません。急に身長が伸び、思うようにからだが動かなかった時期もあるのですが、心肺機能を高めるために長距離のジョギングを取り入れたり、誰かに抜かされてもマイペースで力を出せるように気持ちを切り替えたりして、練習でくじけそうになっても、小学4年生からスクールで一緒に切磋琢磨するチームメイトと励まし合いながら乗り越えてきました。普段の努力が順位やタイムとして目に見えるので、大きな達成感がありますね。

―海や川、坂道など、自然環境を利用したコースで難しいことはありますか？

中学生や高校生の大会では、岐阜県を流れる長良川とその周辺がトライアスロンの舞台となります。流れや波のある川で、息継ぎをしながら前方に浮かぶブイ（折り返しの目印）を一瞬で視認するのは容易ではありません。最初は難しくて思うようにからだが動かなくても、毎日のトレーニングで実戦を意識し、技術を磨くことで、ヘッドアップのとき目だけを素早く動かせるようになったり、自分がレベルアップしていくのを実感できるのが楽しいですね。バイク競技では向かい風が強くてペダルが重く感じることもありますが、駆け引きを楽しみながら美しいコースを走ることができるのもトライアスロンの魅力だと思います。

―高校生になって、全国の大会で活躍されていますね。

トライアスロンには級制度が定められていて、認定記録会でのスイムとランのタイムに基づいて認定されます。中学生までは23級から24級の間を行ったり来たりする状態だったのですが、16歳になり、1500mから3000mへと距離が変わりました。初めて3000mに挑戦した認定





記録会では23級でしたが、ジュニア選手権への出場に必要な22級を突破し21級を取得しました。U19の最高峰である日本ジュニアトライアスロン選手権大会（JOCジュニアオリンピック大会）に出場、ジュニア女子の部で8位に入賞することができました。もともと私はランに苦手意識があって、思うような走りができなかったのですが、レベルの高い大会に出場し、強い選手と競い合うことで、自分の弱点や克服すべき課題が見えてきたことは大きな収穫となりました。また、今年5月に開催された大阪城トライアスロン大会2025では、スプリント高校生女子において総合1位で優勝し、スプリント女子総合でも優勝しました。大阪城の外堀がスイムコースで、天守閣を見上げながら泳ぐのはとても貴重な経験でした。

―今後の目標について教えてください。

U19のトライアスロンの競技では、1位選手のタイムから5％以内のタイムでゴールすれば、ジュニアランキングのポイントが付与されます。昨年出場した日本ジュニアトライアスロン選手権大会は8位入賞でしたが、この基準をクリアできなかったので、今年は順位を上げるとともに、トップとのタイム差をできるだけ縮めることを目標にしたいと思います。今後は、ジュニアランキングにランクインし、国際大会にもどんどん参加して世界で活躍できる選手になりたいですね。

―最後に、同志社国際中高で学んだことなどを教えてください。

同志社国際中高には、英語や中国語が話せたり、楽器の演奏が得意だったり、多様なバックグラウンドを持った友だちが周りにたくさんいて、これからグローバルな世界を目指す私にとって大きな刺激になっています。自主性や個性を大切にしてくれる雰囲気にあふれているのが魅力だと思います。

※追記

7月26日に行われた「第28回日本ジュニアトライアスロン選手権（長良川）、JOCジュニアオリンピックカップ」に出場し、ジュニア選手権女子の部4位に入賞しました。また、ジュニアランキングのポイントも獲得することができました。

同志社クローズ・アップ

ようこそー DIA Library へー

国際学院

初等部副校長　ロハス　亜紀（あき）

子どもたちの大好きな場所
～蔵書数の多さは国内トップクラス！～

皆さんは、「学校でお気に入りの場所はどこですか。」と聞かれたら、何と答えますか。訪れるとほっとしたり、安心したり、はたまたわくわくしたり、嬉しくなったり。そんな場所が一つでもあると、学校に行く楽しみが増えるものです。

同志社国際学院初等部にも子どもたちのお気に入りの場所がたくさんありますが、今回はその中でも人気の高い図書館をご紹介したいと思います。

本校は「図書室」ではなく、「図書館」と呼んでいます。バイリンガル校である本校では、子どもたちは「ライブラリーに行ってきます！」と英語を交えながら図書館に出かけて行く姿が良く見られます。図書館に入ると、扉の目の前には保護者会のサブ・グループであるライブラリーGの方々が季節ごとに飾り付けをしてくださるコルクボードが待ち受けており、来館する子どもたちを温かく迎えてくれます。

本校の図書館の蔵書数は二万八千冊を超え、物語から説明文、図鑑や百科事典はもちろんのこと、科学や自然にかかわる雑誌や新聞などを取りそろえています。全国図書館協議会の二〇二五年の調査によると、全国の小学校図書室の平均蔵書数は一万二十三冊でしたので、本校の図書館はその約三倍も本があることになります。この規模の図書館を持っている小学校はなかなかありません。バイリンガル教育を行っていることから、英語の本の



蔵書数も多く、子どもたちは図書バッグがはちきれんばかりに日英それぞれ本を借りては、嬉しそうに教室に戻っていきます。

本校の図書館は円形をしており、天井が高く、とても開放的な空間です。また、ガラスがふんだんに使われているため、明るい光が存分に差し込みます。そのガラスの壁越しに図書館前の中庭が良く見えることも自慢の一つです。休み時間には遊具で遊ぶ子どもたちの姿や山の木々が風にそよぐ様子を見ることができることから、とても気持ちの良い空間になっています。



この円形の図書館ですが、アルファベットのブイの字をした校舎のくぼみに位置付けられています。そのブイの字は鳥の羽をイメージして設計されたもので、図書館を卵に見立て、鳥が卵を温めている様子を表していると聞いています。学びの中心である図書館を校舎の真ん中に据え、子どもたちが大きく育ち、巣立つその日まで、サポートをする場所でありたい、そのような願いが込められています。

休み時間には本を借りる子どもたちであふれる図書館ですが、授業ではどのように活用されているのでしょうか。

今年度、本校の三年生は「個人探究」を行っています。これは子どもたちの「好き！」や「やってみたい！」を育てることを目的の一つとしています。自分の興味のあるトピックを選び、一人一人がそのトピックを深めていく学びを行う予定です。まずは「自分の気になるもの」を見つけるところからスタートしました。

三年生の教員は、図書館司書と協力し、約二四〇冊の本を「食べ物」「宇宙」「スポーツ」「生き物」「体・健康」など十二のグループにカテゴライズしました。それらを多目的ルームのテーブル十二台に配置し、子どもたちに自由に手に取らせます。子どもたちは自分が気になる本を選び、中身をじっくり見ていきます。もし途中で「これは違うな。」と思ったら、次の本に移るのです。自分が「これ！」と思う本に出合うまで、様々な分野の本をのぞき見して



いきます。この作業をすることにより、自分が何に興味があるのかを知るきっかけになるとともに「図書館にはこんな本があるんだな。」と知る機会にもなりました。

三年生の子どもたちはこの後自分の気になるトピックを選び、「なぜ」「どうして」を解決すべく、それらについて個人探究を進めていく予定です。

一年生は、保護者の方にご来校いただき、クラスの子どもたちに図書館で読み聞かせをしてもらう活動を行っています。お友達のお父さんやお母さんが来てくださるので、子どもたちは「今日は誰のママやパパがどんなお話を読んでくれるのかな。」と心待ちにしています。図書館の真ん中に据えられたカーペットのスペース（ごろん、と横になって本が読めるスペースです）に集まり、お話に聞き入ります。



六年生は、卒業発表にあたる「エキシビション」の準備のため、図書館を頻繁に訪れる予定です。自分が選んだトピックについて情報を集め、自分の「問い」や「疑問」を解決すべく、インターネットの情報だけでなく、様々な媒体を使ってリサーチを行っていきます。

図書館は学びのリソースだけではありません。友達とけんかをしてしまったとき、ちょっぴり心がおれそうになったとき。そんなときにも是非訪れてほしい場所です。絵本の言葉に慰められたり、元気をもらったり。

本校にとって図書館はなくてはならないみんなのお気に入りの場所になっています。

本校にお立ち寄りの際は、是非図書館にも足をお運びください。きっと、皆さんのお気に入りの場所になること間違いありません。

同志社クローズ・アップ

たくさんの愛を受けて　～たてわり活動を通して～

小学校

教諭　北山（きたやま）　亜耶（あや）

六年生との出会い

同志社小学校では、毎年新しく仲間になる一年生を、全校を挙げてお迎えしています。四月は、全校児童が新しい仲間との出会いをとても楽しみにしており、毎日のように上級生が一年生の教室をのぞきに来ています。一年生が学校生活に早く慣れるよう、教員はもちろん、二～六年生の児童が役割を分担し、様々な角度からサポートしています。

新入生の第一歩となる入学式では、六年生が受付や教室への案内など、様々な場所でお迎えを担当します。一年生の教室では、式が始まるまでの時間に一緒に折り紙を折ったり絵本を読んだりして、楽しく過ごします。緊張で体が固くなっていた一年生も、六年生とおしゃべりをするうちに表情が和らいでいきます。そして、入学式には六年生と手をつないで入場します。ドキドキでいっぱいの一年生にとって、小学校で初めて出会ったお兄さん、お姉さんは、かけがえのない存在となります。



６年生のお姉さんが絵本を読んでくれます。



緊張していた１年生も、式に向かう頃には笑顔が見られるようになります。

生活の中での交流

小学校生活がスタートすると、お掃除の仕方は五年生が教えてくれます。また、給食の時間には四年生が準備をし、

徐々に当番のやり方も教えてくれます。四年生も、お手伝いに行く日をとても楽しみにして、毎日張り切って教室にやって来ます。一年生もにこにこと嬉しそうに「四年生、ありがとうございました。」と感謝の気持ちを伝えます。新しい生活のあれこれを、お兄さん、お姉さんから丁寧に教えてもらうことで、できることが増えるとともに、どんどん新しい絆が結ばれていきます。

学校生活に少し慣れた頃には、六年生と一緒に遠足に出かけます。六年生は、グループ散策のコースを考えたり、一年生が楽しめる遊びを企画したりと、事前にしっかりと準備をして臨みます。六年生手作りのしおりをもらった時、一年生はとっておきの笑顔を見せていました。一緒においしいお弁当を食べ、たくさん遊んだ時間は、忘れられない素敵な思い出となります。



五月には、二年生がペアになって学校の案内をしてくれます。六月には、三年生が「お気に入りの場所」を紹介し、一緒に遊んでくれます。素敵な招待状をもらったりお礼のお手紙を書いたりすることで、一人一人がお兄さん、お姉さんとのつながりを深めていきます。さらに七月には、三年生が夏祭りに招待してくれます。射的や水鉄砲遊びなど、三年生が用意したたくさんの楽しいブースを回り、一学期最後の時間を満喫します。

このように、一年生は入学したその日から上級生からのたくさんの愛を受けて生活を送ります。二学期に行う「スポーツフェスティバル」、一年を通して掃除や遊びを一緒



給食を手伝う４年生



に行う「ワイルドローバー活動（縦割り活動）」など、たくさんの活動を通して縦のつながりを深めていきます。そして、二年生になる頃には「わたしもあんなお姉さんになりたい。」「六年生になったら、あんなリーダーになりたい。」という憧れの気持ちを持って進級します。同志社小学校の伝統として、下級生への優しい気持ちと上級生へのあこがれが、こうして毎年受け継がれていくのです。



６年生となかよし遠足









２年生と学校たんけん



3年生にお礼のお手紙



真剣に遊ぶ経験
～小学校教育へ円滑に接続するために～

幼稚園

園長　矢田（やた）　貴美代（きみよ）

真剣に遊ぶ子どもたち

昨年、この時期に書かせていただいたトピックでは、本園で子ども達が生活をする様子を通して、幼児期の教育についてご紹介をいたしました。

私は、同志社幼稚園の園長になり、今年度で2年目になります。それまでは、伊丹市の教育委員会事務局に10年ほど在籍していましたので、2年目になった今も、子ども達との生活が新鮮で、毎日出勤することを楽しみにしています。

この4月に驚いたことがありました。春休みが明け、新学期初日、子ども達は登園するやいなや園庭に飛び出し、昨日まで園庭で遊んでいたかのように、それぞれが園庭のあちらこちらで遊び始めました。ダンゴムシはどこにいるかをよく知っていて、花が植えてあるプランターを力づくで動かし、しゃがんで夢中になってダンゴムシを集め始めます。そのまなざしは真剣そのものです。入園式を終えると、新入園児の3歳児も「ダンゴムシはどこにいるの?」と担任に聞いていましたが、そのうちに先輩たちの真似をして、草むらやプランターのそばにしゃがみ、ダンゴムシを黙って見つめます。

子どもが夢中になった時はまっすぐなまなざしで、真剣な表情が見られます。一言で「遊び」とは言え、その姿は興味・関心がぐっと深まる瞬間であり、遊びを通して探求や学びが始まるのだと、改めて感じました。



幼児期における「遊び」
～学びに深さと広がりをもたらす、遊び込み～

「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議」による報告書（以下、報告書）では、幼児期の遊びとは、余暇活動ではなく、学びそのものであり、幼児が遊び込むことができる環境（学びに深さと広がりをもたらす環境）をいかに構築するかが教員の指導における重要な課題である、と記載されています。この報告書は２０１０年のものですが、私自身はこの解釈がわかりやすく、様々なところで用いています。

左の写真は、５歳児クラスです。自由に遊ぶ時間ですが、２名の園児はイメージするものを形にするため、黙々と製作をしています。５歳児クラスは保護者にご協力をいただき、空き箱や発泡スチロールの皿など、各家庭から様々な廃材を持ってきていただいています。併せて、ガムテープや画用紙などの素材も環境として用意し、子どもは自分の遊びに必要なものを作ります。



左の写真は、カタツムリの赤ちゃんを見つけた時のものです。５歳児クラスの子ども達は息を切らし、大事件が起こったかのように教えてくれました。そこから、クラスのサークルタイムでカタツムリの赤ちゃんが生まれていることについて共有をしたようです。保育室には既に図鑑も用意してありましたので、食べ物を調べる子どももいました。学級活動でカタツムリの絵を描いたりもしました。家でカタツムリについて調べ、紙に書いて持ってきた子どももいます。家からカタツムリ図鑑を持って来る子どももいました。

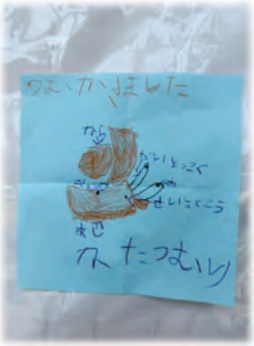
こうして、カタツムリとの出会い、触れ合いが、「梅雨期の自然に触れ、興味関心を持つ」という教育課程上の学びにつながり、クラス全体の学びとなります。

ダンゴムシ、廃材製作、カタツムリの事例はどれも自由に遊ぶ時間のエピソードです。子ども達にとれば遊びなのですが、その表情やまなざしはどの子どもも真剣です。





５歳児学級活動サークルタイム



「カタツムリの足はどこにあるの？」という疑問から、家でカタツムリの体について調べ、紙に書いて持ってきたもの（5歳児）

左の写真は4歳児の学級活動です。椅子取りゲームをしていましたが、椅子の取り合いでもめています。4歳児の1学期は、折り合いをつけることがまだ難しいです。両者とも「私の方が先に座った！」と譲りませんでした。なぜなら、真剣だからです。このような時、担任は必ず子どもに投げかけ、共に考えます。子どもはそれぞれが、自分の考えを言います。「じゃんけんで決めたらいい。」「鬼決めみたいにしたら？」などの声もあれば、泣きそうになっている友達のそばに行き、肩を撫でて慰める姿もあります。



こうして遊びの中では、友達とぶつかり、時には我慢をしたり、友達を慰めたり、助けたりと、活動に付随して人とのかかわり方、ルールを守るなどの社会性を学びます。なくてはならない学びです。

小学校教育へ接続するために
～「遊び込み」から「学び込み」へ

今年度に入り6月初旬、同志社小学校1年生の授業を参観する機会をいただき、送り出した卒園生の様子を見てきました。小学校1年生の1学期の姿を見ることで、幼児教育を振り返ることができると、私は常々考えています。

一人一人の姿を見て、幼稚園時代に好きなことに出会えていただろうか、夢中になって物事に取り組む経験をどれだけしただろうか、喧嘩をして仲直りをして、友達と遊ぶことは楽しいという経験ができただろうかと。

幼児が学ぶための手法は、活動や体験などいわゆる「遊び」です。幼児自身は何かを学ぶために遊んでいるのではありません。「楽しい」から遊ぶのです。ただ、その「楽しさ」の中には、心地よい緊張感、試行錯誤、葛藤、集中、没頭、達成感や充実感などの要素が必要であり、併せて人とのより良い関り方を学ぶことができるようにすることが幼稚園の使命だと再認識いたしました。いわゆる「遊び込む」経験が「学び込む」経験になるのだと。そのためにも、子ども達には3年間の幼稚園生活の中で「遊び込む」経験を保障し、小学校以降の教育の土台を丁寧に育成していくことが重要だと考えております。一人一人が自信をもって小学校へ行くことができるよう、支えてまいります。

同志社絵本が 2026 年 11 月に完成

同志社創立150周年記念事業の一環として、このたび「同志社絵本」を制作しました。制作は、同志社未来創造プロジェクトメンバーを中心に構成された絵本制作チームが企画・検討を進め、絵と文は絵本作家のたちばなさきこさん（1983年同志社女子大学家政学部卒業）に担当いただきました。

本作品は、現代の同志社に通う小学生と園児が同志社幼稚園で遊んでいる時に栄光館の模型のオルゴールを見つけ、その音色に導かれて新島襄先生と八重さんが生きた時代の京都へタイムスリップする物語です。子どもたちが物語を楽しみながら、新島襄先生と八重さん、そして同志社の歴史や精神に親しみをもてる内容となっています。

11月29日に開催する「Doshisha New Day」では、たちばなさきこさんによる絵本の紹介に続き、同志社女子大学現代社会学部プレイフル・マルシェ研究会の学生による読み聞かせを実施します。また、当日来場される皆さまには本絵本をプレゼントする予定です。

さらに同日13時からは、同志社小学校、同志社国際学院初等部の小学1・2年生および同志社幼稚園の園児を対象に、「手作り絵本教室」を開催します。たちばなさきこさんが講師を務め、プレイフル・マルシェ研究会の学生が子どもたちの創作をサポートします。



同志社絵本は、以下のページもしくは二次元コードからご覧いただけます。
https://150th.doshisha.ed.jp/150th-info/detail/405

※絵本をご希望の方は、件名を「同志社絵本希望」とし、氏名・住所・電話番号を明記のうえ、お問い合わせのメールアドレスまでお申し込みください。お一人様1冊までとし、着払いで郵送いたします。（締切：2027年1月末まで）



絵本作家 たちばな さきこさん　メッセージ

卒業生として『同志社絵本』の制作に携わることができ、大変うれしく思っています。制作にあたっては、同志社幼稚園から大学まで訪問し、園児や児童、生徒、学生の皆さんが生き生きと学び、活動する姿に触れました。その経験が絵本のイメージを膨らませる大きな力となりました。同志社人ならどなたでも新島襄先生と八重さんにお会いしたいという思いを同志社の小さな子供たちに託しました。この絵本を通して、新島先生と八重さんのことを知り、より身近に感じていただければ幸いです。

主な作品

『どうぶつ村のごちそうごよみ』（全4冊・あかね書房）、『おさるのおおきなきのおみせ』（ひさかたチャイルド）、『ここはどうぶつセンターえき』『どうぶつてつどうのえきべんたいかい』（ひかりのくに）など。月刊絵本では「10ぴきこぶた」シリーズ、「おさるのきょうだい」シリーズ、「どうぶつてつどう」シリーズなどを手掛けています。

お問い合せ先：学校法人同志社　創立150周年記念事業事務室
TEL：075-251-2710　E-mail：ji-150th@mail.doshisha.ac.jp

ハリス理化学館同志社ギャラリー展示ご案内

ハリス理化学館同志社ギャラリーは、創立者新島襄の志と同志社の歴史等を資料で紹介する展示施設です。ハリス理化学館は、J.N.ハリスの寄附をもとに1890（明治23）年に竣工し、永らく同志社における理化学教育の拠点となった建物です。現在、国の重要文化財に指定されています。

第39回企画展、同志社大学京田辺キャンパス開校40周年記念

「同志社の教育改革―京田辺校地の現在地―」

期　　間：2026年9月1日（火）～11月1日（日）10：00～17：00
場　　所：2階　企画展示室
主　　催：同志社大学同志社社史資料センター
協　　力：同志社大学歴史資料館

2026年4月、同志社大学京田辺キャンパスは開校から40年を迎えました。これを記念し、同志社と京田辺[1]の接点から現在までを振り返る企画展を開催いたします。

同志社と京田辺の歴史的な接点は南山義塾という学校でした。1882年4月30日に同志社の創立者新島襄がこの学校の開校式に参列し、祝辞を述べたことが始まりです。新島は、この学校を通じて、新島とほぼ同年代の京田辺の人々に出会います。彼らは、開校したばかりの同志社の活動に理解を示し、新島が医学校を設立しようとした時、大学設立のために募金運動を展開した時に、金銭も含めて支援を続けました。京田辺は新島が挑んだ教育改革に賛同と援助を惜しみなく提供した人々のゆかりの土地のひとつです。

新島永眠後、およそ100年の月日を経て、1986年京田辺に同志社大学の新しい校地が開かれました。新しい校地の開校には、校地の狭隘化解消、法令対応など、同志社の経営陣が並べるいくつかの理由がありました。他方で、同志社で働く教職員、受け入れ側の京田辺の市民、そして、京田辺の自治体それぞれに立場や意見がありました。その意見が完全にまとまらずとも、京田辺校地で実施される様々な行事を通じて交流を深め、現在も同志社と京田辺は共に歩む未来を想像し、創造する歩みが続いています。

本展では、同志社と京田辺の関係性を物語る歴史資料を紹介します。近現代史を物語る資料のかたちにも注目します。

[1] 1997年に綴喜郡田辺町は市制施行により京田辺市となりましたが、本展では一律して「京田辺」と表記しています。同志社大学京田辺キャンパスへの改名は2000年です。



新島襄宛書簡　伊東熊夫（初代南山義塾校長、当時山城製茶会社社長）1888年4月2日付
新島襄の大学設立運動をサポートしていたことを示す資料

【入 場 料】無料　　【開館時間】10：00～17：00（最終入館 16：30まで）
【閉 館 日】日曜日（企画展開催中を除く）・月曜日・祝日・4月30日～5月2日・夏期休暇中の一定期間・年末年始
【場　　所】同志社大学 今出川キャンパス
※駐車場、駐輪場はありません。公共交通機関をご利用ください。



お問合せ先
ハリス理化学館同志社ギャラリー事務室
HP：https://harris.doshisha.ac.jp/
E-mail：ji-harjm@mail.doshisha.ac.jp
TEL：075-251-2716　FAX：075-251-2736

新島旧邸公開のお知らせ

新島旧邸の敷地には、幕末まで京都大工頭中井家の屋敷があり、明治初年には中井屋敷を公家華族の高松保実が所有していました。新島襄は、この高松邸の一部を賃借して仮校舎とし、1875（明治8）年11月29日に生徒8名で同志社英学校を開校しました。翌年、英学校の一部は薩摩藩邸跡地の専用校舎に移りますが、その後、新島は高松邸の土地を入手して自宅を1878（明治11）年に建築しました。これが、現在の新島旧邸です。同志社発祥の地に建つ新島旧邸を、同志社の建学の理念を体感する場として公開しています。

【公開期間】4～7月、9～11月、3月

①通常公開　毎週火・木曜日（祝日は閉館）

②特別公開　毎週土曜日

春の特別公開　2026年4月1日～5日（2026年度分は終了）

オープンキャンパス　8月1・2日（2026年度分は終了）

秋の特別公開　10月1～5日

ホームカミングデー　11月1日

創立記念日　11月29日

大学卒業式　2027年3月20～22日

※公開日の詳細はHPをご覧ください。

https://archives.doshisha.ac.jp/archives/old_mansion/old_mansion.html

【公開時間】10：00～16：00（入館受付は15：30まで）

【見学対象】①通常公開

敷地内から建物内部を見学（建物内部には入場できません）。

②特別公開

敷地内および建物内部（母屋1階と付属屋）に入場できます。

※旧邸建物内に一度に入れる人数は20名程度とします。

【入 場 料】無料

【場　　所】京都市上京区寺町通丸太町上ル松蔭町

※駐車場、駐輪場はありません。公共交通機関をご利用ください。

【団体見学申込】10名以上の団体は、予約が必要です。団体予約は、見学日の1週間前までに電話・FAX・E-mailにて下記にお申し込みください（電話受付は10：00～16：30）。※日・月・祝日は閉室



お問合せ先
ハリス理化学館同志社ギャラリー事務室
HP：https://harris.doshisha.ac.jp/
E-mail：n-kyutei@mail.doshisha.ac.jp
TEL：075-251-2716　FAX：075-251-2736

同志社女子大学創立 150 周年記念式開催のお知らせ
～ホームカミングデー 2026 を同日開催～

2026年10月24日は、同志社女子大学の創立150周年記念日です。
記念式や特別イベントに加え、ホームカミングデー2026を同日開催いたします。

日　　時：2026年10月24日（土）　10：00～17：00
会　　場：女子大学今出川キャンパス　栄光館ファウラーチャペル　他
入場無料・要事前申込み（右の二次元コードより申込みください。）

プログラム

【創立150周年記念式】12：30～17：00

第1部　記念式　12：30～14：10
学芸学部音楽学科在学生・卒業生・教員等により編成する同志社女子大学創立150周年記念管弦楽団・合唱団の演奏と、記念式典を執り行います。

第2部　創立150周年記念トークセッション　14：30～15：30
俳優・キムラ緑子さん「人生を“好き”で固めろ！～私からのメッセージ～」
本学卒業生で俳優のキムラ緑子さんをお迎えしたトークセッションを開催します。
トークセッションの司会やキムラさんのお相手としてお話しをお伺いするのは、同じく本学卒業生で、MBSアナウンサーの清水麻椰さんです。


司会進行：
清水麻椰さん


キムラ緑子さん

第3部　卒業生・教職員等による懇親会　16：00～17：00
卒業生と教職員、退職教職員による自由懇談会です。

【ホームカミングデー2026】10：00～17：00
本学のあゆみを知るパネル展、卒業生等によるPR・出展コーナー、図書館及び史料センター企画展自由見学、スタンプラリー等を予定しています。

お問い合わせ：同志社女子大学広報部広報室広報課
TEL：0774-65-8631
E-mail：koho-t@dwc.doshisha.ac.jp

同志社校友会からのお知らせ

1885年「アルムニ会」として発足したのが、同志社校友会の始まりで、140年の間に約38万人の会員が存在するまでになりました。活動の目的は、卒業生の親睦と同志社の発展に寄与することです。

コロナ禍においてはアルバイトができず経済的に困窮している学生の食生活サポートを行いました。

2023年度、コロナ前の状態に戻りつつあったため、食支援については、経済支援から栄養バランスを考えた支援へと切り替え、大学内の食堂で補食として小鉢の提供をしました。2024年度からは、2015年以降実施していた100円朝食を再開させ、朝食摂取を通じて、規則正しい学生生活を送ってもらえるよう支援をしています。

今後も学生に寄り添った支援を実施していく予定です。

活動の概要

①卒業生と繋がる同志社校友会

2026年6月現在、国内に48の支部、海外に36の支部が存在しています。現地の校友会が卒業生のみならず学生へのサポートも行っています。

連絡先は、二次元コードまたは、同志社校友会 で検索してください。

②大学と繋がる同志社校友会

同志社大学が掲げる「同志社大学ビジョン」の推進など大学と連携した活動を行っています。

③学生を支える同志社校友会

「同志社校友会奨学金」、「同志社スポーツ奨学金」、海外留学生支援として「グローバル人材育成奨学金」など各種給付型の奨学金制度を通じて学生生活が充実するようサポートを行っています。

同志社校友会本部事務局
TEL　075-251-4393
E-mail info00@doshisha-alumni.org

同志社同窓会（これまでの歩みと、年間の諸活動）



同志社同窓会
エンブレム

同志社同窓会は今から133年前（1893年）に創設されました。同志社女子部のルーツとなる、アリス・J・スタークウェザー校長の女子塾（京都ホーム）開設から17年後にあたります。初代会長となった能勢（高田）道子の他、湯浅（徳富）初子、海老名（横井）みやの3名が設立準備委員となり、当時の女学校卒業生に女学校に関わる有志が加わって、会員96名で発足しました。第1回年会では「同志社女学校同窓会規則」（全10条）が制定され、翌年には、現在の『同志社同窓会報』の前身となる『女学校期報』が発刊されています。

創立時の「同志社女学校同窓会規則」に謳われている精神は、現在の「同志社同窓会会則」にも受け継がれており、「キリストの教えに基づき会員相互の交誼を厚くし、同志社と会員との関係を密接にして同志社の発展に寄与する」（「同志社同窓会会則」第3条）という目的を実現するために、エンブレムに「地の塩」「世の光」（マタイによる福音書 第5章）のラテン句を掲げて、母校で培われたキリスト教精神を喚起しております。また一方で、母校への支援（奨学金贈呈や寄付など）を可能とするために、同志社同窓会館の運営、女子中高の購買部・食堂の運営、バザー開催などの収益活動を続けています。女子部でのバザー開催は創設期にM・F・デントンの熱意によって根づいたものですが、バザーでの販売品を制作する「お仕事会」も長い歴史をもち、現在も有志の会員が同志社同窓会館に集まって、工夫をこらしたグッズを作ってくださいます。遠方の方も含めて大勢の卒業生からもご寄贈品をお届けいただき、皆様のご支援にいつも感謝しております。

女子部の諸学校（女子中高、女子大学および旧制の女専、高女）の卒業生・修了生からなる、同志社同窓会の会員は、現在では100,000人を超え（会報発送は約65,000）、支部は62（国内59支部、海外3支部）に及びます。本部は、各支部との連携を保ちつつ、評議員、常任幹事、幹事による会合を重ね、同窓生と母校をつなぐ、より良い同窓会をめざして、日々の活動に取り組んでおります。

年間活動（会議・行事・その他）

会議　春（5月）と秋（9月）の幹事会 / 常任幹事会（隔月）/ 評議員会（ほぼ毎月）

行事　7月　同志社同窓会総会（3年に一度、総会前日に支部長会）
10月　バザー（同志社同窓会館）
11月　同志社リユニオン（学校法人同志社、大学、同志社校友会と共催）において、同窓会ルームで展示およびコーヒー提供（2026年度は大学京田辺キャンパス）
12月　ミス・デントン永眠記念墓前礼拝（相国寺 長得院）
2月　新島襄生誕記念会（学校法人同志社、同志社校友会と共催）
3月　女子高、女子大学卒業生対象入会式

その他　奨学金贈呈、会報発行、同志社同窓会館の運営（紫苑会講習として、ヨーガ、華道、茶道、料理教室を開講 / 貸室）、女子中高の購買部・食堂の運営、お仕事会など

* ホームページ　https://dojo-doso.org/　* E-mail　dojodoso@juno.ocn.ne.jp

編集後記

本号では「京田辺市×同志社大学×同志社女子大学―地域と歩み、共創の未来をひらく―」と題した京田辺キャンパス開校40周年記念の特集座談会の記事を掲載しています。1986年に開校された京田辺キャンパスは、本年で40周年という大きな節目を迎えました。座談会では、開校以来の歩みを振り返るとともに、近年の教育・研究環境の変化、京田辺市との地域連携、さらにはこれからの大学と地域のあり方について、さまざまな立場から語られています。

京田辺キャンパスの40年は、大学の発展だけでなく、地域の変化とともに歩んできた40年でもあります。開校当初は交通アクセスや周辺環境もまだ発展途上で、授業が終わると学生の多くが帰ってしまうような場所であったといいます。しかし、その後、新しい学部・研究科の開設や教育研究施設の充実が進み、大学は文化情報学部、理工学部、生命医科学部、スポーツ健康科学部、心理学部、グローバル・コミュニケーション学部と脳科学研究科が集まり、理系・文理融合系を担うキャンパスへと発展しました。また、女子大学は、学芸学部、現代社会学部に加え、薬学部、看護学部の学部が開設され、医療系人材の育成拠点となっています。広大な敷地があったからこそ、大型実験設備や新たな教育研究施設を整備し、同志社の新しい可能性を切り拓くことができたという指摘は、京田辺キャンパスの特徴をよく表しているように思います。

また、座談会を通して強く印象に残るのは「大学のあるまち」としての京田辺市と大学との関係です。京田辺市と両大学との包括協定をはじめ、生涯学習、スポーツ、学生による地域活動、公共交通の課題解決に向けた産官学連携など、その取り組みは実に多岐にわたっています。大学で生み出された知を地域の課題解決につなげるだけでなく、地域そのものが学生にとっての学びの場となり、市民との交流が学生の成長につながっているところに、大学と地域との連携の意味があるのでしょう。

40周年はこれまでを振り返るためだけの節目ではありません。少子化による大学を取り巻く環境の変化、交通や地域との関係、施設のあり方など、京田辺キャンパスにはこれから考えていくべき課題もあります。座談会の最後に語られているように、大学と地域がお互いの存在を尊重し、共に発展していく関係をさらに深めながら、この地から新しい価値を生み出していくことが、次の10年、20年へ向けた歩みになるのではないでしょうか。

ご多用の中、本号にご寄稿いただいた諸氏には、この場を借りまして篤くお礼を申し上げます。また、本号の編集にあたりご尽力いただいた広報課の末廣明日香氏にも、心より感謝を申し上げます。（脇田）

●同志社広報委員会小委員会委員

○印委員長

○大学グローバル・コミュニケーション学部教授　脇田　里子
大学神学部教授　森山　央朗
大学文学部教授　山田　徹遼
大学社会学部准教授　奥井　遼
大学法学部教授　坂井　岳夫
大学経済学部准教授　迫田さや香
大学商学部教授　髙橋　広行
大学政策学部教授　野田　遊
大学文化情報学部准教授　大井　将生
大学理工学部教授　稲岡　恭二
大学生命医科学部准教授　髙柳　真司
大学スポーツ健康科学部准教授　新井　彩
大学心理学部教授　竹原　卓真
大学グローバル地域文化学部教授　和泉　真澄
女子大学学芸学部教授　関口　里英
女子大学現代社会学部教授　真宮　奈美子
女子大学薬学部教授　中澤　洋介
女子大学看護学部教授　杉原百合子
女子大学表象文化学部助教　陰山　涼
女子大学生活科学部教授　杉浦　実
中学校・高等学校事務長　鎌田　伸一
香里中学校・高等学校事務長　池上　作
女子中学校・高等学校事務長　磯田　信行
国際中学校・高等学校事務長　貴志　浩行
小学校事務長　川嶋　久佳
国際学院事務長　堀岡　英利
幼稚園園長　矢田貴美代
法人事務部長　田中　尚美
大学総合企画部長　吉川　貴士
法人事務部校友同窓課長　内山　一栄
大学学長室総合企画部広報課長　寺本　正芳
女子大学広報部広報室広報課長　川添麻衣子

※職名は同志社広報委員会小委員会発足時のものです。

●編集協力　アルカダッシュ

●同志社時報の申し込み

・送料（ゆうメール着払い：1冊264円）のみのご負担でご講読いただけます。
・お申し込みは、綴じ込みハガキをご利用ください。
・宛先　〒602-8580 京都市上京区今出川通烏丸東入 同志社大学広報課

同志社時報　第162号
編集人　脇田里子
発行人　八田英二
発行　学校法人同志社
同志社大学広報課
電話（075）251−3120
印刷所　株式会社あおぞら印刷
２０２６年１０月１日発行

『同志社時報』はWEBで見られます！

同志社時報は大学公式ＨＰより全ページ、カラーでご覧いただけます。
是非、WEBからご覧ください。
バックナンバーも無料でご覧いただけます。



スマートフォン・タブレット端末からは、下記コードより
『同志社時報』にアクセスください。

パソコンからは『同志社時報』で検索。

同志社時報　検索

UD FONT by MORISAWA　同志社時報は見やすいユニバーサルフォントを採用しています。

同志社時報 第162号 2026年10月発行 ISSN 0389-3111

